

天城町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

—公営住宅建設事業（前里新団地）に伴う発掘調査報告書—

Naka *Zato*
中里遺跡

2010年3月
鹿児島県大島郡天城町教育委員会

見返し（さし紙）

見返し（さし紙）

見返し (遊び)

見返し（遊び）

—公営住宅建設事業（前里新団地）に伴う発掘調査報告書—

Naka *Zato*
中里遺跡

2010年3月
鹿児島県大島郡天城町教育委員会

中表紙（裏）

序文

天城町は、徳之島の北西部に位置し、亜熱帯の豊かな自然に囲まれた風光明媚な地で、多くのスポーツ選手が合宿に訪れ、毎年トライアスロンが開催されるなどスポーツリゾート地として全国的に知られています。

また、天城町は、先人たちの教えである「ユイの精神（助け合い）」を基本理念として町づくりを行っており、人のぬくもりと恵み豊かな町を目指しております。

この度「公営住宅建設事業（前里新団地）」に伴い、中里遺跡の緊急発掘調査が行われました。調査の結果、縄文時代～弥生時代にかけての時期に相当する住居跡や中世の時期に相当する建物跡などが確認され、縄文時代晩期～弥生時代と中世の二つの時期の生活跡が残る貴重な複合遺跡であることがわかりました。

また、遺跡からは黒曜石や中国産陶磁器、長崎産石鍋など他地域との交流を示す遺物が多く出土しており、当時の人々が島外の人々と活発に交流を行っていた様子がうかがえます。

これらの成果をまとめた本報告書が広く活用され、徳之島を含めた南西諸島の歴史を解明する一助となり、さらに町の皆様の埋蔵文化財にたいする関心とご理解を深められる契機となることを祈念いたします。

発掘調査から報告書作成までご協力を頂いた鹿児島県教育庁文化財課、県立埋蔵文化財センター、伊仙町教育委員会、株式会社パスコの牛ノ濱修氏、さらには御指導くださった諸先生方に感謝申し上げます。

天城町教育委員会
教育長 吉田 時充

報告書抄録								
ふりがな	なかざといせき							
書名	中里遺跡							
副書名	公営住宅建設事業（前里新団地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	天城町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	(4)							
編著者名	具志堅 亮							
編集機関	天城町教育委員会							
所在地	〒 891-7692 鹿児島県大島郡天城町平土野 2691-1 TEL 0997(85)5243							
発行年月日	西暦 2009年 3月 31日							
所収遺跡名	所在地	コード 市町村	北 緯 °' "	東 緯 ° °' "	調査期間	調査面積	調査原因	
中里遺跡	鹿児島県 大島郡天 城町天城	5313-41	92-28	27° 48' 53"	128° 53' 50"	20090224 ～ 20090918	777 m ²	公営住宅 建設事業 (前里新 団地) に 伴う埋蔵 文化財発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
中里遺跡	集落	縄文時代 晚期相当期 中世	竪穴住居跡 3基 土坑 1基 掘立柱建物跡 ピット列 鍛冶炉	仲原式土器、 石斧 黒曜石製石器 中国産陶磁器 カムイヤキ 滑石製石鍋				

例言

- 1 本報告書は、公営住宅建設事業（前里新団地）に伴う中里遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は平成 20 年度から 21 年度にかけて天城町の単独事業として鹿児島県教育庁文化財課の指導・支援のもと実施した。
- 3 本書で用いたレベル数値は、海拔高で、方位は磁北を示す。
- 4 遺物番号は全て通し番号とし、本文及び挿図、図版番号とも一致する。
- 5 遺構・遺物の縮尺はそれぞれの挿図内に提示してある。
- 6 発掘調査については、平成 21 年 2 月 24 日から同年 4 月 10 日まで株式会社パスコ牛ノ濱氏が担当し、平成 21 年 4 月 10 日から同年 7 月 14 日まで天城町教育委員会具志堅が担当した。
- 7 第 4 章自然科学分析については札幌大学教授高宮広土氏に玉稿いただいた。
- 8 第 5 章放射性炭素年代測定は株式会社 パレオ・ラボに委託し、玉稿いただいた。
- 9 本書の執筆・編集は具志堅が担当した。
- 10 出土した遺物は天城町教育委員会で保管し、その一部を天城町歴史文化・産業科学資料センター「ユイの館」にて展示を行う。

目次

1. 本文目次	第1節 鹿児島県天城町中里遺跡 ······	58
序文	より出土した植物遺体	

報告書抄録	第2節 放射性炭素年代測定 ······	64
-------	----------------------	----

例言

第5章 総括

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯 ······	1
-----------------------	---

第2節 調査の組織 ······	1
------------------	---

第3節 調査の経過 ······	2
------------------	---

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境 ······	5
------------------	---

第2節 歴史的環境 ······	6
------------------	---

第3章 発掘調査の成果

第1節 発掘調査の概要 ······	11
--------------------	----

第2節 層序 ······	11
---------------	----

第3節 遺物の分類 ······	14
------------------	----

第4節 第Ⅰ文化期の遺構と遺物 ······	16
------------------------	----

(1) 遺構検出状況 ······	16
-------------------	----

(2) 1号住居跡 ······	16
------------------	----

(3) 2号住居跡 ······	23
------------------	----

(4) 3号住居跡 ······	30
------------------	----

(5) 土坑 ······	32
---------------	----

第5節 第Ⅱ文化期の遺構と遺物 ······	34
------------------------	----

(1) 遺構の検出状況（遺構配置状況）	34
---------------------	----

(2) ピット群 ······	34
-----------------	----

(3) 木棺墓 ······	37
----------------	----

(4) 堀立柱建物跡 ······	38
-------------------	----

(5) ピット列1 ······	41
------------------	----

(6) ピット列2 ······	41
------------------	----

(7) 鍛冶炉跡1 ······	43
------------------	----

(8) 鍛冶炉跡2 ······	43
------------------	----

第6節 包含層出土の遺物 ······	46
---------------------	----

(1) Ⅱ層出土遺物 ······	46
-------------------	----

(2) Ⅲ層出土遺物 ······	52
-------------------	----

第7節 表採遺物 ······	55
-----------------	----

第4章 自然科学分析

2. 掲図目次

第1図 天城町遺跡分布図 ······	9
---------------------	---

第2図 中里遺跡位置図 ······	10
--------------------	----

第3図 調査区配置図 ······	12
-------------------	----

第4図 土層断面作成箇所 ······	13
---------------------	----

第5図 D区北壁土層断面図 ······	13
----------------------	----

第6図 中里遺跡全体遺構配置図 ······	17
------------------------	----

第7図 1号住居跡 ······	18
------------------	----

第8図 1号住居跡出土遺物（1） ······	19
-------------------------	----

第9図 1号住居跡出土遺物（2） ······	20
-------------------------	----

第10図 1号住居跡出土遺物（3） ······	21
--------------------------	----

第11図 1号住居跡出土遺物（4） ······	22
--------------------------	----

第12図 2号住居跡 ······	24
-------------------	----

第13図 2号住居跡遺物出土状況 ······	25
-------------------------	----

第14図 2号住居跡出土遺物（1） ······	27
--------------------------	----

第15図 2号住居跡出土遺物（2） ······	28
--------------------------	----

第16図 2号住居跡出土遺物（3） ······	29
--------------------------	----

第17図 3号住居跡 ······	31
-------------------	----

第18図 3号住居跡出土遺物 ······	31
-----------------------	----

第19図 土坑 ······	32
----------------	----

第20図 土坑出土遺物 ······	33
--------------------	----

第21図 第Ⅱ文化期遺構配置図 ······	35
------------------------	----

第22図 ピット群出土遺物 ······	36
----------------------	----

第23図 C区第Ⅱ文化期遺構配置図 ······	37
--------------------------	----

第24図 木棺墓 ······	38
-----------------	----

第25図 木棺墓出土遺物 ······	39
---------------------	----

第26図 堀立柱建物跡 ······	39
--------------------	----

第27図 D・E区遺構配置図 ······	40
-----------------------	----

第28図 ピット列1 ······	41
-------------------	----

第29図 ピット列1出土遺物 ······	41
-----------------------	----

第30図 ピット列2	42	遺構検出作業
第31図 ピット列2出土遺物	43	重機掘削跡
第32図 鍛冶炉跡1	44	住居跡堀り下げ作業
第33図 鍛冶炉跡2	44	遺跡から南方向を望む
第34図 II層出土鍛冶関連遺物	44	発掘調査と並行して住宅建設工事着工
第35図 D区包含層遺物出土状況	47	図版2 D調査区北壁土層断面
第36図 II層出土遺物(1)	48	1号住居検出状況
第37図 II層出土遺物(2)	51	2・3号住居跡礫・遺物出土状況
第38図 II層出土遺物(3)	52	2号住居跡土器出土状況
第39図 III層出土遺物	53	2・3号住居跡完掘状況
第40図 表採遺物(1)	56	図版3 土坑半裁状況
第41図 表採遺物(2)	57	土坑炭化植物遺体検出状況
第42図 中里遺跡より出土した炭化植物遺体	63	木棺墓検出状況
第43図 歴年較正結果	66	木棺墓半裁状況①
		木棺墓半裁状況②

3. 表目次

第1表 天城町遺跡一覧表	8	堀立柱建物跡
第2表 1号住居跡出土遺物観察表	23	鍛冶炉跡
第3表 2号住居跡出土遺物観察表	30	鍛冶炉跡断面
第4表 3号住居跡出土遺物観察表	31	図版4 C区完堀状況
第5表 土坑出土遺物観察表	32	E区完堀状況
第6表 第II文化期遺構出土遺物	45	図版5 D区遺構検出状況
第7表 包含層出土遺物観察表	54	D区完堀状況
第8表 表採遺物観察表	57	図版6 土器I～IV・底I～V類
第9表 中里遺跡より出土した植物遺体	61	図版7 土器V類
第10表 ピックアップ法により回収された植物遺体	61	図版8 土器VII～XII類
第11表 中里遺跡出土の植物遺体 (遺溝別)	62	図版9 石斧
第12表 測定試料及び処理	64	図版10 磨敲石・黒曜石製石器・チャート製石器
第13表 放射性炭素年代測定及び歴年較正の結果	65	図版11 黒色土器・滑石混入土器・布目压痕土器 朝鮮系無釉陶器・カムイヤキ
		図版12 中国産陶磁器
		図版13 滑石製石鍋・滑石製品・鍛冶関連遺物 三角墳形石製品
		図版14 カムイヤキ・三角墳形石製品

4. 図版目次

図版1 調査地伐採作業	
調査地点近景	
重機攪乱土除去作業	

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

天城町建設課は、大島郡天城町天城前里地内において、町営住宅建設を計画し、事業予定地内の埋蔵文化財の有無について県教育庁文化財課に照会した。事業予定地内には縄文時代の周知の遺跡である中里遺跡（92-28）が含まれており、遺跡の取り扱いについて、県文化財課・町建設課・町教育委員会の三者で協議した結果、埋蔵文化財の保護と事業の推進を図るために、確認調査を実施することになった。確認調査は平成20年7月22・23日に6ヵ所のトレーニングを設定して行った。その結果、埋蔵文化財包蔵地と確認されたため、再度、平成20年11月7・8日に範囲確認調査を行った。

その結果に基づいて、建設予定地の900m²の本調査を実施することになった。発掘調査は平成21年2月24日から9月18日まで実施した。

第2節 調査の組織

調査の組織は以下の通りである。

平成20年度（発掘調査）

起因事業名	公営住宅建設事業（前里新団地）		
事業主体者	天城町建設課		
調査主体者	天城町教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	天城町教育委員会	教育長	川村 善良
調査事務	〃	社会教育課長	田平久太郎
	〃	社会教育課長補佐	鶴 秀樹
	〃	社会教育課主幹兼係長	村田 博正
	〃	社会教育課係長	和田 智磯
	〃	社会教育課社会教育指導員	春 利正
調査担当	株式会社 パスコ		牛ノ濱 修
調査指導	鹿児島県教育庁文化財課		前迫 亮一
	南九州考古学研究所		新東 晃一
	喜界町教育委員会		澄田 直敏
調査支援	伊仙町教育委員会	社会教育課文化財主査	新里 亮人
	株式会社パスコ		木口 裕史
	株式会社パスコ		翁長 武司
発掘作業員	西松一美・栗原光男・喜原義成・向井一雄・西川悦子・梅山ス エ・稻マサ・金子恵美子・森田憲子・具志堅清大・宮城幸也 ・青木絵美・上江洲陽子・渡辺美幸		

平成21年度（発掘調査）

起因事業名	公営住宅建設事業（前里新団地）
-------	-----------------

事業主体者	天城町建設課		
調査主体者	天城町教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	天城町教育委員会	教育長	川村 善良
調査事務	〃	社会教育課長	田平久太郎
	〃	社会教育課長補佐	村田 博正
	〃	社会教育課主幹兼係長	神田 昌宏
	〃	社会教育課係長	杉山 肇
	〃	社会教育課社会教育指導員	春 利正
調査担当	株式会社 パスコ		牛ノ濱 修
	天城町教育委員会	社会教育課学芸員	具志堅 亮
調査支援	伊仙町教育委員会	社会教育課文化財主査	新里 亮人
発掘作業員	西松一美・小林秀樹・梅山スエ・金子恵美子		

平成 21 年度（発掘調査報告書作成）

起因事業名	公営住宅建設事業（前里新団地）		
事業主体者	天城町建設課		
調査主体者	天城町教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	天城町教育委員会	教育長	吉田 時充
調査事務	〃	社会教育課長	田平久太郎
	〃	社会教育課長補佐	村田 博正
	〃	社会教育課主幹兼係長	神田 昌宏
	〃	社会教育課係長	杉山 肇
	〃	社会教育課社会教育指導員	春 利正
調査担当	天城町教育委員会	社会教育課学芸員	具志堅 亮
調査指導	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
調査支援	伊仙町教育委員会	社会教育課文化財主査	新里 亮人
整理作業員	小林秀樹・盛美由紀・近田いづみ		

第3節 調査経過

発掘調査は、平成 20 年度が 2 月 24 日から 3 月 31 日、平成 21 年度が 4 月 1 日から 9 月 18 日まで行った。経過は日誌抄により略述する。

2 月 24 日（火）調査開始。作業員へのオリエンテーション実施。遺跡内の伐採。

2 月 25 日（水）伐採。A・B 区の清掃。

2 月 26 日（木）遺跡周辺の伐採。C・D・E 区清掃。

2 月 27 日（金）伐採後の清掃。廃土処理（重機）。

3 月 2 日（月）B 区搅乱層排除（重機）。D 区清掃。

- 3月3日 (火) D区Ⅱ層上面掘り下げ。北・南壁面トレンチ(50cm幅)設定掘り下げ。
- 3月4日 (水) C区清掃。D区トレンチ掘り下げ。E区表土排除。
- 3月5日 (木) 雨のため作業中止。
- 3月6日 (金) D区トレンチ掘り下げ。
- 3月9日 (月) 雨のため作業中止。午前中、遺物水洗い。
- 3月10日 (火) C・D区Ⅱ層上面掘り下げ。
- 3月11日 (水) D区トレンチ掘り下げ。
- 3月12日 (木) C区1号住居跡検出。D区トレンチ設定後掘り下げ。E区表土排除。
- 3月13日 (金) D区トレンチ掘り下げ。E区遺構検出、鍛冶炉跡2基・ピット検出。
- 3月14日 (土) 午前中雨のため作業中止。D区Ⅱ～Ⅲ層堀り下げ。白磁出土。
- 3月15日 (日) C区1号住居跡検出。D区Ⅱ～Ⅲ層掘り下げ。滑石製品、羽口、突帯文土器出土。
- 3月16日 (月) C区2号住居跡検出、カムイヤキ完形出土。D区Ⅱ～Ⅲ層掘り下げ。
- 3月17日 (火) C区2号住居跡検出、写真撮影。D区Ⅱ～Ⅲ層掘り下げ。町議会議員7名遺跡視察。
- 3月18日 (水) D区Ⅱ～Ⅲ層堀り下げ、遺物平板実測No.1～103
- 3月19日 (木) D区Ⅱ～Ⅲ層堀り下げ、遺物平板実測No.104～153
- 3月21日 (土) C区2号住居周辺の搅乱土排除。D区Ⅱ～Ⅲ層掘り下げ。
- 3月22日 (日) 雨のため作業中止。出土遺物水洗い。
- 3月23日 (月) D区Ⅱ～Ⅲ層掘り下げ、遺物平板実測No.154～187。
- 3月24日 (火) C区1号住居周辺の清掃後写真撮影。D-2・4・6区遺構検出。
- 3月25日 (水) D-3・4・5区遺構検出。遺物平板実測No.188～209
- 3月26日 (木) C区2号住居跡遺構検出。D-1・3区遺構検出。
- 3月27日 (金) C区2号住居跡遺構検出。D-1・3区遺構検出。新東晃一氏現地指導(28日まで)
- 3月28日 (土) C区2号住居跡遺構検出。午後降雨のため作業中止。
- 3月29日 (日) 雨のため作業中止。澄田直敏氏現地指導(30日まで)。
- 3月30日 (月) 雨のため作業中止。C区 中世ピット検出後半裁。
- 3月31日 (火) 雨のため作業中止。
- 4月1日 (水) D区遺構検出。鍛冶炉跡写真撮影。2号住居遺物取り上げNo.235～256。1号住居跡遺物取り上げ。
- 4月2日 (木) E区拡張(重機にて)。E地区遺構検出。C地区1号住居、2号住居検出。土坑堀り下げ。
- 4月3日 (金) C区1号住居、2号住居跡土坑1検出。D地区ピット群写真撮影後、半裁。E地区ピット群平板実測P106～P125。
- 4月4日 (土) C区土坑1半裁終了後写真撮影。D地区ピット群半裁。平板実測P1～P105終了後ピット全面検出。C区2号住居跡内礫実測1/20。
- 4月5日 (日) C区 2・3号住居跡、土坑写真撮影。D区ピット検出。午後雨のため作業中止。
- 4月6日 (月) C区1・2号住居跡検出。D区ピット検出。実測用の区制作業。
- 4月7日 (火) C区2号住居検出実測。土坑検出断面実測。D区ピット検出。鍛冶炉跡1半裁写真撮影。

4月8日（水）C区2号住居跡、土坑1検出。木棺墓検出。D区ピット実測1/20。

4月9日（木）C区2号住居跡検出。D区ピット実測。E区ピット検出実測。

4月10日（金）C区2号住居検出。D区・E区ピット検出実測。作業員終了。

4月11日（土）D区・E区ピット群実測終了。

4月13日（月）廃土移動（重機にて）。D区清掃後ピット完掘状況写真撮影。B区P128検出、半裁、写真撮影。

4月14日（火）B区遺構配置状況平板実測1/50。D区土層確認ベルト掘り下げ。

4月15日（水）D区ベルト掘り下げ。木棺墓清掃後実測1/10。E区ピット掘り下げ。

4月16日（木）E区ピット掘り下げ。E区ピット列2横断図作成1/20。D区ベルト下層より検出ピット半裁。

4月17日（金）D区ピット半裁後全面発掘。P131白磁出土状況写真撮影。

4月18日（土）D区P131、清掃後写真撮影。

4月19日（日）C区木棺墓清掃後写真撮影、木棺墓平面実測1/10やり直し。木棺墓内土層検討。

4月20日（月）C区P133半裁後全面発掘。新里亮人氏と木棺墓の検討。木棺墓掘り下げ、層位ごとに土壤サンプル採取。

4月21日（火）C区木棺墓掘り下げ、断面図作成後写真撮影、全面発掘。

4月28日（火）D区北壁沿にトレーナー設定、掘り下げ。E区清掃後写真撮影。

4月29日（水）木棺墓清掃後、写真撮影、完掘状況実測。2号住居跡出土礫・土器取り上げ。

5月11日（月）2号住居跡掘り下げ。検出礫取り上げ。床着土器検出。

5月12日（火）雨のため現場中止。

5月13日（水）2号住居跡掘り下げ、焼土、柱穴検出。

5月18日（月）2号住居跡掘り下げ、C区2号住居跡、礫、土器検出状況実測1/20。午後雨の為現場中止。

5月19日（火）雨のため現場中止。

5月20日（水）C区ピット半裁、2号住居跡掘り下げ、3号住居跡取り上げ。

5月22日（木）C区ピット半裁。2号住居跡掘り下げ、床面検出、写真撮影。

5月23日～6月18日 現場中断。

6月19日（金）C区2号住居跡内検出溝、ピット半裁。

6月20日（土）C区ピット半裁。ピット観察表作成。

6月21日（日）C区ピット半裁。2号住居跡内検出ピット実測1/20。

6月22日（月）C区ピット断面図作成（柱痕が確認できるもののみ）、ピット全面発掘。

6月23日（火）C区ピット全面発掘。

6月24日（水）雨のため現場中止。

6月25日（木）午前中雨のため現場中止。C区ピット全面発掘。新里亮人氏と2号住居跡検討。

6月29日（月）2・3号住居跡ベルト清掃後写真撮影、壁面実測。2・3号住居跡ベルト掘り下げ。

6月30日（火）2号住居跡ベルト掘り下げ。C区ピット全面発掘。C区清掃後写真撮影。

7月9日（木）D区北壁清掃後写真撮影。D区未完掘ピット掘り下げ。

7月10日（金）D区北壁実測。D区未完掘ピット掘り下げ。

7月13日（月）C区北側拡張、ピット検出作業。掘立柱建物跡実測。

7月14日（火）現場片づけ。

8月11日（火）補足調査

9月18日（金）補足調査

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

九州島と台湾島との間に弧状に連なる島々は琉球列島とよばれ、大隅諸島、トカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島、先島諸島で構成されている。

琉球列島の中央よりやや北側に位置している奄美諸島は、奄美大島、加計呂麻島、与路島、請島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島の8島からなり、徳之島はそのほぼ中央に位置している。

徳之島は周囲 81.1km、面積は約 248km² で亜熱帯性気候に属している。年間降水量は 2000mm 前後で梅雨明けから 9 月下旬までは 25°C 以上の夏の期間が続き、冬になんでも 10°C を割り込むことはほとんどない温暖高湿である。8 月中旬から 10 月上旬にかけては台風の季節となり暴風とともに多くの雨をもたらしてくれる。

島の中央部には奄美諸島第2の高峰である井之川岳（645m）をはじめいくつもの山々が南北方向に連なり、その山々の裾野が海岸に向かってのび、その麓に海岸段丘が形成されている。

島の北側・東側では海岸段丘が海岸線まで緩やかにのびるのに対して、島の東南部・南側・西側ではおよそ標高 200m を境にして山地から隆起珊瑚礁へと変化し、広大な隆起珊瑚礁の台地が広がる。

植物相はシイを極相としソテツ・アダン・ガジュマルなどの亜熱帯植物が多くみられ、また、オキナワウラジロガシの巨木が多く残るなど、豊かな自然を今に残している。

動物相は、特別天然記念物のアマミノクロウサギやトクノシマトゲネズミ、リュウキュウイノシシ、ハブなど亜熱帯特有の動物が多くみられるが、大型の哺乳類動物は乏しい。

天城町は島の北西部に位置しており、14 の集落で構成されている。町の東側には、北から天城岳（533m）、三方通岳（496m）、大城山（329m）、馬鞍山（211m）、美名田山（437m）、井之川岳（645m）、丹發山（440m）、剥岳（382m）、犬田布岳（417m）などの山々が連なっており、その山々の分水嶺が町境となる。

これらの山麓に源を発する港川（3 km）、湾屋川（3 km）、真瀬名川（4.2km）、秋利神川（13km）などは土地を浸食しながら東シナ海へと注いでおり、特に、徳之島で最も大きな河川である秋利神川はその浸食によって深い渓谷を作りだし、河口には大量かつ多くの種類の岩石が流れ着いている。

海岸部を概観すると町のほぼ中央を流れる湾屋川を境にして北と南で地形が変化している。平土野から西阿木名にかけては隆起珊瑚礁が発達し標高 70 ~ 126m の広大な台地を形成している。海岸は急峻な断崖となり、裾礁はほとんど発達しない。台地の海側縁辺部には、塔原遺跡や千間遺跡、鍋窪遺跡、下原遺跡などの縄文後期・晩期相当期の遺跡が多く立地している。

一方、松原から浅間にかけては、山地からながれた土砂が広大な沖積地を形成しており、海岸は砂丘地となり、なだらかな汀線が続く。

中里遺跡が立地する天城集落は、天城町の中北部に当たり、町中心部である平土野の北東に立地している。天城集落は標高 40m 前後の隆起珊瑚礁の台地上に形成されており、その台地は北側へしだいに標高を減じながら湾屋川へと至り、南側は南西部に位置する平土野港に向かって落ち込むかたちで断崖を形成する。

本遺跡はその台地南西側縁辺部に位置し、平土野原遺跡が隣接して立地する。

遺跡一帯は、標高 41m 前後の平坦地となっているが、近年住宅地として開発が進んでおり、地形

の改変が著しい。現地に立つと南西側に平土野港を見下ろすことができ、南側には、塔原遺跡や千間遺跡などが立地する広大な隆起珊瑚礁の台地を望むことができる。

第2節 歴史的環境

徳之島で現在確認されている遺跡の総数は約130遺跡で、天城町で確認されている遺跡はそのうちの30遺跡を数える。

天城町の遺跡が考古学的研究の対象となったのは、玉城遺跡の発掘調査を端緒とする。

1985年に熊本大学考古学研究室によって行われた玉城遺跡の調査は奄美で初めてのグスクの発掘調査である。数条の溝と焼土、ピットがセットになる遺構や隠り井の可能性が指摘される遺構などが確認されている。出土遺物はカムイヤキ、白磁碗IV類、同安窯系青磁、滑石混入土器などで、これからから、遺跡の年代が13世紀から14世紀と想定されている。

また、この年玉城遺跡の発掘調査と併せて天城町の遺跡分布調査も行われており、先史遺跡の時代による明確な片寄りが指摘されている。天城町南部の隆起珊瑚礁の台地には縄文後期～弥生初頭にかけての遺跡（千間遺跡・塔原遺跡・鍋窪遺跡）が分布するのにたいして、天城町北部の砂丘地には弥生相当期以降の遺跡（戸ノ木遺跡・馬塔遺跡）が分布することが確認されている。

1988年には塔原遺跡の発掘調査が行われている。塔原遺跡は1980年代に兼久集落在住の向井一雄氏の採集や吉岡武美氏によって周知化された遺跡であるが、1980年代後半に塔原遺跡を含む地区に県営畠地総合改善事業が計画された際に兼久郷土史研究会を中心に同集落民の遺跡調査要望の声が高まり、1988年に熊本大学考古学研究室によって発掘調査が行われた。

塔原遺跡の調査では竪穴住居跡3基と焼土単独の遺構4基が確認されている。竪穴住居跡は地山を掘り込んだだけのものと、周壁沿に溝を掘り、溝内に珊瑚塊や石をめぐらすものの2つのタイプが確認されている。

出土遺物をみてみると、土器は嘉徳Ib式・嘉徳II式・面縄西洞式・喜念I式・カヤウチバンタ式・宇宿上層式などが出土している。

出土石器のほとんどが伐採・木材加工用の石斧や食料加工用の磨石・敲石・クガニ石などで、獸骨・魚骨が極めて少量しか出土しておらず、貝類にいたっては全く出土していないことから、「塔原遺跡では狩猟・漁労も行われていたが、より植物性食料に依存した生活が行われていた」と推察が行なわれている。

平成7・8年には、畠地帯総合整備事業に伴って再び塔原遺跡の発掘調査が行われている。

平成7年は、熊本大学考古学研究室が調査した地点から南西150mの地点（A地点）の発掘調査が行われ、最大17基にも及ぶ住居跡群が確認されている。当該地点は天地返しによる遺構の削平を免れており、集落構成を探るうえでも貴重な遺跡であるという認識から、部分発掘調査によって遺跡の年代・性格を把握したうえで現地保存を行っている。

平成8年には、1988年に熊本大学考古学研究室が発掘した箇所（C地点）の全面発掘が行われている。

この調査によって当該地点で新たに3基の住居跡（1号・2号・6号住居跡）が発見され、2号住居跡床面からは、沖縄暫定編年後期（弥生相当期以降）の土器の特徴である土器製作時の粘土接合痕が顕著に残る土器が出土しており、弥生時代に相当する住居である可能性が指摘され、塔原遺跡が繩

文時代晚期から弥生時代（前半）に相当する時期に営まれた集落とされている。

出土遺物を見てみると、宇宿上層式・仲原式土器とともに、それらに後続すると考えられる突帶をもつ甕形土器が多く出土している。北や南からの搬入土器も確認され、土器底部においては、尖底、平底、があり、在地的な型式変化と九州島の土器文化の影響が合わさって奄美独自に変遷した可能性が想定されている。

向井一雄氏による塔原遺跡採集品もその考古学的な価値の高い資料となっている。特に、氏が採集した黒曜石は石鎌7点、剥片類188点以上と点数では琉球列島で一番多い遺跡であると考えられている（小畠ほか2004）。2004年には小畠弘己氏らによって向井氏採集の黒曜石の理化学的分析が行われた結果、佐賀県伊万里市腰岳産と産地推定されており、琉球列島の黒曜石の流通経路やシステム、石器製作地の存在を考える上で貴重な資料となっている。

平成8年から10年にかけては、西阿木名の下原I～IV遺跡の発掘調査が行われ、縄文時代後期相当期の住居跡が4基確認され、縄文時代相当期の住居跡の変遷を考えるうえ重要な資料追加となっている。また、中世の掘立柱建物跡が確認されおり、玉城遺跡の独立丘陵の城塞的な立地とは違って、広い台地上に立地しているため、中世遺跡の立地変遷を考えるうえで貴重な資料となっている。

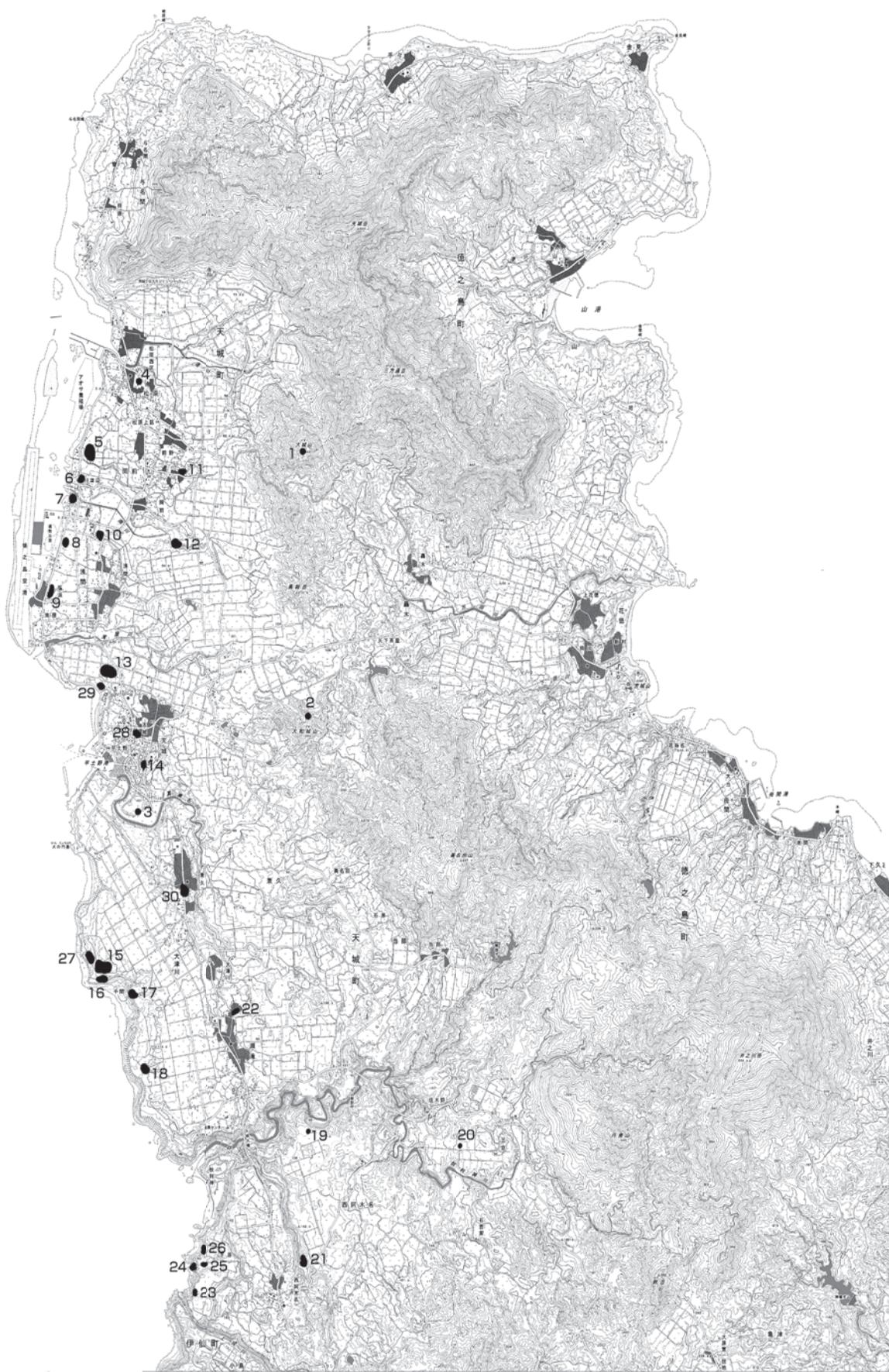
天城町における発掘調査などの考古学的調査は多くはないが、琉球列島の先史時代・中世を考えいくうえで、重要な成果や資料を提供しており、今後、さらに町内において継続的な調査活動を行う必要があると考えられる。

《参考文献》

- 天城町誌編纂委員会 1978年『天城町誌』天城町役場
伊仙町教育委員会 1983年『面縄第1. 第2貝塚』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）
伊仙町教育委員会 1984年『犬田布貝塚』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）
熊本大学考古学研究室 1985年『玉城遺跡』研究活動報告19 熊本大学考古学研究室
熊本大学考古学研究室 1988年『塔原遺跡』天城町文化財調査報告第1集 天城町教育委員会
天城町教育委員会 1999年『塔原遺跡（2）』天城町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）
小畠弘己・盛本勲・角縁進 2004年「琉球列島出土の黒曜石製石器の科学分析による産地推定とその意義」『石器原産地研究会会誌No.4』 石器原産地研究会
天城町教育委員会 2004年『下原（I～IV）遺跡』天城町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）天城町教育委員会

第1表 天城町遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物など	備考
92-1	大城跡	天城町松原字大城山	丘陵	中世		
92-2	大和城跡	天城町天城字当山	丘陵	中世		
92-3	玉城跡	天城町天城字真瀬名	丘陵	中世		昭和60年発掘調査
92-4	アガリン竿	天城町松原字アガリン竿	台地	歴史	石製フイゴ羽口	
92-5	馬塔	天城町岡前字馬塔	砂丘	縄文、弥生	土器片・石器	
92-6	尾志理田	天城町岡前字川津辺	砂丘		土器片	
92-7	オカゼン	天城町岡前	砂丘		土器片	
92-8	戸ノ木	天城町岡前字戸ノ木	砂丘	弥生	兼久式	
92-9	塩浜	天城町岡前字塩浜	砂丘		土器片	
92-10	オガミヤマ	天城町岡前字オガミヤマ	丘陵	歴史	青磁・土器片	
92-11	中尾宮塔	天城町岡前字中尾宮塔	台地	歴史	磁器・陶器	昭和63年発掘調査
92-12	鬼入塔	天城町浅間字鬼入塔	台地	歴史	青磁・白磁・染付	
92-13	大久保	天城町天城字大久保	台地	縄文、歴史	土器片・カムイヤキ	
92-14	平土野原	天城町平土野字平土原	台地	縄文	土器片	
92-15	塔原	天城町兼久字塔原	台地	縄文～弥生、中世	住居跡・土器・石器	昭和63年発掘調査・平成7・8年発掘調査
92-16	鍋窪	天城町兼久字鍋窪	台地	縄文	土器・石器	
92-17	千間	天城町大津川字千間	台地	縄文	土器・石鎌	
92-18	長竿	天城町瀬滝字長竿	台地	歴史	磁器・凹石	昭和63年発掘調査
92-19	秋利神線刻画	天城町瀬滝字中山	台地			
92-20	三京線刻画	天城町西阿木名	台地			
92-21	西阿木名	天城町西阿木名	台地	歴史	完形壺（伊仙町歴史民俗資料館蔵）	
92-22	瀬滝	天城町大津川	台地	歴史		
92-23	下原1	天城町西阿木名	台地	縄文		平成10年発掘調査
92-24	下原2	天城町西阿木名	台地	縄文		平成8年確認調査
92-25	下原3	天城町西阿木名	台地	歴史		平成9年発掘調査
92-26	下原4	天城町西阿木名	台地	縄文		平成9年発掘調査
92-27	加万塔	天城町兼久字加万塔	台地			
92-28	中里	天城町天城字中里	台地	縄文、中世		
92-29	キジ	天城町天城字喜治	台地			
92-30	中組	天城町兼久	台地	中世		



第1図 天城町遺跡分布図



第2図 中里遺跡位置図

第3章 発掘調査の成果

第1節 発掘調査の概要

中里遺跡は大島郡天城町前里 526 - 1 に位置し、標高約 42m 前後の台地上に立地している。平成 20 年 7 月に 6 か所のトレンチ調査で包含層の確認を行い、その結果に基づき、同年 11 月に建設予定地内の範囲確認を行った。計画図の A 棟～D 棟をそのまま調査区に継承し、それぞれ第 3 図のように A 区～D 区とし、浄化槽の部分については E 区とし、遺構確認のため南側に拡張を行った。

D 区は、包含層が堆積していたため、東側計画ラインを基準とし、東西・南北に 5 m 方眼を組み D - 1 ~ D - 8 と区を設定して遺物の取り上げを行った。

また C 区より検出した 2 号住居跡は、南北ラインと東西ラインとで十字に切り、北側から反時計回りに Sh02 - 1 ~ Sh02 - 4 と 4 分割して区分けを行い、遺物の取り上げを行った。

調査の結果、中里遺跡は二つの時期の生活跡を複合する複合遺跡であることが確認された。

第 I 文化期

第 I 文化期の遺構は C 区だけで確認され、住居跡 3 基及びそれに伴うと考えられるピット、焼土域をもった土坑が確認された。しかし、検出した遺構のすべてが上部を重機による掘削によって削平されており、1 号住居においては、ほとんど重機によって搅乱されていたため遺構の形状は不明である。2 号住居においては上部が削平されているものの、全体的な規格が確認できた。しかし、隣接する 3 号住居との間が重機による搅乱を受けているため、その切り合い（先後）関係は不明である。竪穴住居跡からは多くの遺物が出土している。

D 区からも第 I 文化期に相当する遺物が出土しており、特に D - 5 ~ 8 区に集中する傾向がみられた。土器では、仲原式土器を主体に突帯文系土器も出土した。石器では、石鏸・石錐・スクレイパー、磨製石斧、石皿、凹石、敲石、磨石などが出土し、また、三石角壇形石製品も表採した。

第 II 文化期

第 II 文化期の遺構は、C 区でカムィヤキの完形壺を埋納した木棺墓が検出され、掘立柱建物跡 1 基も確認されている。D・E 区では多くのピットが検出し、ピット列が 2 基確認されている。また 2 基の鍛冶炉跡も検出しており、その近辺からは鞴の羽口や鉄滓が出土している。

遺物はカムィヤキ・朝鮮系無釉陶器・青磁・白磁・黒色土器・滑石製石鍋・滑石製品・滑石混入土器・布目压痕土器（製塩土器）・鞴の羽口・鉄滓などが出土している。

第2節 層序

今回の調査においては I ~ IV 層の 4 枚の土層が確認され、II 層は色調から IIa 層と IIb 層の 2 枚に細分されている。以下に各土層の色調、性格などについて記す。

I 層：褐色土層。表土。現代の耕作土である。

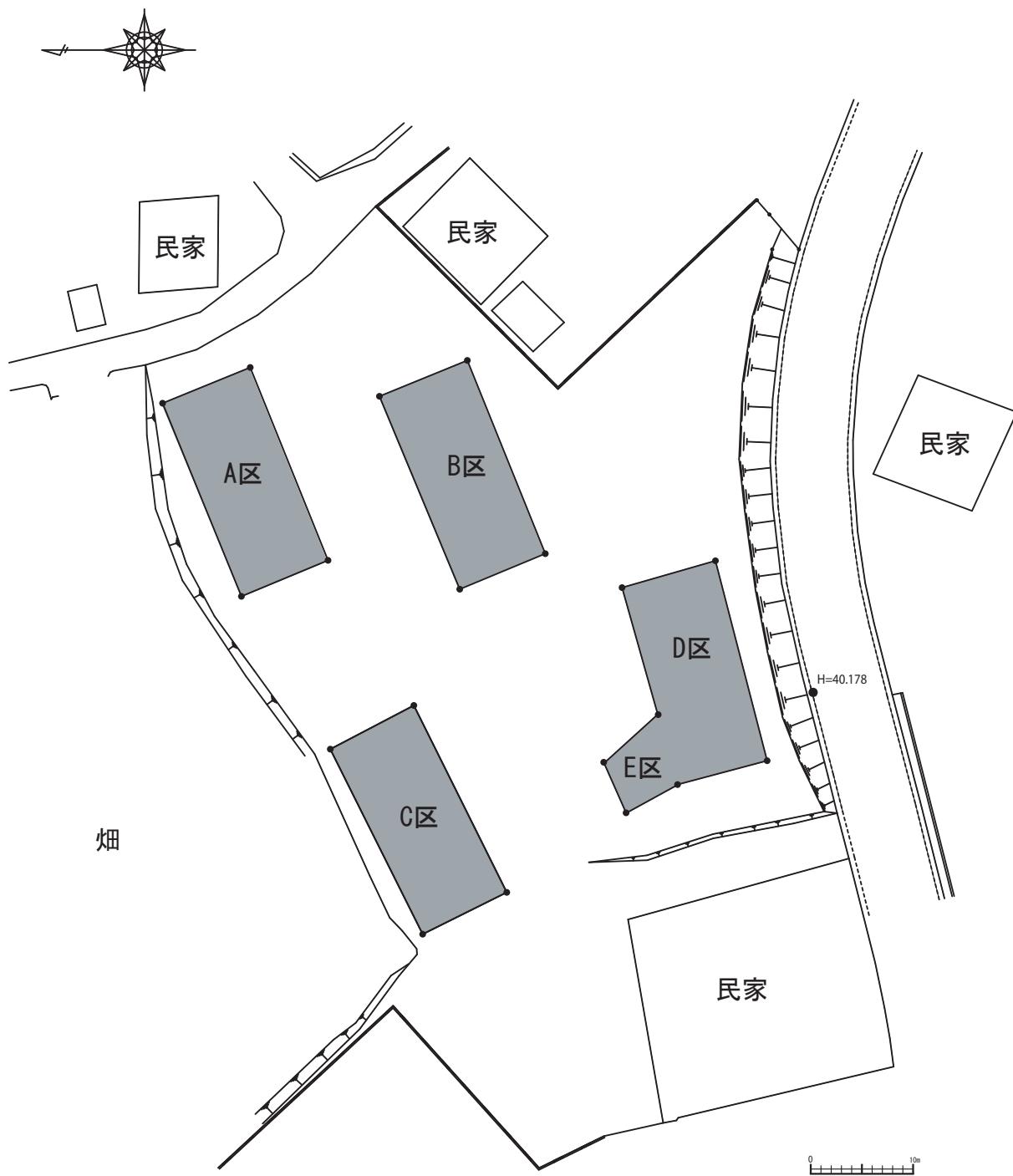
IIa 層：暗褐色土層。遺物包含層で 20cm 前後の厚さで堆積しているが、耕作によって上部が削平されおり、本来は現状よりも厚く堆積していたと考えられる。

IIb 層：暗茶褐色土層。遺物包含層で、10cm 前後の比較的薄い厚さで堆積している。本層上面に鍛冶炉跡が検出している。

III 層：暗黄褐色粘質土層。直上で遺物が出土するが、これらの遺物が上層に伴うものなのか、本層

に伴うものなのか判然としない。多くのピットなどの遺構が本層上面より検出する。

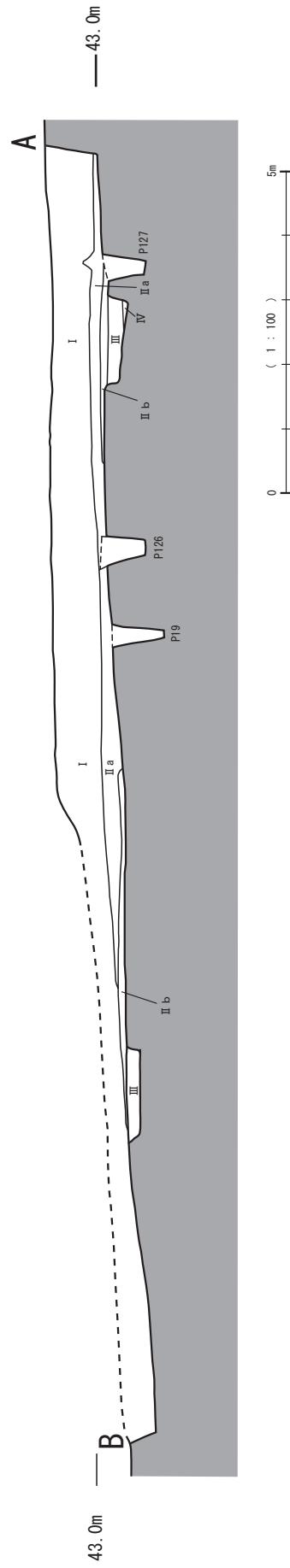
IV 層：黄褐色粘質土層。基盤層である。5 mm ~ 1 cm 大の礫を含む。



第3図 調査区配置図



第4図 土層断面図作成箇所



第5図 D区北壁土層断面図

第3節 出土遺物の分類

中里遺跡からは、土器、石器、石製品、黒色土器、滑石混入土器、布目圧痕土器、カムイヤキ、青磁、白磁、滑石製石鍋、滑石製品、羽口、鉄滓などが出土している。ここでは、一定量出土している土器、石器、カムイヤキ、中国陶磁器の分類概念を記述する。

①土器

中里遺跡からは、遺構や包含層などから多くの土器が回収されている。以下に土器の分類概念を記すが、黒色土器、滑石混入土器、布目圧痕土器については、出土点数が少ないため、個別に扱った。

I類：壺形の土器である。口縁部が略三角形に肥厚し、頸部が大きく外反するものである。口縁部以下には文様が施されており、縦位にみみず腫れ状の突帯を貼付し、その突帯の両脇に刺突文を施すもの。

II類：口縁部が肥厚するもので、三角形状に肥厚するものと、長方形状に肥厚するものがある。

III類：壺形の土器で、長頸の器形となると考えられるもので、口縁部は緩やかに外反し、器厚は薄く頸部に沈線にを施すものもある。

IV類：壺形の土器で、頸部に突帯が囲繞するものである。

V類：口縁部が肥厚または、胴部に比べ器厚が厚くなるもので、口縁部下部には有段部を形成し、厚さを減じた胴部へと移行するものである。また、口縁部下部のみが肥厚し有段部を形成するものもある。

VI類：口縁部下部に明確な突帯を有するもので、突帯は断面形が略三角形状のものと台形状のものがあるが、ほとんどが略三角形状となる。

VII類：口縁部または胴部に外耳を貼付するもの。

VIII類：口縁部が直口するもの。

IX類：口縁部に「U字」状の粘土紐を貼付するもの。

X類：外来系の土器と考えられるもの。

XI類：鉢形の土器で、口縁部が外反するもの。

XII類：不明土器を一括して扱う。

底部

底I類：尖底となるもの。

底II類：平底となるもの。

底III類：中空脚台となるもの。

底IV類：くびれ平底となるもので、底面に葉脈痕が残るもの。

底V類：ベタ底で、立ち上がり部で一端くびれ、外開きに移行するもの。

胎土

- a. 砂粒が多く、主として赤褐色を呈する。大型の個体に多くこの胎土が認められる傾向がある。
- b. 砂粒がaに比べ小さく、少ない。胎土が粉っぽく見える。小型の個体に多く認められる傾向がある。
- c. 淡赤色粒を含む胎土である。外来系土器であると考えられる、106と151にのみこの胎土がみられる。
- d. 泥質の胎土で、1 mm 大の比較的大きな白色粒を混入し、細かい粒の混入物はほとんど含まない。108・109にのみ認められる。
- e. 泥質の胎土で混入物をほとんど含まない。22にのみ認められる胎土である。

②石器

中里遺跡から出土した石器をみてみると、石斧、磨敲石、石皿、石錐、スクレイパー、使用痕のある剥片、楔形石器、石鏃、微細剥離痕剥片・二次加工剥片が出土しており、ここでは、石斧と磨敲石の分類を行う。

(1) 石斧

- I類：両刃で比較的厚みのあるもの。
- II類：両刃で扁平なもの。
- III類：片刃のもの。
- IV類：未製品と考えられるもの。
- V期：不明

(2) 磨敲石

- I類：平面形が橢円状となるもの。
- II類：平面形が円形となるもの。

③カムィヤキ

カムィヤキの分類については、新里亮人による分類（新里亮人ほか 2005）を引用した。

③中国陶磁器

中国陶磁器の分類については、太宰府市教育委員会による分類（太宰府市 2000）と森田勉による分類（森田 1982）を参考に行った。

引用・参考文献

- 新里亮人ほか 2005 『カムィヤキ古窯跡群IV』 伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書 (12)
- 太宰府市教育委員会 2000 『太宰府条坊跡X V - 陶磁器分類編 -』 太宰府市の文化財第 49 集
- 森田勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』 No. 2 日本貿易陶磁研究会

第4節 第I文化期の遺構と遺物

(1) 遺構の検出状況

第I文化期の遺構はC区のみで確認され、住居跡3基と土坑1基が確認された。住居跡は3基のうち1基（2号住居跡）のみ全体の規格が確認できる状態で検出したが、他の2基は重機による掘削を受け、全体の規格を把握することはできなかった。また土坑も、1号住居跡がほとんど重機による掘削で搅乱されているので、1号住居跡に伴うものかどうか確認できていない。そのため、今回は単独で扱うことにする。

以下、遺構ごとの所見とそれぞれの遺構内出土遺物について紹介する。

(2) 1号住居跡（第7図）

C地区の西側で確認された遺構である。上記したように重機によって掘削され住居内埋土と考えられる暗褐色土とIV層の搅乱土が方形に分布した状態で検出した。そこからは大量の土器や石器などが出土し、チャート製の石器も出土している。搅乱土を除去すると焼土とピット4基が検出した。これらは、1号住居跡に伴うものと考えられるが、判然としない。

1号住居跡出土遺物

1号住居跡は重機によって削平を受けており、多くの土器と石器が出土している。

土器

I類（第8図1）

1は口縁部が略三角形状に肥厚する壺形土器で、口縁部は外反し、ミミズ腫れ状の突帯が貼付され、その脇に刺突文が施されている。

II類（第8図2・3・4）

2は口縁部が肥厚する壺形土器と考えられ、肥厚幅は短く比較的扁平である。3は口縁部断面が方形形状に肥厚する壺形土器で、肥厚部直下を削り、肥厚部下端を明瞭に立ち上がらせる。肥厚部の貼り付け痕が明瞭に残る。4は、口縁部が略三角形状に肥厚する壺形土器である。

IV類（第8図5）

5は壺形土器であると考えられ、頸部には突帯が囲繞しその上部に单範による押し引き文が施されているように見えるが、器面の摩耗が激しく判然としない。

V類（第8図6～13）

6・7は口縁部が肥厚し口縁部下部に段を形成して胴部へと移行する。6は僅かに内傾し、7は僅かに外反する。8は薄く肥厚するが、「く」の字状に屈曲し有段部を強調している。

9・10・11は口縁部下部に突帯を貼り付け有段風に見せている。

12は、口縁部下部を削り突帯を作りだすことで、有段風に見せている。また口唇部には山形突起が付されている。13は有段部が欠損した資料と考えられ、口唇部に山形突起を貼付している。

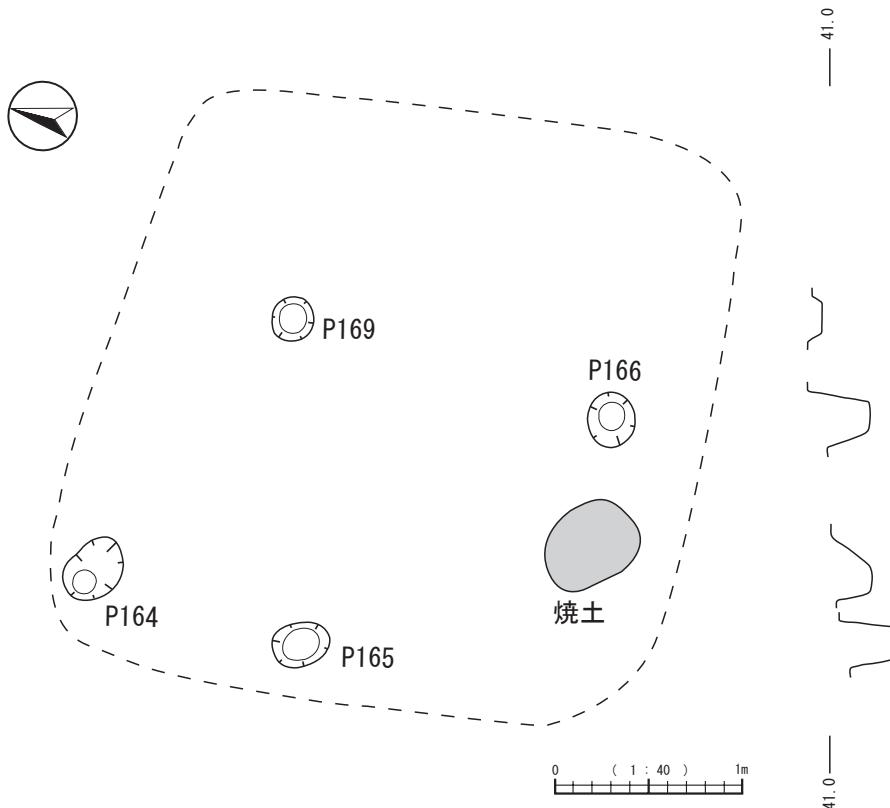
VI類（第8図14～21）

14は山形口縁となるもので、台形状の突帯が貼付され、口唇部は平坦となる。

15～21は断面形が略三角形状の突帯を口縁部下部に囲繞するもので、比較的小型の器種になると考えられる。15・20は口縁部が外反し、19・21は口縁部が直口する。



第6図 中里遺跡全体遺構配置図



第7図 1号住居跡

X類（第8図22）

22は泥質の胎土で混入物をほとんど含まない精製された胎土で、他の土器と胎土が異なるため外来系土器ではないかと考える。壺形土器の口縁部と考えられ、大きく外反した口縁部には僅かに膨らんだ突帯がつくりだされている。

石斧

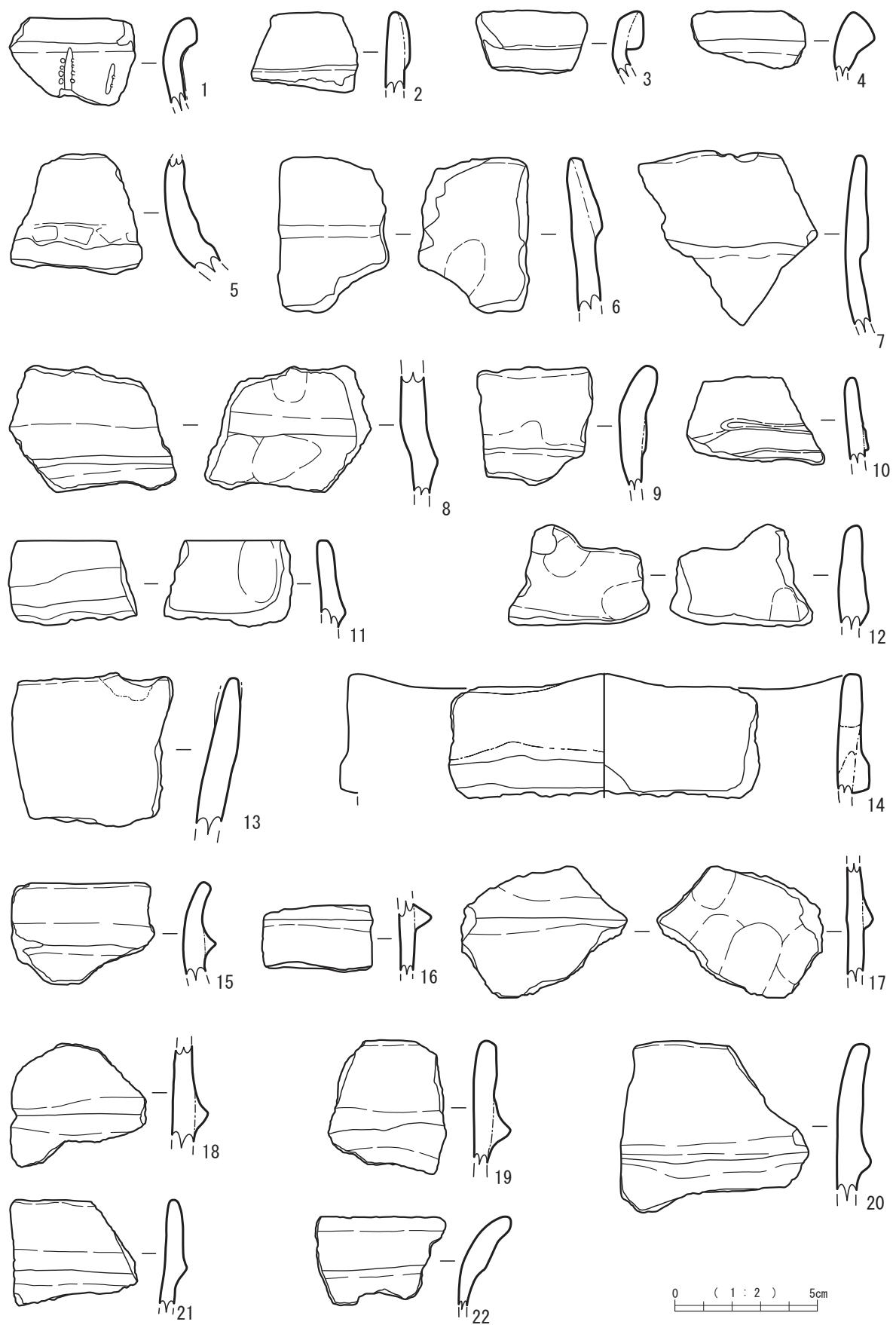
I類（第9図23～26）

23～26は全磨製の両刃石斧である。

23は平面形態は基部から刃部にかけてほぼ同じ幅で、側面形態は両側に大きく膨らみ、刃部も湾曲する。刃部には、使用によるとみられる大きめの剥離痕が観察される。基部には敲打痕が確認され、敲石に転用された可能性がある。

24・25は平面形態が基部から刃部にかけて幅が広がり撥形となる。24は側面形態がほぼ湾曲せず直線的で、刃部も湾曲せず直線的である。また、刃部が完全に潰れており、一部には使用によるとみられる剥離も観察される。25は全面研磨を行うが一部に整形時の剥離や敲打痕が残る。側面形態は全体的に緩やかに湾曲する。

26は小型の石斧で、平面形態は基部から刃部にかけてほぼ同じ幅で寸胴形となる。側面は丁寧に研磨され平坦面を形成しており、側面形態は僅かに湾曲している。刃部は完全に潰れており一部には平坦面が形成されている。



第8図 1号住居跡出土遺物（1）



第9図 1号住居出土遺物 (2)

II類 (第9図27)

27は全面磨製の両刃石斧で、薄く扁平となるものであるが、研磨は徹底されず敲打成形痕が残る。平面形態は撥形で刃部以外の周縁3面は丁寧に研磨され平坦面を形成する。

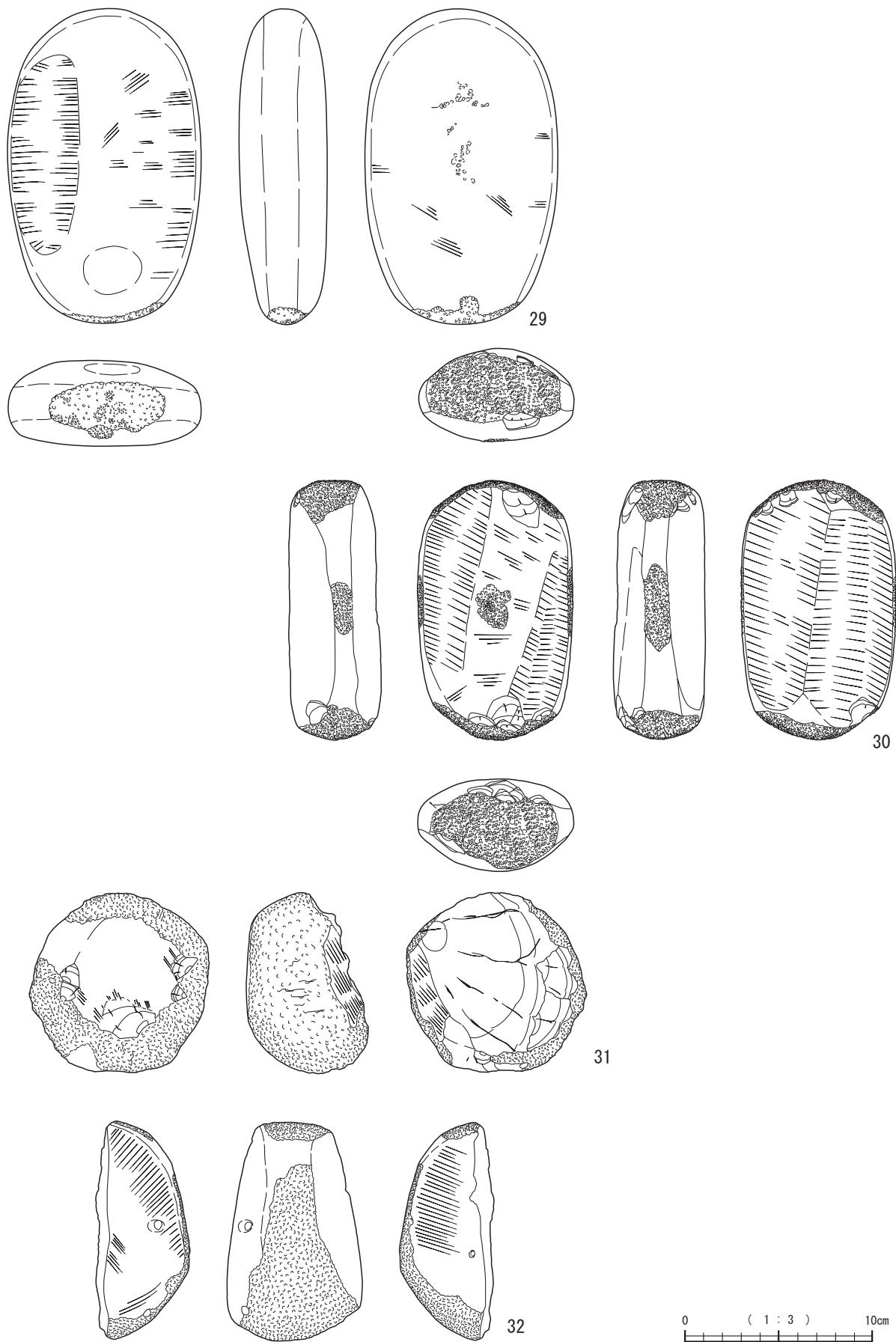
IV類 (第9図28)

28は整形剥離のみが行われた未製品であると考えられる。裏面はほぼ全面に整形剥離痕が残されており、周縁部には細かな調整剥離が観察される。研磨はされておらず正面は自然面を多く残す。

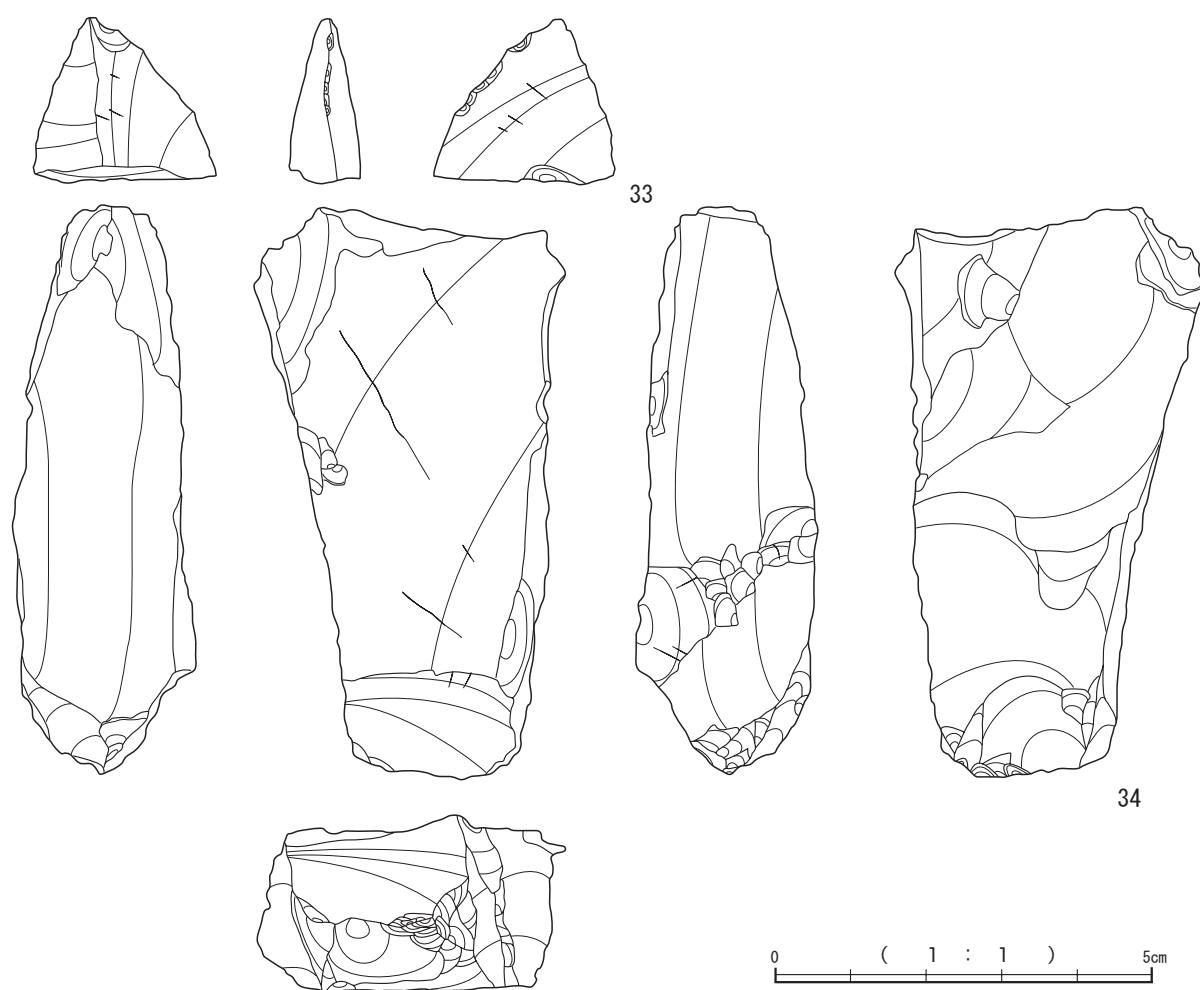
磨敲石

I類 (第10図29・30)

29・30は平面形態が橢円形状となるものである。29は比較的大きな自然礫を利用したもので、正面・裏面に線条痕が確認でき、正面左側には磨面も確認できる。敲打痕は裏面と側縁に確認できるが、敲打痕の密度から側縁部が主に敲打面として使用されたと考えられる。30は中型の磨敲石で正面と裏面



第10図 1号住居出土遺物(3)



第 11 図 中里遺跡出土遺物 (4)

に顕著な磨面を形成する。敲打痕は正面と周縁に残る。

II 類 (第 10 図 31・32)

31・32 は平面形態が円形状となるものである。31 は拳大の自然礫を利用したもので、正面と裏面の一部に磨面を確認することができる。側縁部のほとんどを敲打面として使用したと考えられる。32 は使用によって半分欠損したと考えられるもので、正面と裏面に磨面があり、側縁部のほとんどに敲打痕が残る。

スクレイパー (第 11 図 33)

33 はチャート製のスクレイパーと考えられるもので、刃部には使用によるとみられる微細な剥離痕を確認することができる。

楔形石器 (第 11 図 34)

34 は楔形石器と考えられる。下端部の稜線付近を中心に、細かな衝撃剥離が観察される。

(3) 2号住居跡

C地区の東側で確認された堅穴住居跡である。隣接する3号住居跡と切り合っていると考えられるが、重機の掘削によって埋土が分断されており、切り合い関係を確認することはできていない。

2号住居跡は東西3m×南北2.5mの略長方形形状を呈しているが、南西側の堅穴の上場が外方に張り出している。堅穴の深さは10cm～15cmとなるが、上部が削平されていることを考慮すると、本来はさらに深かったと考えられる。

床面からは焼土とピットが検出しており、焼土は住居跡中央よりやや東側に偏ったところで検出した。ピットは5基確認されており、深さは10cm～20cmと比較的浅く、住居中央よりやや北側のピット(P168)は深さ5cmと極端に浅くなっている。住居内埋土及び床面検出ピット埋土と第Ⅱ文化期に属するピットの埋土の色調が類似しており、床面より検出したピットが2号住居跡に伴うものなのか判然としない。P152に関しては、住居床面より検出した焼土を堀り込んでいたため、第Ⅱ文化期に属する遺構の可能性が高いが、遺物などの出土が皆無のため断定できない。

堅穴の周壁沿いに溝が断続的に4条めぐっており、その溝内から3点礫が確認されたが、石組や配石の一部とは考えにくい。

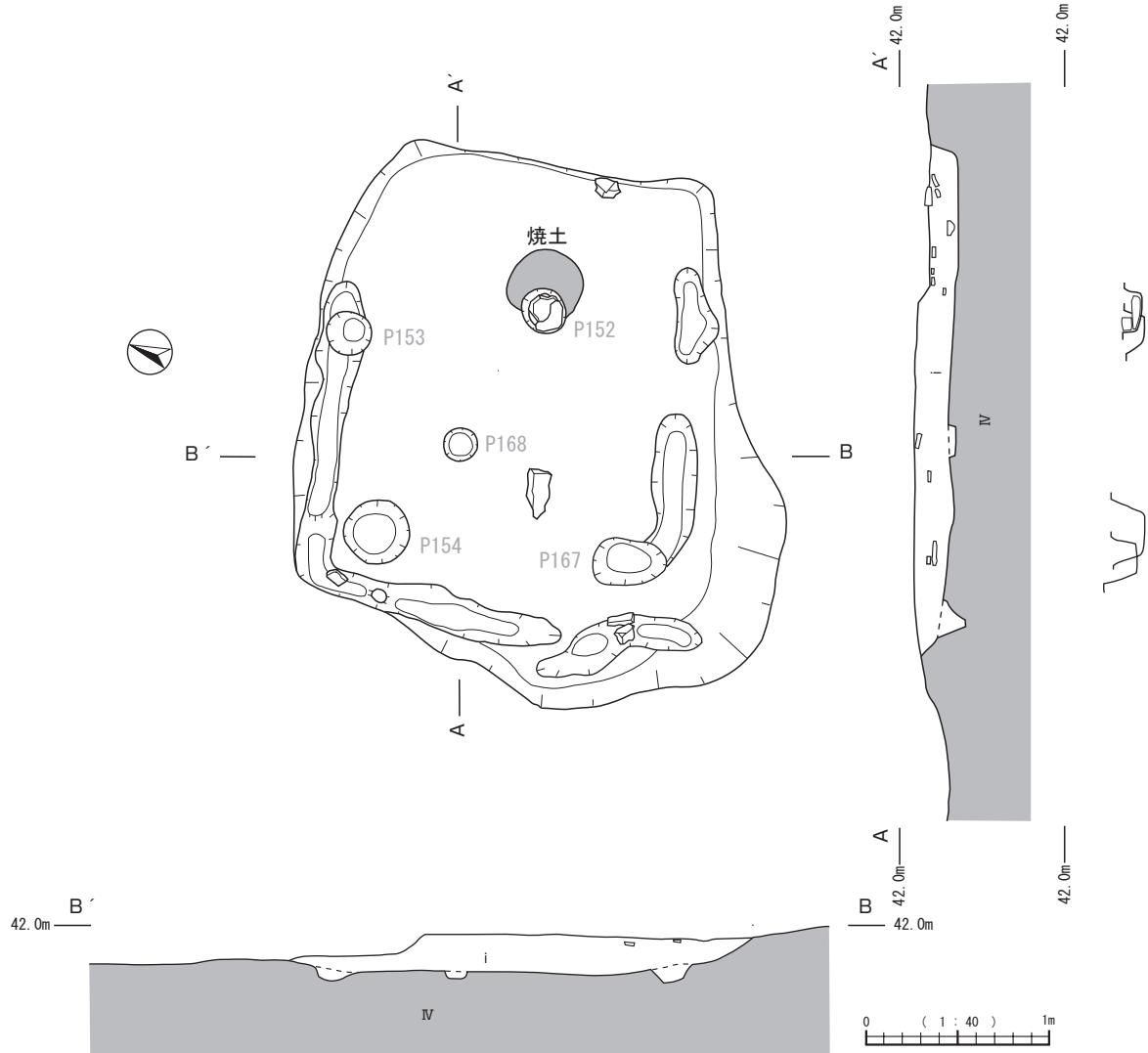
住居内埋土から、多くの礫と遺物、炭化種実が出土しており、住居を廃棄したのち、廃棄場として使用したのではないかと考えられる。

2号住居跡出土遺物所見

2号住居跡からは土器、石器、炭化種実などが出土している。土器は多量に出土しているが、石器の出土量は少ない。

第2表 1号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	実No.	出土地区	層位	造構名	種別	器種	分類1	部位	外面	内面	焼成	材質(胎土)	色調	備考
第8図	1	C区	カクラン	Sh01	土器	壺	I類	口縁部	-	-	良好	b	黄褐色	
	2	C区	カクラン	Sh01	土器	壺	II類	口縁部	-	-	良好	b	褐色	
	3	C区	カクラン	Sh01	土器	壺	II類	口縁部	-	-	良好	a	明褐色	
	4	C区	カクラン	Sh01	土器	壺	II類	口縁部	-	-	脆弱	a	褐色	
	5	C区	カクラン	Sh01	土器	壺	IV類	口縁部	押引文?	指頭痕	良好	a	赤褐色	
	6	C区	カクラン	Sh01	土器	壺	V類	口縁部	-	指頭痕	良好	b	褐色	
	7	C区	カクラン	Sh01	土器	壺	V類	口縁部	-	指頭痕	良好	a	褐色	
	8	C区	カクラン	Sh01	土器	壺	V類	胴部	指ナデ	指ナデ	良好	a	赤褐色	
	9	C区	カクラン	Sh01	土器	壺	V類	口縁部	指頭痕	指ナデ	良好	b	褐色	
	10	C区	カクラン	Sh01	土器	壺	V類	口縁部	-	指ナデ	良好	b	明褐色	
	11	C区	カクラン	Sh01	土器	壺	V類	口縁部	-	-	良好	a	暗褐色	
	12	C区	カクラン	Sh01	土器	壺	V類	口縁部	指頭痕	-	良好	b	明褐色	
	13	C区	カクラン	Sh01	土器	壺	V類	口縁部	-	-	良好	a	褐色	
	14	C区	カクラン	Sh01	土器	壺	VI類	口縁部	-	-	良好	a	褐色	
	15	C区	カクラン	Sh01	土器	壺	VI類	口縁部	-	-	良好	a	褐色	
	16	C区	カクラン	Sh01	土器	壺	VI類	胴部	-	-	脆弱	a	褐色	
	17	C区	カクラン	Sh01	土器	壺	VI類	胴部	-	指頭痕	良好	b	にぶい黄褐色	
	18	C区	カクラン	Sh01	土器	壺	VI類	胴部	-	-	良好	a	褐色	
	19	C区	カクラン	Sh01	土器	壺	VI類	口縁部	-	-	良好	a	赤褐色	
	20	C区	カクラン	Sh01	土器	壺	VI類	口縁部	-	-	良好	b	明褐色	
	21	C区	カクラン	Sh01	土器	壺	VI類	口縁部	-	-	良好	b	にぶい黄褐色	
	22	C区	カクラン	Sh01	土器	壺	X類	口縁部	-	-	脆弱	f	明褐色	
第9図	23	C区	カクラン	Sh01	石器	石斧	I類	刃部破損	-	-	-	砂岩	青灰色	
	24	C区	カクラン	Sh01	石器	石斧	I類	完形	-	-	-	砂岩	青灰色	
	25	C区	埋土	Sh01P164	石器	石斧	I類	完形	-	-	-	ホルンフェルス	青緑色	
	26	C区	埋土	Sh01P164	石器	石斧	I類	刃先破損	-	-	-	ホルンフェルス	青緑色	
	27	C区	カクラン	Sh01	石器	石斧	II類	完形	-	-	-	砂岩	青灰色	
	28	C区	カクラン	Sh01	石器	石斧	IV類	-	-	-	-	ホルンフェルス	青緑色	
第10図	29	C区	カクラン	Sh01	石器	磨敲石	I類	完形	-	-	-	砂岩	灰色	
	30	C区	カクラン	Sh01	石器	磨敲石	I類	完形	-	-	-	砂岩	灰色	
	31	C区	カクラン	Sh01	石器	磨敲石	II類	片面破損	-	-	-	ホルンフェルス	青緑色	
	32	C区	カクラン	Sh01	石器	磨敲石	II類	半破損	-	-	-	砂岩	灰色	
第11図	33	C区	カクラン	Sh01	石器	スクレイパー	-	完形	-	-	-	チャート	黄緑色	
	34	C区	カクラン	Sh01	石器	楔形石器	-	完形	-	-	-	チャート	黒色	



第12図 2号住居跡

土器

II類（第14図35・36）

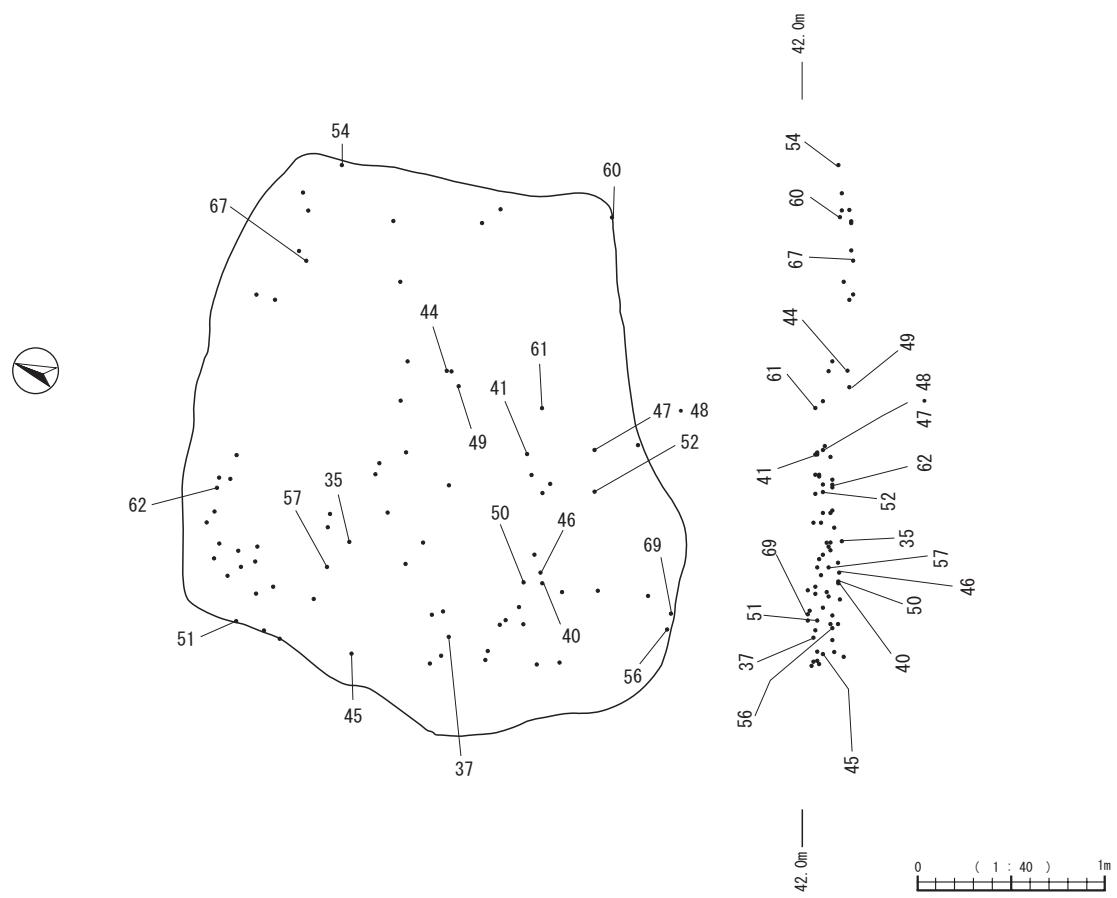
35、36は口縁部が肥厚する壺形土器と考えられる。35は小型の壺形土器の口縁部と考えられ、僅かに口縁部が略三角形状に肥厚する。36は口縁部の肥厚部が欠失した資料と考えられる。

III類（第14図37・38）

37・38は長頸で薄手の壺形土器と考えられるものである。38は緩やかに外反する口縁部が頸部で「く」の字状に屈曲しナデ肩の肩部へと移行する。

V類（第14図39～48・第15図49～52）

39は口縁部が肥厚し、段を形成して胴部へと移行するものである。40～50は口縁部下部のみに粘土帯を貼り付け、肥厚するもので、口縁部と胴部の間に段を形成する。40～43・50は口縁部が直口するもので、44もその類と考えられる。50は床面から出土した資料で、口縁部下部が肥厚し段を形成して、張りの弱い胴部へと移行するものである。45～48は口縁部が湾曲し口縁部下部が肥厚し段を形成するものである。47・48は同一個体と考えられ「逆W」状の突起が口唇部に付される。



第13図 2号住居跡遺物出土状況

49は口縁部が外反するもので、口縁部下部の肥厚部が粗雑に整形されており、部位によっては突帶状となる。

51・52は有段部が欠失した資料と考えられ、51は口唇部に山形突起を付している。

VI類（第16図53～56）

53～56は突帶が貼付するものである。53・55・56は断面形が略三角形状の突帶を貼付しており、53・55は口径が歪む特徴がある。54は断面形が略半円状となる突帶を貼付している。

VII類（第16図57～59）

57・58は外耳が貼付されるもので、57は比較的厚さを減じた外耳が貼り付けられている。58は比較的大きな外耳が貼り付けられている。59は外耳と考えられ、約3mm径の穴が穿孔されている。

VIII類（第16図60）

60は胴部から口縁部にかけて、ほぼ直口する資料で、粗雑なつくりとなっており、口縁部内面は指頭痕が顕著に残り凹む。

XII類（第16図61）

61は口縁部が内傾する資料で、口縁部上部で一端くびれ厚さを増して口縁部下部へと移行する。不明土器として扱った。

底I類（第16図62～64）

62～64は尖底となるもので、緩やかな立ち上がりとなる。62・63は比較的器壁が薄く、64は器壁が厚くなる。

底II類（第16図65～67）

65～67は平底となる資料で、65・67は立ち上がり部が一旦くびれそこから外開きに立ち上がるもので、67は底面が平坦にならず鍋底状となる。66は丸底の底部に粘土帯を囲繞し平底状とするものと考えられ、底面中央部の厚さは極端に薄い。

石斧

V類（第16図68）

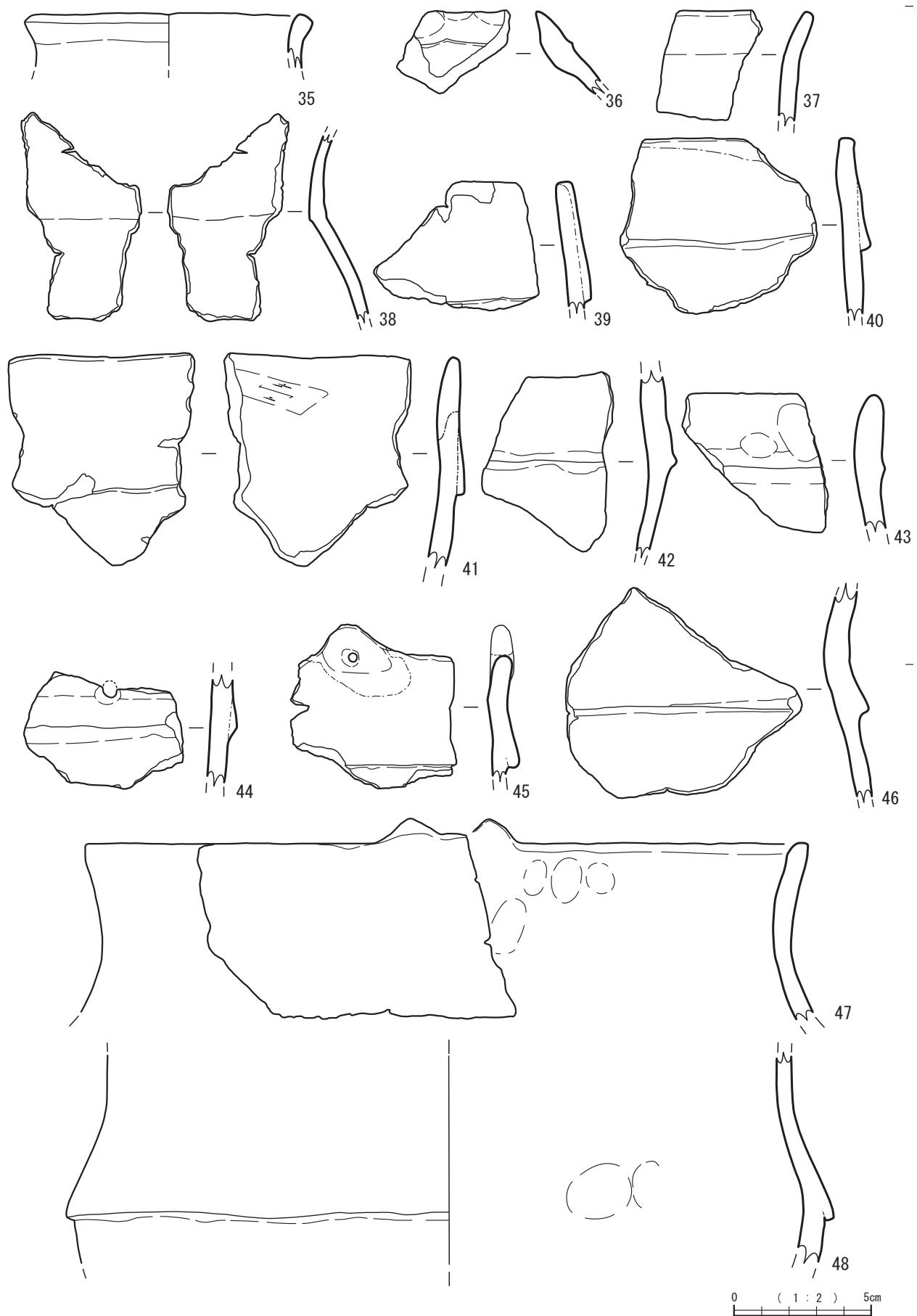
68は石斧の基部片と考えられ、使用による横折れによってほとんどが欠失したものと考えられる。

磨敲石

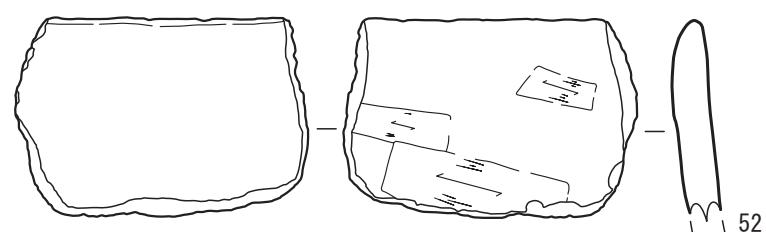
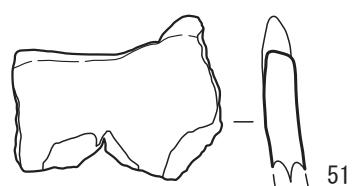
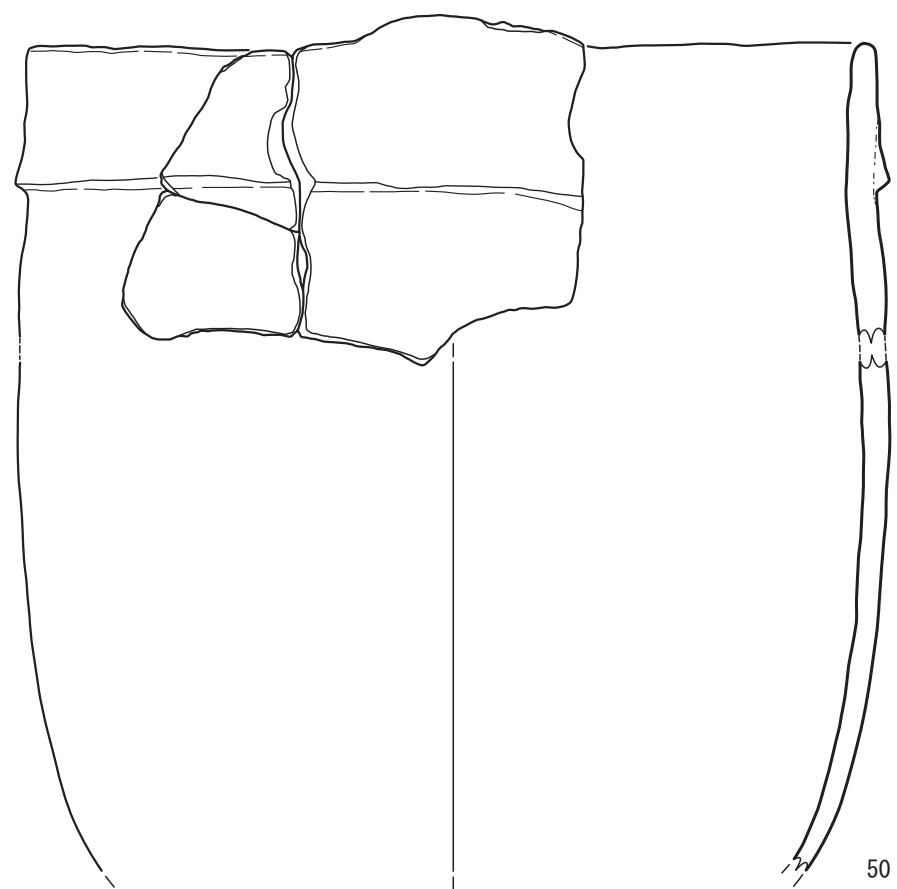
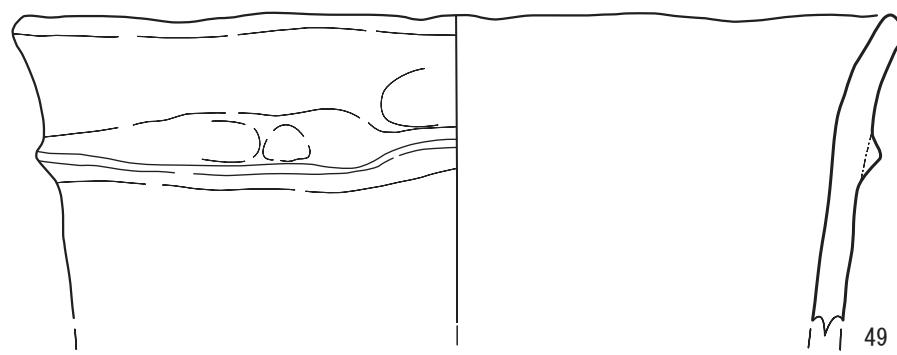
I類（第16図69）

69は平面形態が略楕円形状となる磨敲石と考えられ、使用によって破損したものが判然としないが、半分を欠失している。

70も磨敲石と考えられるが、そのほとんどが欠失しているため、本来の形状は不明である。

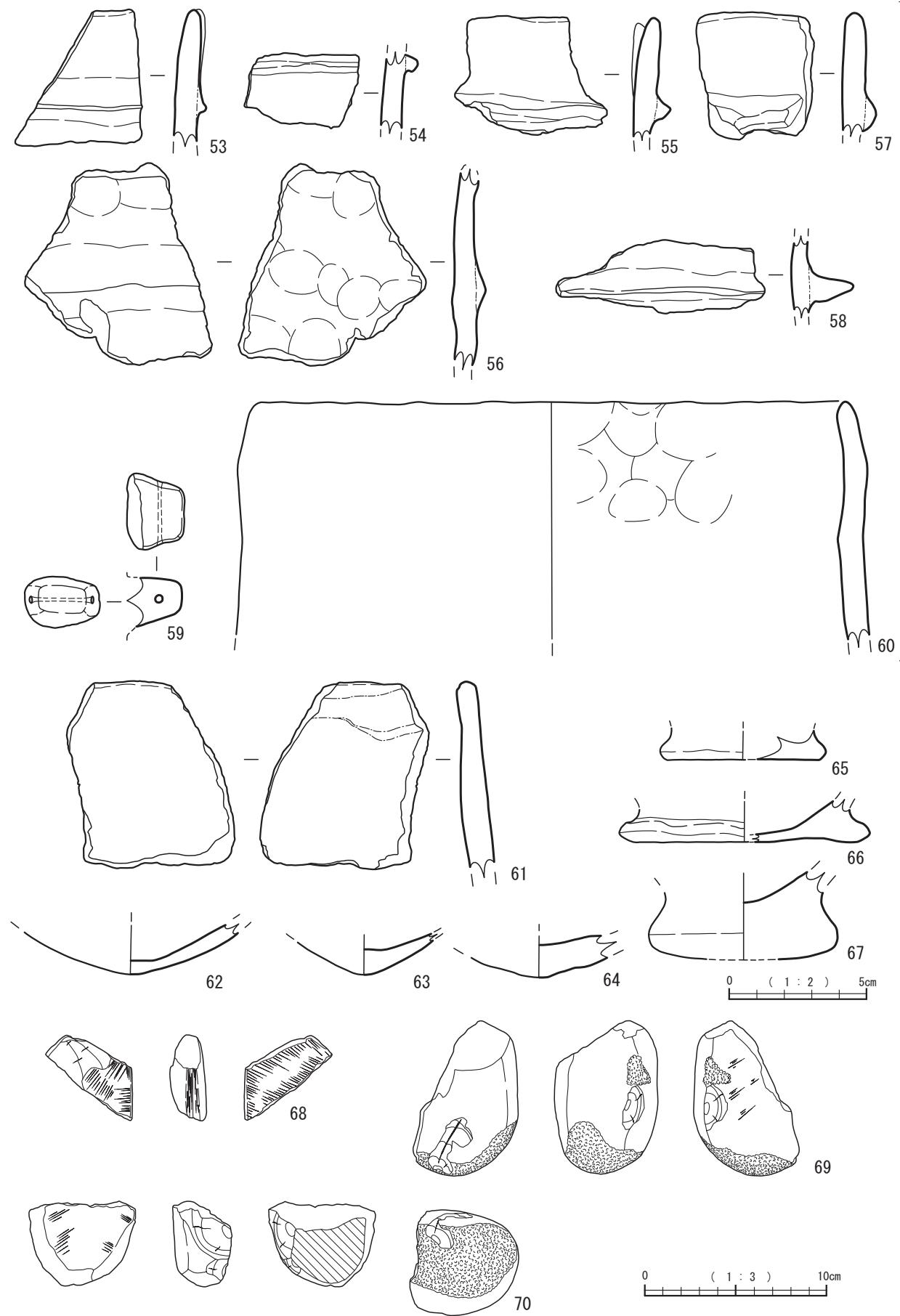


第14図 2号住居出土遺物(1)



0 (1 : 20) 5cm

第15図 2号住居出土遺物 (2)



第16図 2号住居跡遺物（3）

(4) 3号住居跡

C地区の東側で2号住居跡と切り合うかたちで検出した住居跡である。先に記した通り、切り合い関係は確認できていない。

堅穴の上部がほとんど削平されており、周壁は10cm程残存している箇所はあるものの、全体的にはほとんど残存しておらず、床面に廻っていたと考えられる溝が3条確認できるのみである。溝内から1点礫が検出しているが、2号住居跡同様に石組や配石の一部であるとは考えにくい。

3号住居跡出土遺物所見

3号住居跡出土の人工遺物は土器のみで、その出土量は少ない。

土器

II類（第18図71）

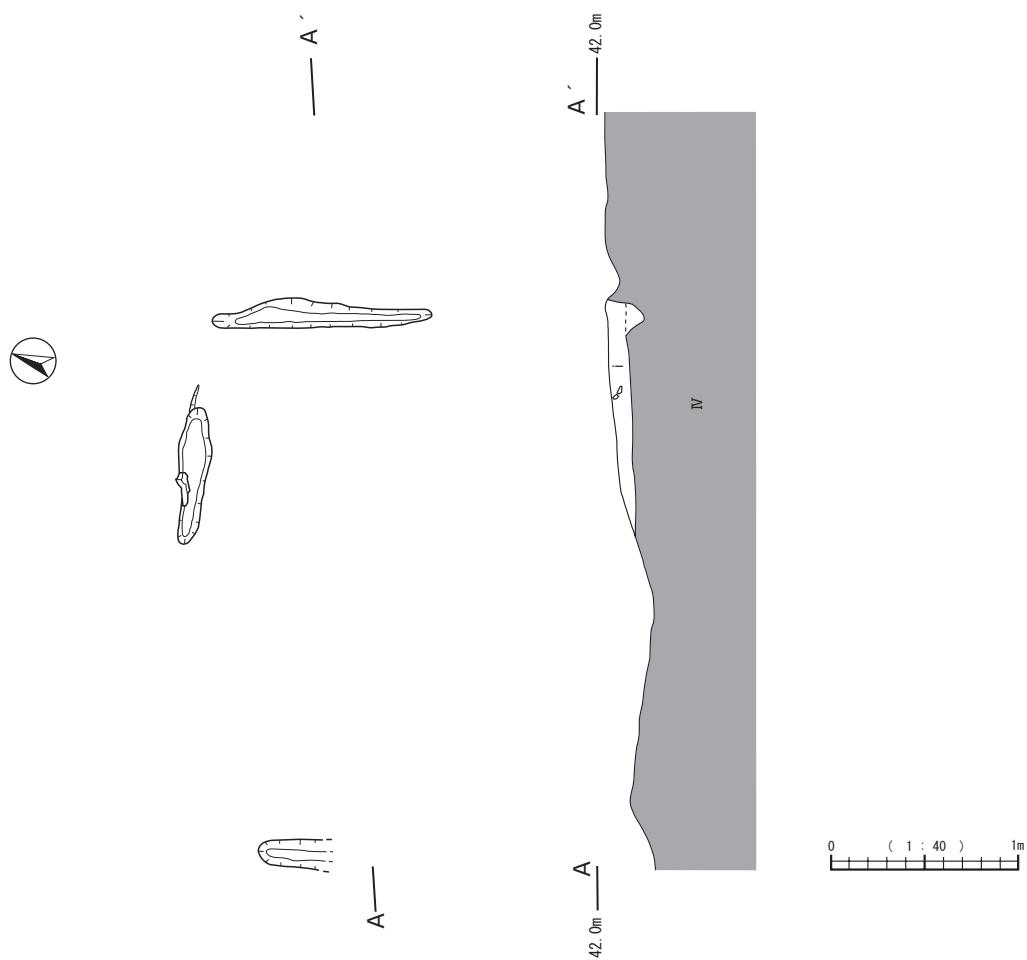
71は口縁部が肥厚する小型の壺形土器と考えられる。肥厚部は比較的薄く扁平である。

X II類（第18図72）

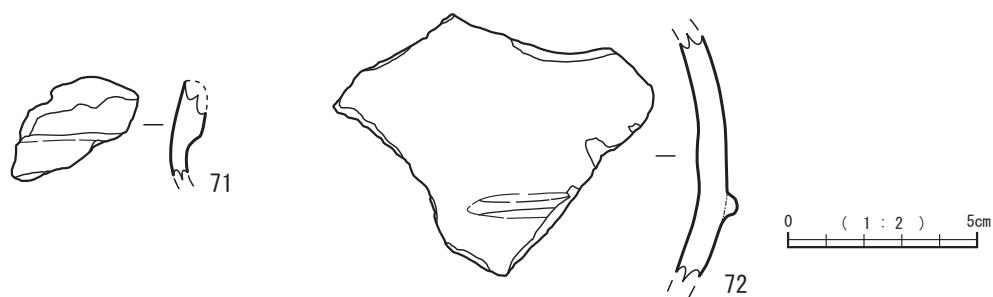
72は比較的張りの強い胴部に、幅1cm弱の外耳を横位に貼付するもので、不明土器として扱った。

第3表 2号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	遺物番号	出土地区	層位	遺構名	種別	器種	分類1	部位	外面	内面	焼成	材質(胎土)	色調	備考
第14図	35	C区	i層	Sh02-2	土器	壺	II類	口縁部	指ナデ	指ナデ	良好	b	褐色	
	36	C区	i層	Sh02-3	土器	壺	II類	口縁部	指頭痕	指頭痕	良好	a	黒褐色	
	37	C区	i層	Sh02-3	土器	壺	III類	口縁部	-	-	良好	a	褐色	
	38	C区	i層	Sh02-3	土器	壺	III類	頸部	-	-	良好	a	黄褐色	
	39	C区	i層	Sh02	土器	甕	V類	口縁部	-	指頭痕	良好	a	赤褐色	
	40	C区	床面	Sh02-3	土器	甕	V類	口縁部	指頭痕	指頭痕	良好	a	赤褐色	
	41	C区	i層	Sh02-3	土器	甕	V類	胴部	-	-	良好	a	褐色	
	42	C区	i層	Sh02-2	土器	甕	V類	胴部(突帯)	-	-	良好	a	明褐色	
	43	C区	i層	Sh02-4	土器	甕	V類	口縁部	指頭痕	-	良好	a	明褐色	
	44	C区	i層	Sh02-4	土器	甕	V類	口縁部付近	工具ナデ	工具ナデ	良好	a	明褐色	穿孔あり
	45	C区	i層	Sh02-2	土器	甕	V類	口縁部	-	-	良好	a	褐色	
	46	C区	床面	Sh02-3	土器	甕	V類	胴部(突帯)	-	-	良好	a	褐色	
	47	C区	i層	Sh02-3	土器	甕	V類	口縁部	指ナデ	指頭痕	良好	a	褐色	
	48	C区	i層	Sh02-3	土器	甕	V類	口縁部	指ナデ	指頭痕	良好	a	褐色	
第15図	49	C区	i層	Sh02-1	土器	甕	V類	口縁部	指頭痕	-	良好	a	褐色	
	50	C区	床面	Sh02-3	土器	甕	V類	口縁部	-	指頭痕	良好	b	褐色	
	51	C区	i層	Sh02	土器	甕	V類	胴部	-	-	良好	a	褐色	
	52	C区	i層	Sh02-3	土器	甕	V類	口縁部	指ナデ	削り	良好	a	褐色	
第16図	53	C区	i層	Sh02-4	土器	甕	VI類	口縁部	-	-	良好	b	にぶい黄褐色	
	54	C区	i層	Sh02-1	土器	甕	VI類	胴部	-	-	良好	b	褐色	
	55	C区	i層	Sh02ベルト	土器	甕	VI類	口縁部	指ナデ	指ナデ	良好	b	明褐色	
	56	C区	i層	Sh02-3	土器	甕	VI類	口縁部	指頭痕	指頭痕	良好	a	褐色	
	57	C区	i層	Sh02-2	土器	甕	VII類	胴部	-	-	良好	a	褐色	
	58	C区	i層	Sh02-3	土器	甕	VII類	胴部(突帯)	指ナデ	-	良好	a	褐色	
	59	C区	i層	Sh02-4	土器	-	VII類	外耳	-	-	良好	a	明褐色	
	60	C区	i層	Sh02-1	土器	甕	VII類	口縁部	-	指頭痕	良好	a	明褐色	
	61	C区	i層	Sh02-4	土器	甕	XII類	胴部	指ナデ	-	良好	a	褐色	
	62	C区	i層	Sh02-2	土器	-	底I類	底部	-	-	良好	a	褐色	
	63	C区	床面	Sh02-3	土器	-	底I類	底部	-	-	良好	b	明褐色	
	64	C区	i層	Sh02-4	土器	-	底I類	底部	-	-	良好	a	褐色	
	65	C区	i層	Sh02-1	土器	-	底II類	底部	-	-	良好	a	褐色	
	66	C区	i層	Sh02ベルト	土器	-	底II類	底部	-	-	良好	a	褐色	
	67	C区	i層	Sh02-1	土器	-	底II類	底部	-	-	良好	a	褐色	
	68	C区	i層	Sh02-3	石器	石斧	V類	基部	-	-	-	頁岩	青灰色	
	69	C区	i層	Sh02-3	石器	磨敲石	I類	半破損	-	-	-	砂岩	灰色	
	70	C区	i層	Sh02-3	石器	磨石	I類	半破損	-	-	-	砂岩	灰色	



第17図 3号住居跡



第18図 3号住居跡出土遺物

第4表 3号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	実No.	出土地区	層位	遺構名	種別	器種	分類1	部位	外面	内面	焼成	材質(胎土)	色調	備考
第18図	71	C区	i層	Sh03	土器	壺	II類	口縁部	-	-	良好	b	暗褐色	
	72	C区	i層	Sh03	土器	甕	X II類	胴部	-	-	良好	b	暗褐色	外耳貼付

(5) 土坑

C 地区の西側で確認された遺構で、平面形が長軸 85cm × 短軸 80cm の略楕円形状となる。

土坑は 2 段構造となり、深さ 25cm の平坦な土坑中場の北側がさらに約 40cm ほど斜位に落ちこんでいる。断面を観察すると、柱痕のような土色変化が確認できた。

土坑出土遺物所見

土坑からは、土器、石器、炭化種実などが出士している。

土器

II類（第 20 図 73）

73 は口縁部が肥厚するもので、肥厚部の稜がにぶく断面形が蒲鉾形となるものである。

V類（第 20 図 74・77）

74・77 は口縁部下部が肥厚し、段を形成するものである。74 は口唇部から口縁部下部の肥厚部へと湾曲しながら移行し、77 は口縁部が直口する。

VI類（第 20 図 75・76）

75・76 は突帯を貼付する資料で、75 は口縁部が外反し、断面形が略三角形状の比較的幅の狭い突帯を口縁部に貼付する。76 は口縁部が外傾するもので、口縁部下部に突帯が貼付される。突帯の断面形は台形状となると考えられる。

石斧

II類（第 20 図 78）

78 は全面磨製の扁平な石斧で、側面形態は直線的で、刃部で僅かに湾曲する。基部は横方向からの衝撃によって一部欠失している。

IV類（第 20 図 79）

79 は石斧未製品と考えられ、整形剥離を行ったのち研磨せずに破棄されたものと考えられる。

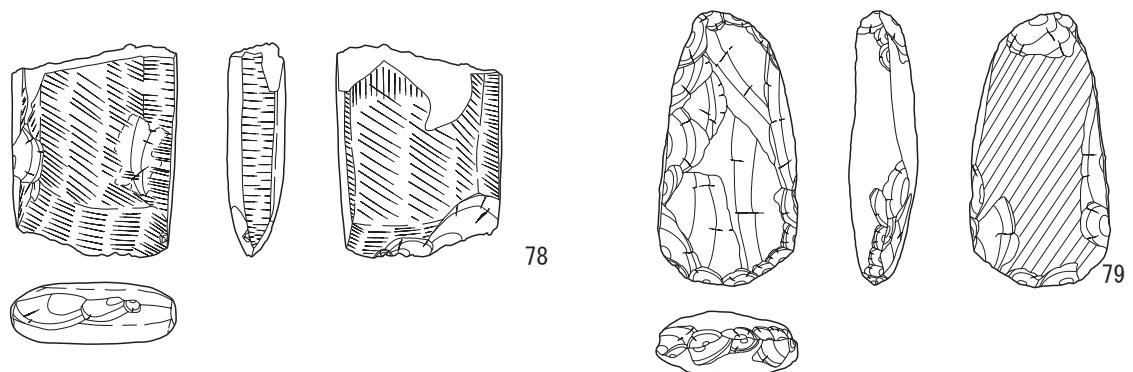
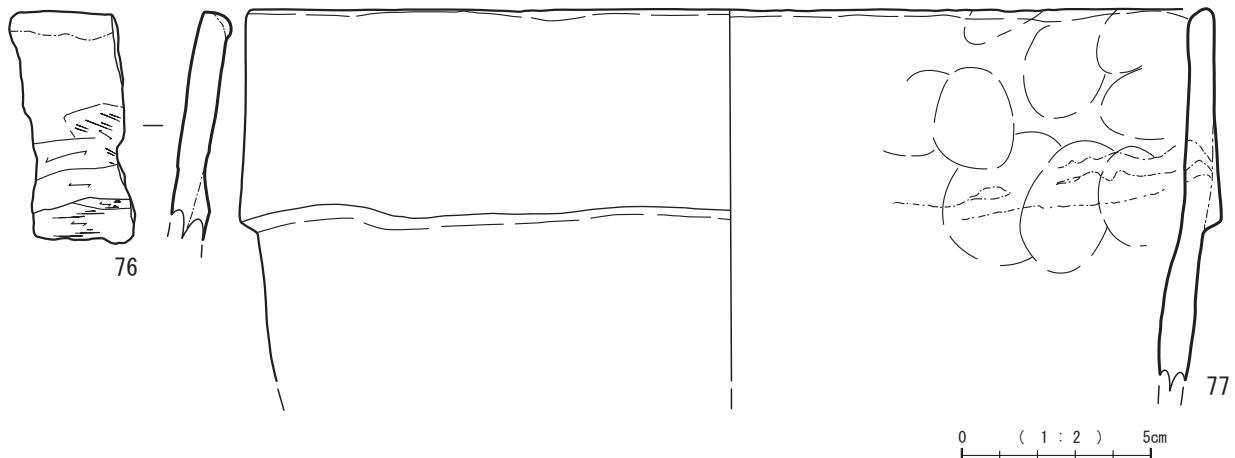
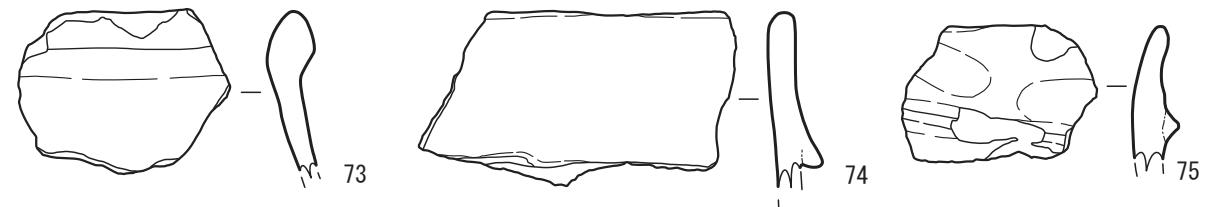
磨石

I類（第 20 図 80）

80 は磨石片で、平面形態は楕円形状となると考えられる。

第 5 表 土坑出土遺物観察表

挿図番号	実 No.	出土地区	層位	遺構名	種別	器種	分類 1	部位	外面	内面	焼成	材質(胎土)	色調	備考
第 20 図	73	C 区	埋土	土坑	土器	壺	II類	口縁部	-	-	良好	a	褐色	
	74	C 区	埋土	土坑	土器	甕	V類	口縁部	-	-	良好	a	暗褐色	
	75	C 区	埋土	土坑	土器	甕	VI類	口縁部	指頭痕	-	良好	b	褐色	
	76	C 区	埋土	土坑	土器	甕	VI類	口縁部	削り	指ナデ	良好	a	褐色	
	77	C 区	埋土	土坑	土器	甕	V類	口縁部	-	指頭痕	良好	a	褐色	
	78	C 区	埋土	土坑	石器	石斧	II類	刃部	-	-	砂岩	青灰色		
	79	C 区	埋土	土坑	石器	石斧	IV類	-	-	-	砂岩	黄褐色		
	80	C 区	埋土	土坑	石器	磨石	I類	半破損	-	-	砂岩	灰色		



第 20 図 土坑出土遺物

第5節 第Ⅱ文化期の遺構と遺物

(1) 遺構検出状況

中世の遺構としてB・C・D・E区合わせて157基ものピットが検出しており、D区の東側でより濃密に検出している。掘立柱建物跡1基、ピット列が2条確認され、木棺墓・鍛冶炉跡も検出している。

(2) ピット群

ここでは、掘立柱建物跡、ピット列1・2を構成するピット以外のピット群を扱う。明確に中世のピットと断言できないピットも含むが、ここでは一括して中世の遺構として扱う。

D区東側でより濃密に検出し、C区でも一定数ピットが検出している。B区では1基のみピットが検出しており、その北側では全くピットが検出しない。

D区のピット列1の北西側では比較的径の大きなピットが多いのに対して、南東側は径の小さなピットが多い傾向が窺える。

ピット群出土遺物所見

ピット群からは土器、滑石混入土器、カムイヤキ、青磁、白磁、滑石製石鍋、滑石製品などが出土している。ここでは、掘立柱建物やピット列を構成しないピットから出土した遺物を扱い、遺構を構成するピットより出土した遺物は各遺構の項で扱う。

土器

底IV類（第22図81）

81は立ち上がり部が一旦くびれるものである。底裏面には木葉痕が確認できる。

滑石混入土器（第22図82）

82は滑石混入土器の鍋形の底部付近の資料である。外器面には、縦位に削り調整を施しており、滑石製石鍋の成形痕である縦位の削り痕を模したものと考えられる。

カムイヤキ（第22図83）

83はカムイヤキA群の胴部資料で、内面には格子状當て具痕が残り、外面には平行線文のタタキ痕が残る。

中国陶磁器

青磁（第22図84）

84は太宰府分類の越州窯系青磁碗I類の口縁部資料と考えられる。口唇部は玉縁状となり、口縁部は外傾する。色調は緑黄色を呈し、発色は悪い。

白磁（第22図85・86）

85は太宰府分類の白磁碗IV類に該当するもので、口縁部に肉厚の玉縁が成形される。

86は、森田分類の白磁皿B群の底部資料と考えらえる。高台脇から微弱な傾斜で移行し腰部を形成して立ち上がるるもので、内面見込み部は釉薬を輪状に禿ぎとする。85・86は同じピット（P131）から出土している。



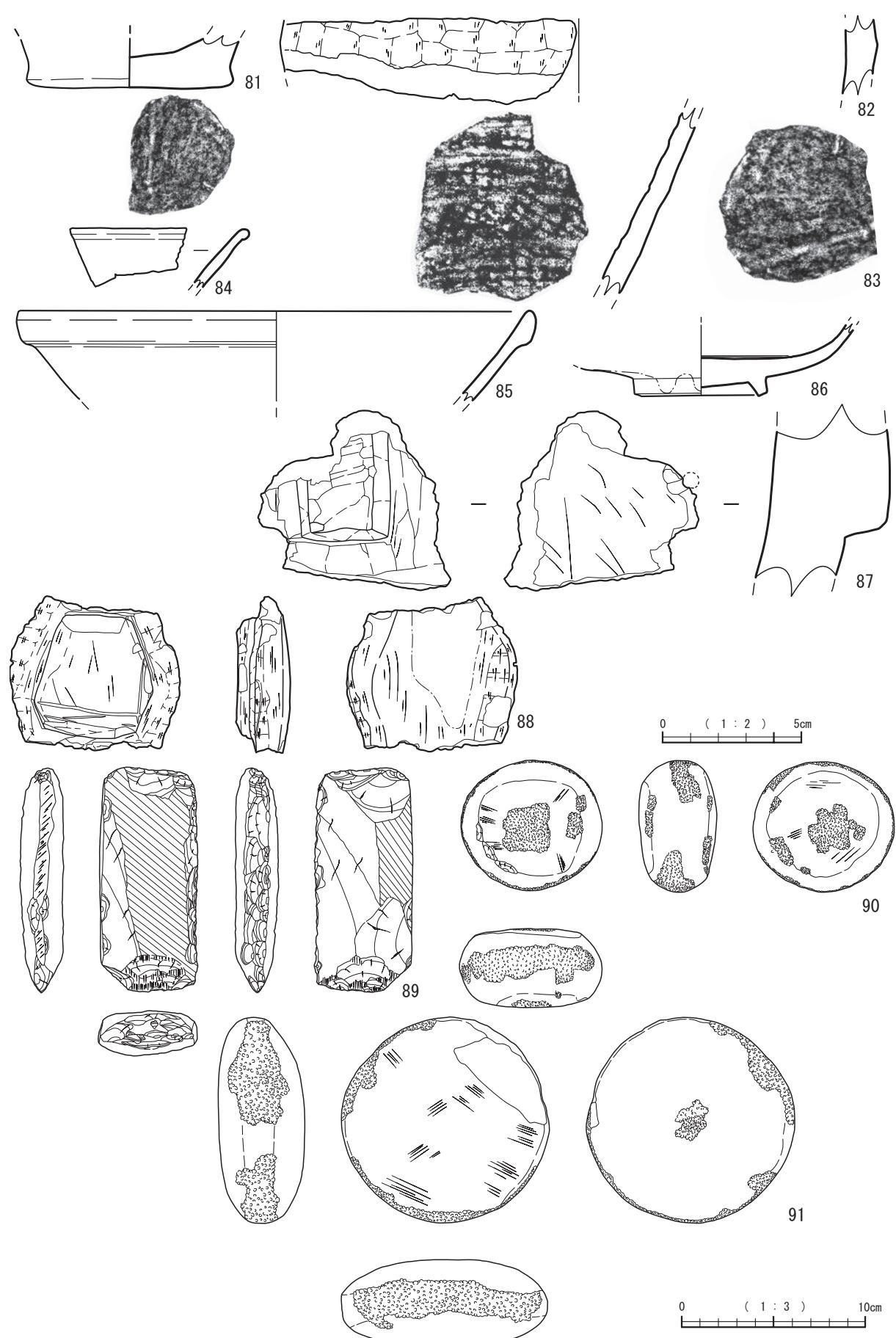
第21図 第Ⅱ文化期遺構配置図

滑石製石鍋（第22図87）

87は縦耳状の把手を有する滑石製石鍋片で、穿孔を施した痕跡が残る。

滑石製品（第22図88）

88は滑石製石鍋片を二次加工して製品としたもので、バレン状の形態となる。丁寧に削りを行い摘部を削りだしている。



第22図 ピット群出土遺物

石斧

IV類（第22図89）

89は石斧の未製品資料と考えられる。整形剥離を行い、刃部正面、裏面、左側侧面を研磨した段階で製作を辞めている。

磨敲石

II類（第22図90・91）

90・91は円礫を磨敲石として使用したもので、平面形態が略円形状となる。90は正面、裏面に磨面を有し、正面、裏面、周縁部に敲打痕が残る。91は正面に磨面を有し、裏面および周縁部のほとんどに敲打痕が残る。

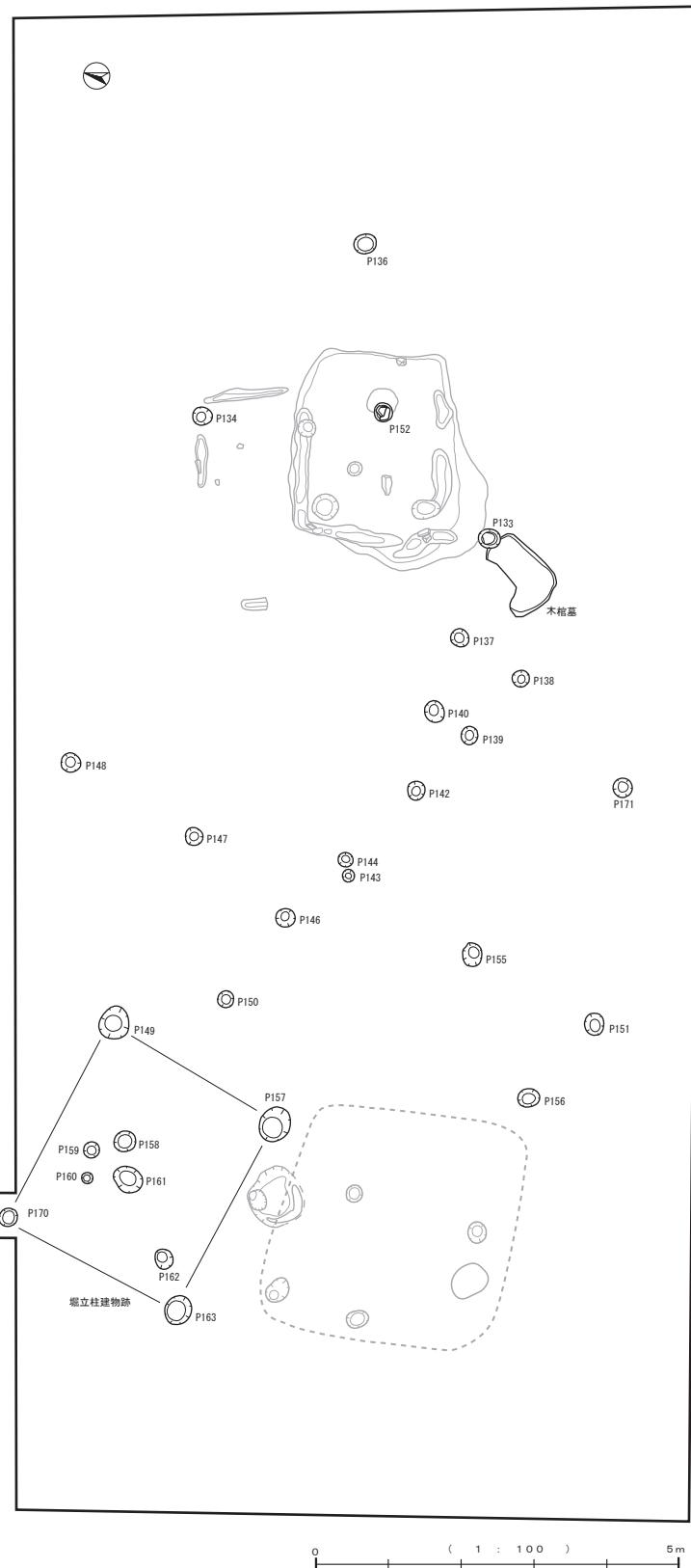
（3）木棺墓

木棺墓はC区の中央で検出した遺構で、人骨は出土していないが、副葬品と考えられるカムイヤキ完形壺を囲むように2～3cm幅の木棺が朽ちた痕跡と考えられる土層が確認できたため、木棺墓と判断した。

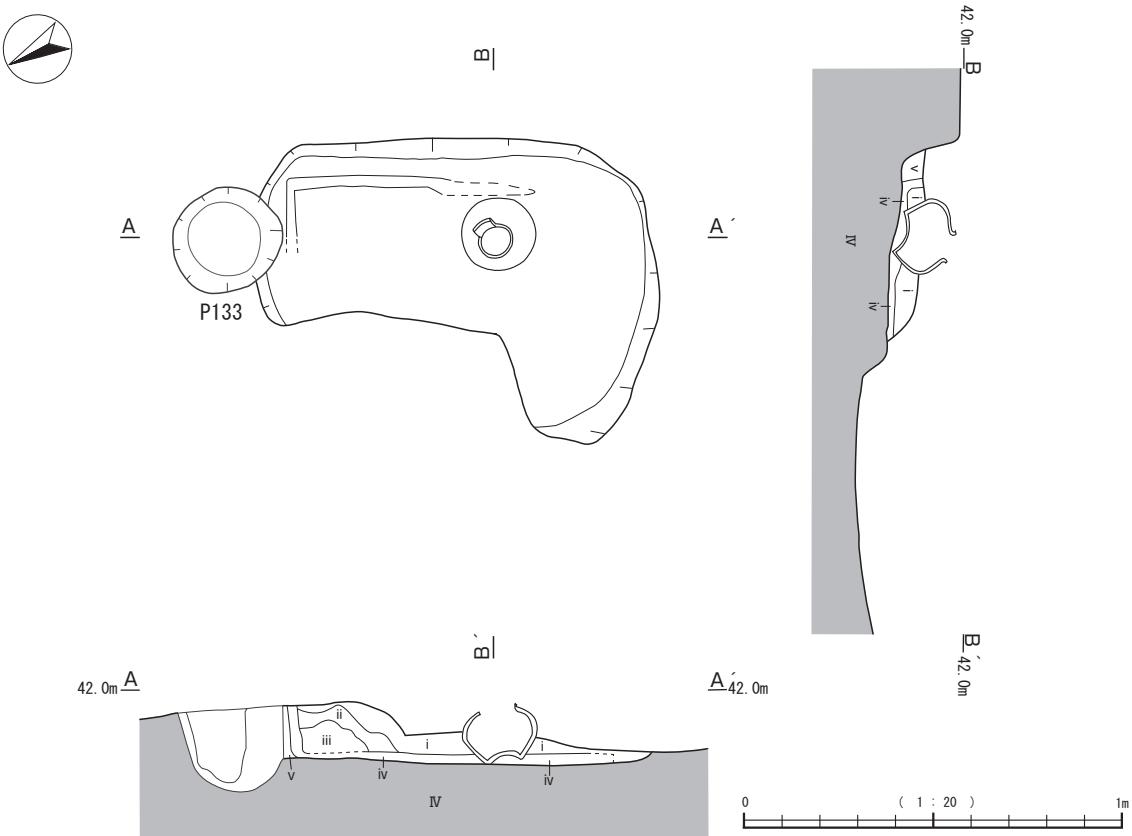
重機による掘削によって遺構の北側が削平されており遺構の形状・規模は不明である。

土層は、iv層が木棺が朽ちた痕跡と考えられる土層で、その外側のv層は暗褐色土と黄褐色土の混土層で木棺埋める際に埋戻した土と考えられる。

iv層の内側に堆積するi・ii・iii層は木棺内に流れこんだ土層と考えられ、ii層は色調や土質などがiv層と類似することから、木棺墓の蓋が朽ちてできた土層とも考えられるが判然としない。



第23図 C区第Ⅱ文化期遺構配置図



第24図 木棺墓

- i層：黄褐色土と褐色土層の混土。1mm 大の砂粒を多く含む。
- ii層：暗褐色土層。粘性があり、1mm 大の砂粒を含む。
- iii層：黄褐色土と褐色土層の混土。砂粒を多く含み、炭も含む。
- iv層：暗褐色土層。粘性がある。
- v層：黄褐色土と褐色土の混土層。1mm 大の砂粒をふくみ、比較的しまりがある。

木棺墓出土遺物所見

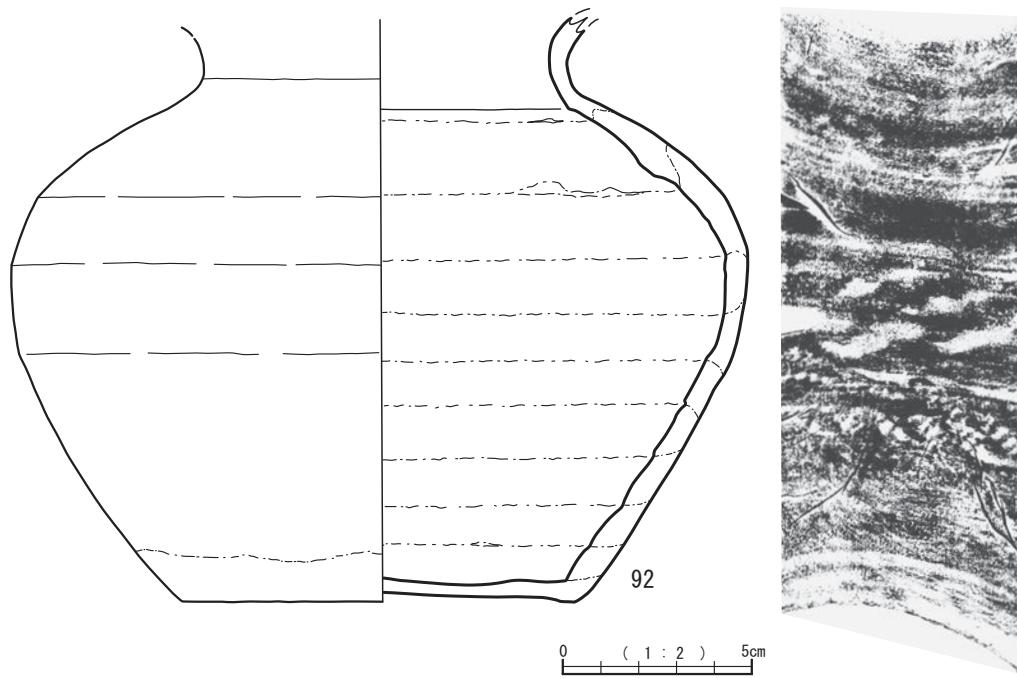
カムイヤキ

A群（第25図92）

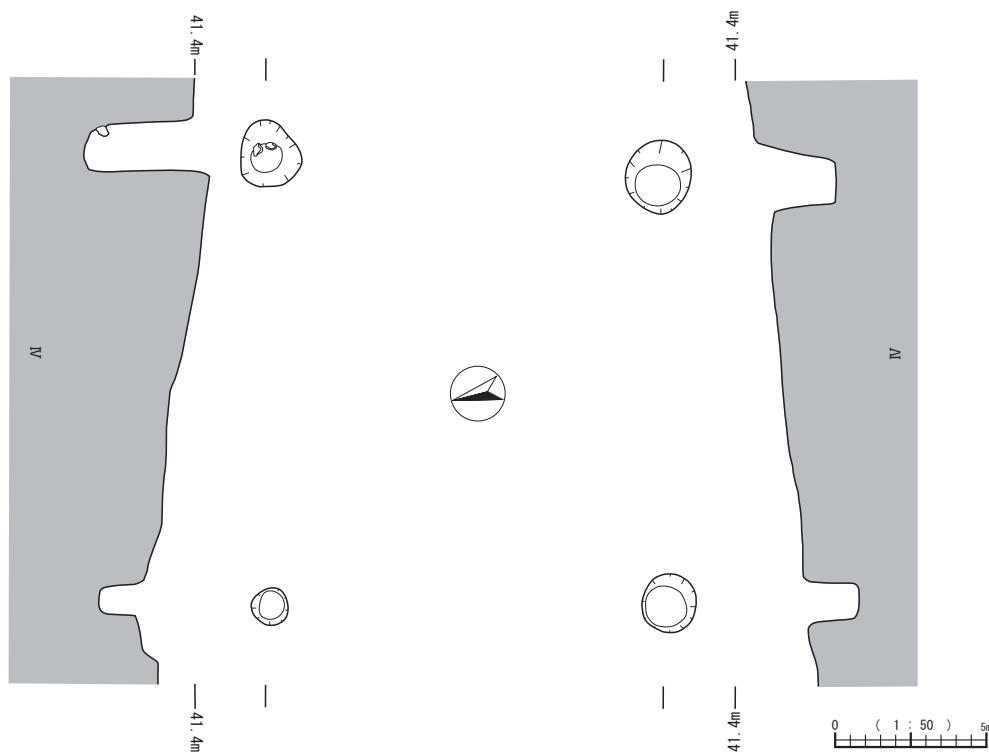
92はカムイヤキの壺形である。器面調整が簡素化しており、外面はナデ調整によって仕上げているが徹底されず底部には粘土帶接合痕が残る。また内面には扇状當て具痕が胴部中央部にのみ施され、ナデ調整は簡素化し粘土帶の接合痕が顕著に残る。焼成は悪く、軟弱である。

(4) 掘立柱建物跡

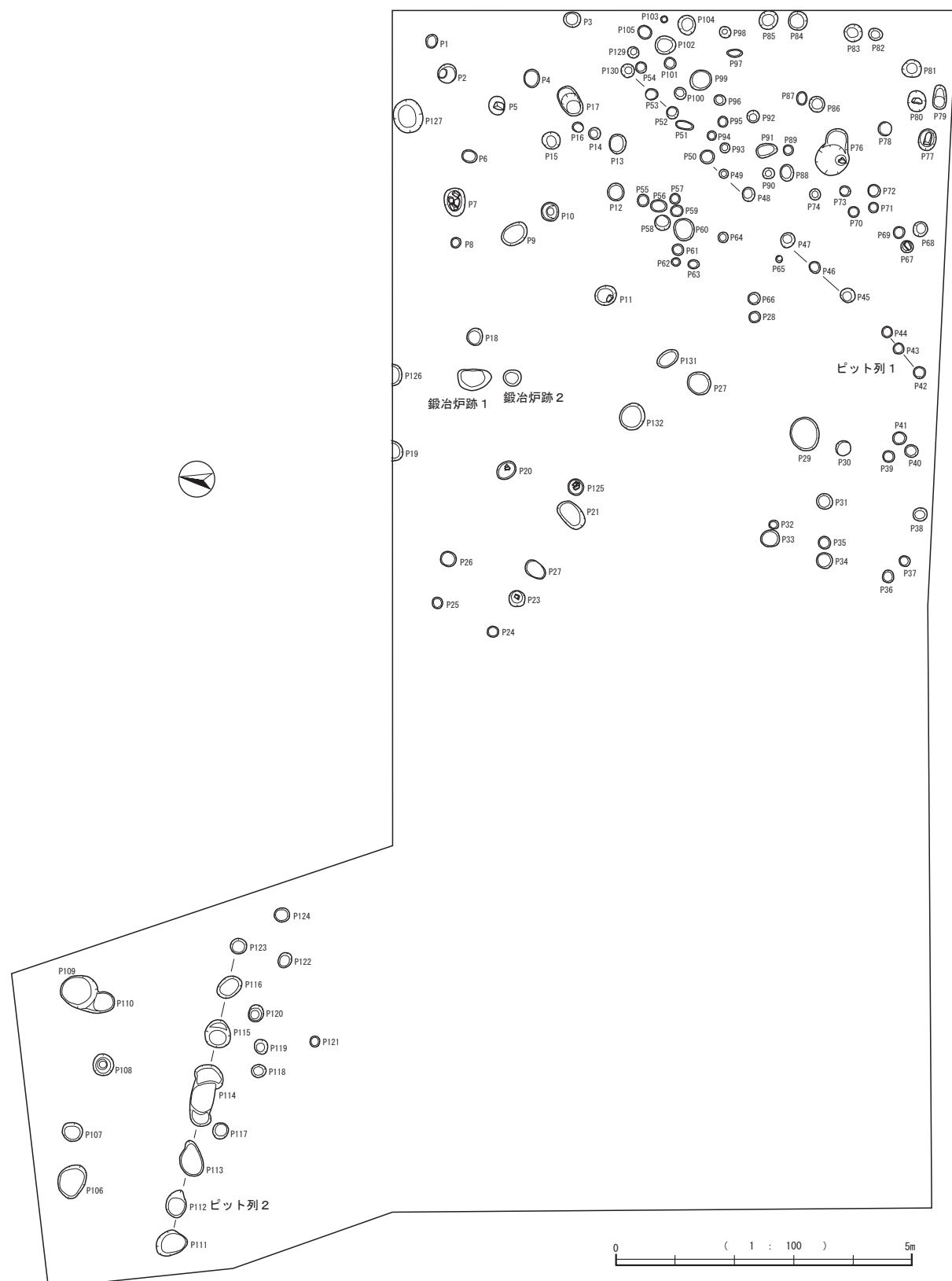
掘立柱建物跡はC区の西側で確認された遺構で、P149・P157・P163・P170の4つの柱穴から構成される1×1間の4本柱建物跡である。梁行(2.7m)×桁行(2.9m)となり、比較的柱間の間隔が広い。柱穴の上部は重機によって削平されているため深さは、それぞれ違うが、柱穴の底面の高さはほとんど一緒である。



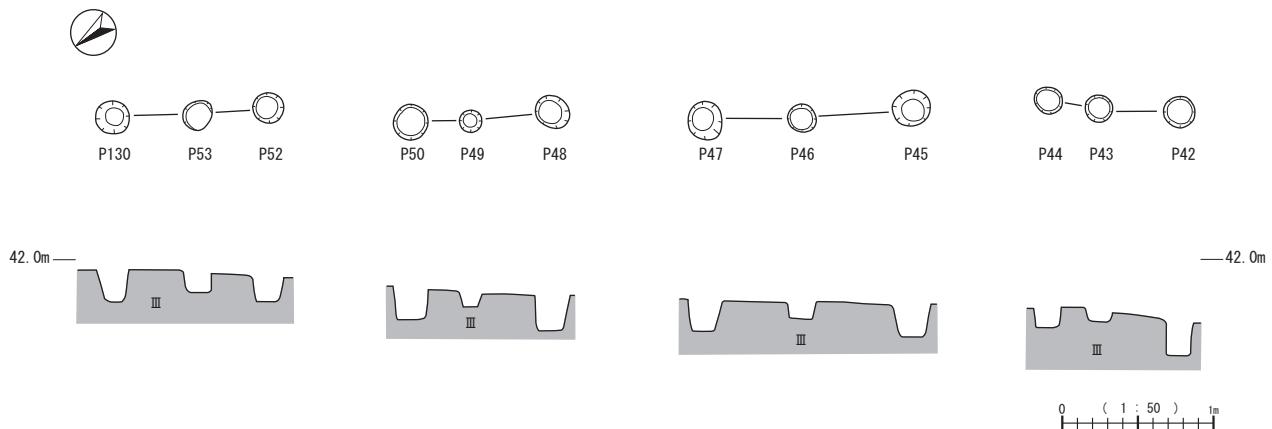
第25図 木棺墓出土遺物



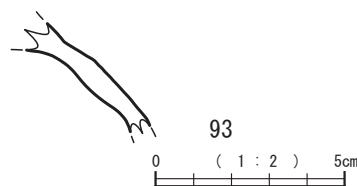
第26図 堀立柱建物跡



第27図 D・E区遺構配置図



第28図 ピット列1



第29図 ピット列1出土遺物

(5) ピット列1

ピット列1はD-1区・D-2区で検出した遺構で、発掘面積の制約もあり全形を窺うことはできていない。ピット3基で1組になると考えられ、4組確認できる。これら4組のピット列は基軸を略北東-南西と同じ方向にとるが一直線には並ばず、僅かにズレながら並んでいる。

直径18~25cmと比較的径の小さなピットで構成されており、両端のピットに比べ中央のピットは浅くなる傾向が窺える。ピットの間隔は15~50cmで、長さは7.3m以上になると考えられる。

また、このピット列を境に西側では比較的径の大きなピットが多く配置するのに対して、東側では径の小さなピット多くが配置する。

ピット列1出土遺物所見

カムイヤキ

A群（第29図93）

93はカムイヤキの壺形の肩部資料である。器面は両面とも丁寧な回転ナデが施され、叩き痕・当て具痕は完全にナデ消される。焼成は良好で堅緻である。

(6) ピット列2

ピット列2はE区で検出した遺構で比較的径の大きなピット7基が略東-西方向に並ぶものである。

ピットの上部が重機によって削平されているため、その深さは一定ではないが、P111・P113・P114・P115・P116はピットの底面がほぼ同じ高さとなる。

発掘面積の制約もあり遺構の全形を窺うことはできておらず、どのような建物を構成しているのか不明である。

ピット列2出土遺物所見

中国陶磁器

白磁（第31図94・95）

94は太宰府分類の白磁碗IV類に比定されるもので、口縁部を折り曲げ玉縁を成形している。95は太宰府分類の白磁碗IV-1類に該当するもので、高台内部の削りが浅く肉厚の底部となる。

滑石製石鍋（第31図96）

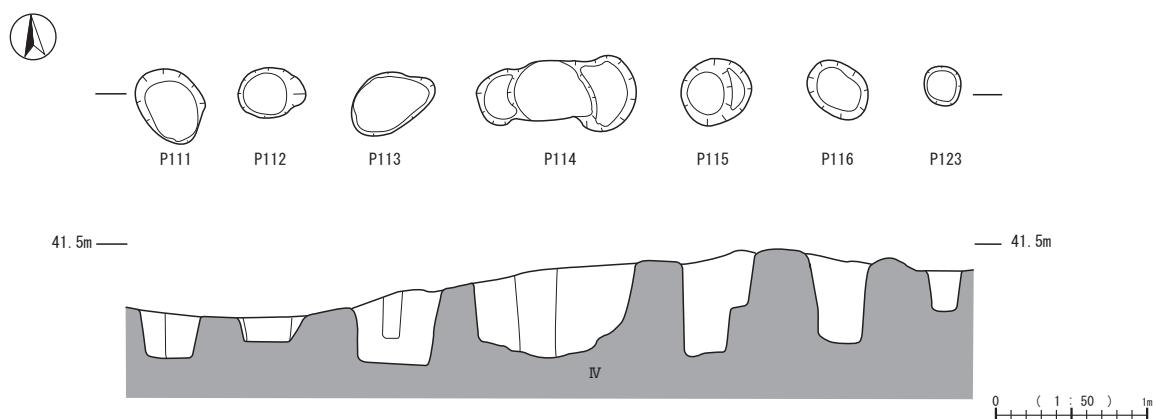
96は滑石製石鍋の胴部片である。外面には成形痕である縦位の削り痕が残り、内面には、横位の擦痕が器面に残る。

滑石製品（第31図97）

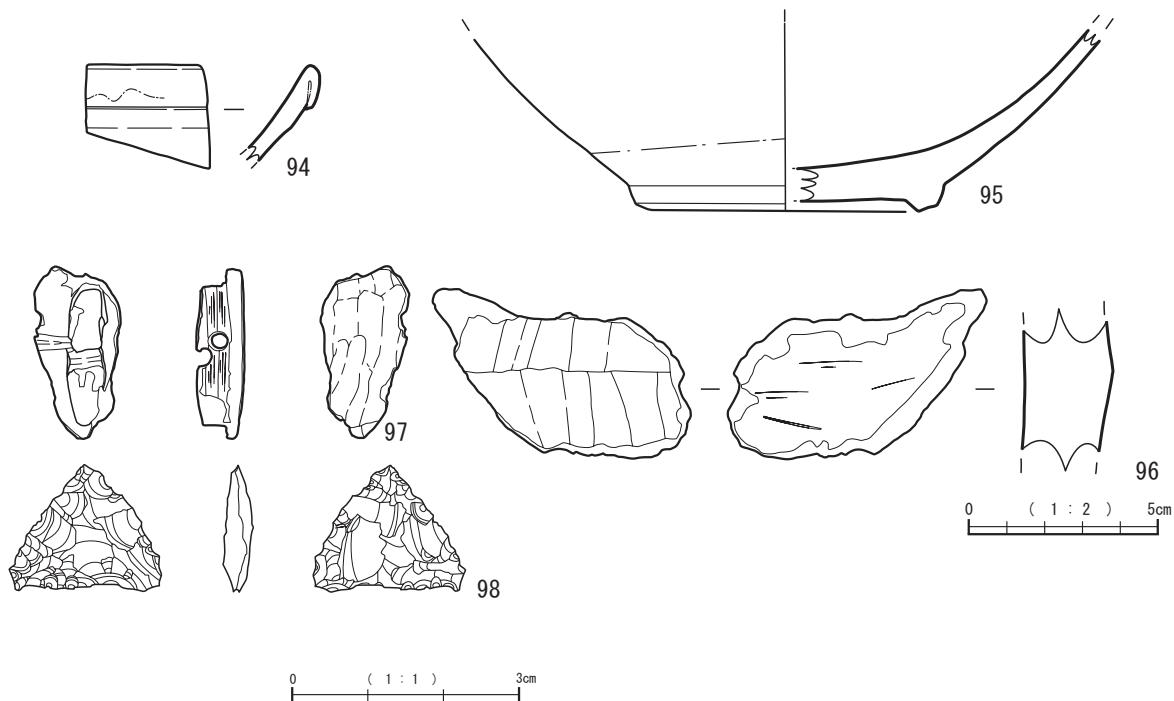
97は滑石製石鍋片を二次加工し製品としたもので、バレン状の形態となる。摘部には側面から2箇所穿孔されている。

石鎌（第31図98）

98は黒曜石製の石鎌である。基部の抉りは浅く、側縁部は僅かに外湾するもので、平面形態は概して正三角形状となる。不純物がほとんど混入しない黒曜石が用いられており、佐賀県伊万里市腰岳産の黒曜石に類似する。



第30図 ピット列2



第31図 ピット列2出土遺物

(7) 鍛冶炉跡1

鍛冶炉跡1はD区の北側でⅡb層の上面から検出した遺構で、南側には鍛冶炉跡2が隣接して位置している。平面形は長軸56cm×短軸35cmの略楕円形となり、断面形は弧を描き掘り鉢状となる。

炉壁は外側は赤色を呈し、内側は黒褐色となり、火を強く受けた部分がより黒色化していることが確認できる。

(8) 鍛冶炉跡2

鍛冶炉跡2は鍛冶炉跡1の南側で隣接してⅡb層の上面から検出した遺構である。平面形は長軸30cm×短軸25cmの略円形となり、断面形は弧を描き掘り鉢状となる。

鍛冶炉跡1同様、炉壁の外側は赤色を呈し、内側は黒褐色を呈す。

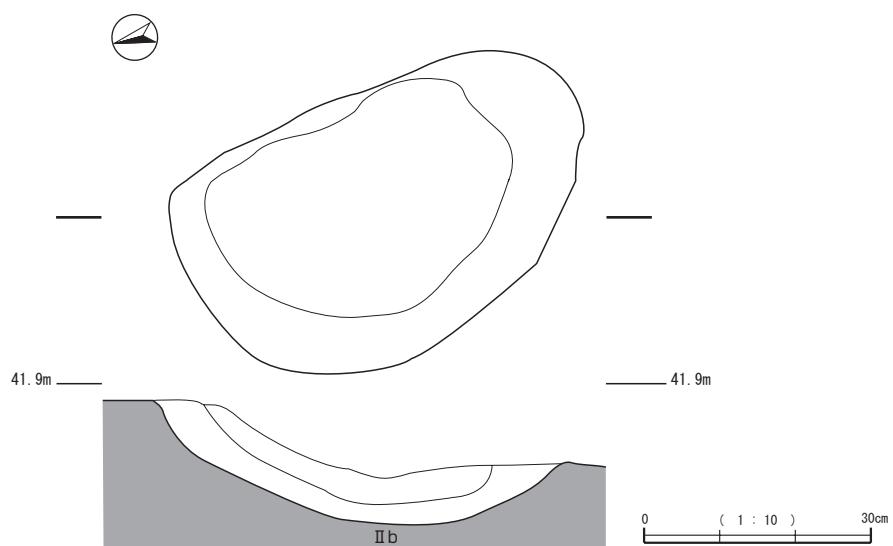
Ⅱ層出土鍛冶関連遺物

羽口（第34図99）

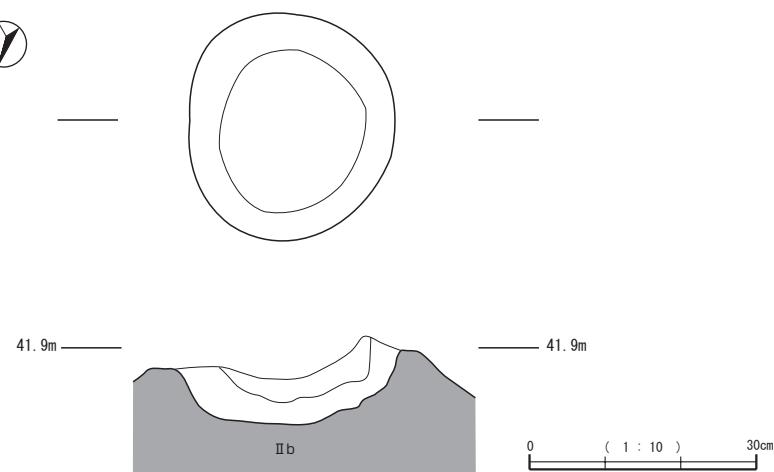
99は土製の鞴の羽口片である。胎土は泥胎質で触ると指に微細粒が付着する。

鉄滓（第34図100）

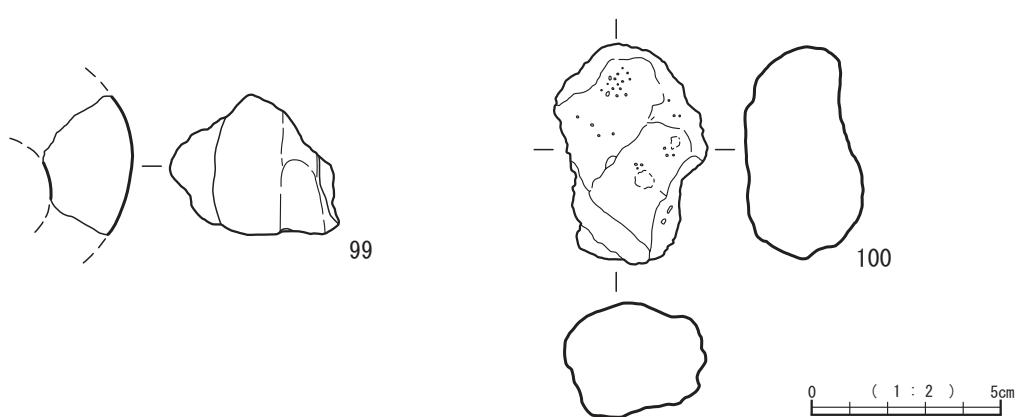
100は鉄滓で、表面はポーラス状となり脆い。土を含んで固結しており、鍛冶炉の炉底で溜まった鉄分が固まってできた鉄滓と考えられる。



第32図 鍛冶炉跡1



第33図 鍛冶炉跡2



第34図 II層出土鍛冶関連遺物

第6表 第II文化期遺構出土遺物観察表

検査番号	遺物番号	出土地区	層位	遺構名	種別	器種	分類1	部位	外面	内面	焼成	材質(胎土)	色調	備考
第 22 図	81	D-2 区	埋土	P80	土器	-	底IV類	底部	-	-	脆弱	a	赤褐色	
	82	D-3 区	埋土	P20	滑石混入土器	鍋	-	底部	削り	ナデ	良好	滑石混入	暗褐色・赤褐色	
	83	D-3 区	埋土	P20	カムイヤキ	-	A群	胴部	平行線叩き痕	格子目當て具痕	良好	石灰岩	灰色	
	84	D-3 区	埋土	P19	越州窯系青磁	碗	I類	口縁部	ヘラ削り	回転ナデ	良好	やや粗	黄緑色	Ⅲ層出土と接合
	85	D-4 区	埋土	P131	白磁	碗	IV	口縁部	ヘラ削り	回転ナデ	堅	緻密	白色	
	86	D-4 区	埋土	P131	白磁	皿	森田B群	底部	ヘラ削り	回転ナデ	堅	緻密	白色	
	87	D-4 区	埋土	P131	滑石製石鍋	鍋	-	縫耳	縫位削り	削り	-	滑石	灰色	
	88	D-1 区	埋土	P11	滑石製品	バレン状製品	-	-	削り	削り	-	滑石	黒色・灰色	
	89	E 区	埋土	P106	石器	石斧	IV類	-	-	-	-	頁岩	黄灰色	
	90	E 区	埋土	P119	石器	磨敲石	II類	完形	-	-	-	ホルンフェルス	青緑色	
	91	D-1 区	埋土	P10	石器	磨敲石	II類	端部破損	-	-	-	砂岩	灰色	
第 25 図	92	C 区	埋土	木棺墓	カムイヤキ	壺	A群	完形	回転ナデ	格子當て具痕・回転ナデ	良好	砂粒	灰色	
第 29 図	93	D-4 区	埋土	ピット列1 (P42)	カムイヤキ	-	A群	肩部	回転ナデ	回転ナデ	良好	砂粒	青灰・褐色	
第 31 図	94	E 区	埋土	ピット列2 (P115)	白磁	碗	IV類	口縁部	ヘラ削り	回転ナデ	堅	緻密	白色	
	95	E 区	埋土	ピット列2 (P113)	白磁	碗	IV 1類	底部	ヘラ削り	回転ナデ	堅	緻密	白色	
	96	E 区	埋土	ピット列2 (P113)	滑石製石鍋	鍋	-	胴部	縫位削り	擦痕	-	滑石	灰色	
	97	E 区	埋土	ピット列2 (P116)	滑石製品	バレン状製品	-	削り	削り	-	-	滑石	黒色・灰色	
第 34 図	98	E 区	埋土	ピット列2 (P116)	石器	石鎚	-	完形	-	-	-	黒曜石	黒色	
	99	D-3 区	II層	包含層	羽口	-	-	-	-	-	-	泥胎質	黄褐色	
	100	D 区	II層	包含層	鉄滓	-	-	-	-	-	-	ボーラス状	褐色	

第6節 包含層出土遺物

(1) II層出土遺物所見

II層からは第I・II文化期の両期の遺物が混在したかたちで出土している。

土器

II類（第36図101）

101は口縁部が肥厚する壺形土器と考えられ、口縁部は外反ぎみに肥厚する。

III類（第36図102・103）

102・103は薄手の壺形土器と考えられる。102は口縁部資料で1条沈線が斜位に施されている。口唇部は平坦となり口縁部の外反も比較的緩やかである。103は頸部資料で、沈線状のものが2条確認できるが、文様なのか判然としない。

VII類（第36図104）

104は外耳部と考えられるもので、形骸化しており、厚ぼったく瘤状となる。

X類（第36図105・106）

105・106は外来系の土器と考えられる。105は壺形土器と考えられ、頸部で有段部を形成して肩部へと移行する。色調は黒褐色と暗く、他の土器と様相を異にする。106は深鉢形土器の口縁部資料で、口唇部に1条、口縁部下部に2条突帯が囲繞する。口縁部下部の突帯2条は併走し、突帯の断面形は略三角形状となる。胎土は精製され石英・赤色粒を混入する。

XI類（第36図107）

107は鉢形土器と考えられるもので、口縁部は外反し大きく外開きとなる。内面屈曲部以下を工具により削り調整を行っている。

底III類（第36図108・109）

108・109は中空脚台となるものである。108は脚部からきれいな弧を描きながら、くびれ部を形成し立ち上がる。109はくびれ部で僅かに膨らみ立ち上がるものと考えられる。

底IV類（第36図110）

110は底部立ち上がりにくびれ部を形成するが、くびれは弱く立ち上がり直上的である。判然としないが、底裏面に木葉痕状の痕跡が確認できる。

底V類（第36図111）

111は不明土器底部として扱った。底部はベタ底高台状となり、高台脇を押圧し凹ませ段を形成して胴部へと移行する。胎土には多くの混入物を含み、石英、角閃石、黒雲母、赤色粒などを含む。

黒色土器（第36図113）

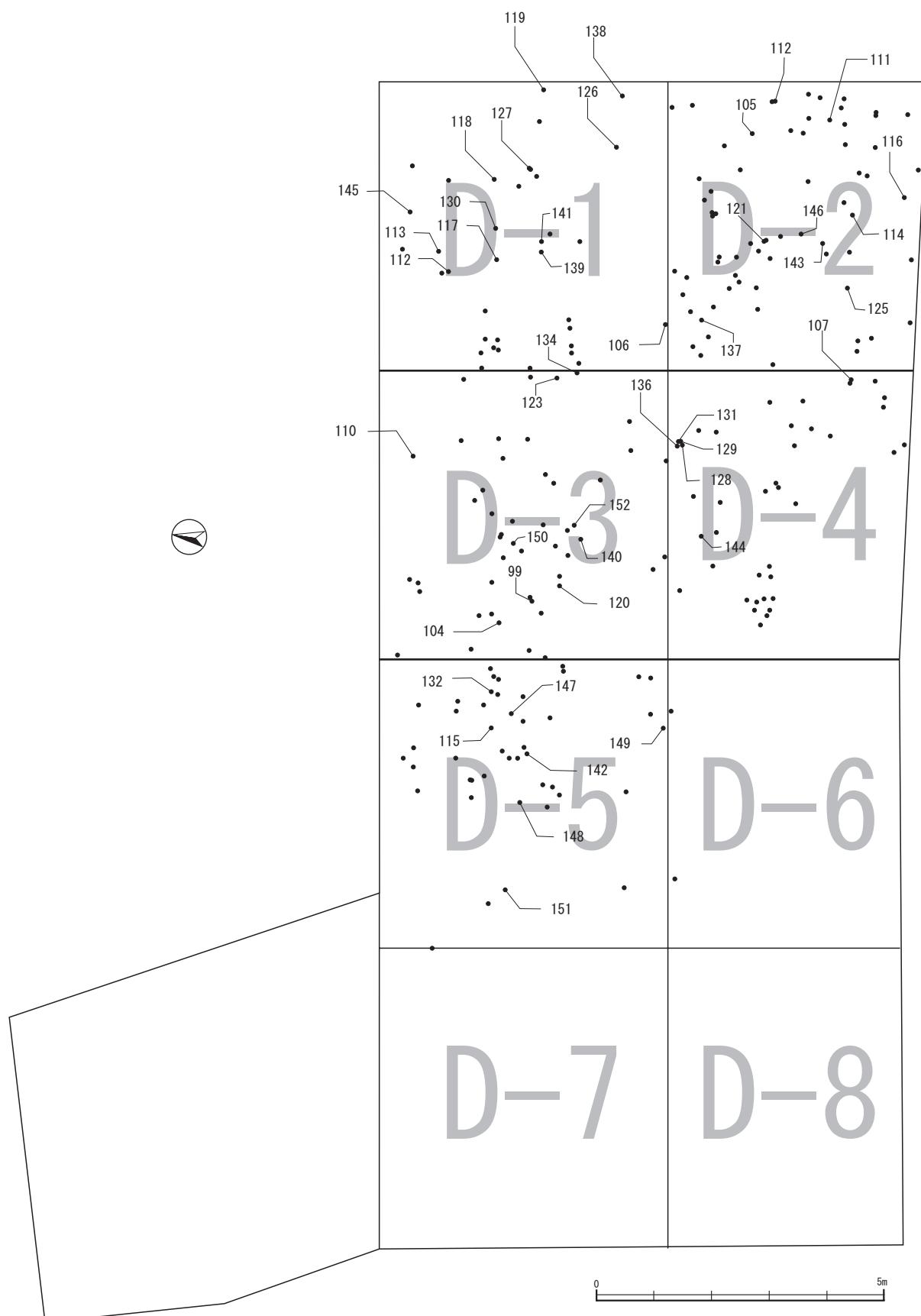
113は小片であるが、黒色土器の体部と考えられる。内面のみ黒色化しており、いわゆる内黒となる。器面が摩耗し磨き調整痕などは確認できない。胎土は精製され泥胎質となる。

滑石混入土器（第36図112）

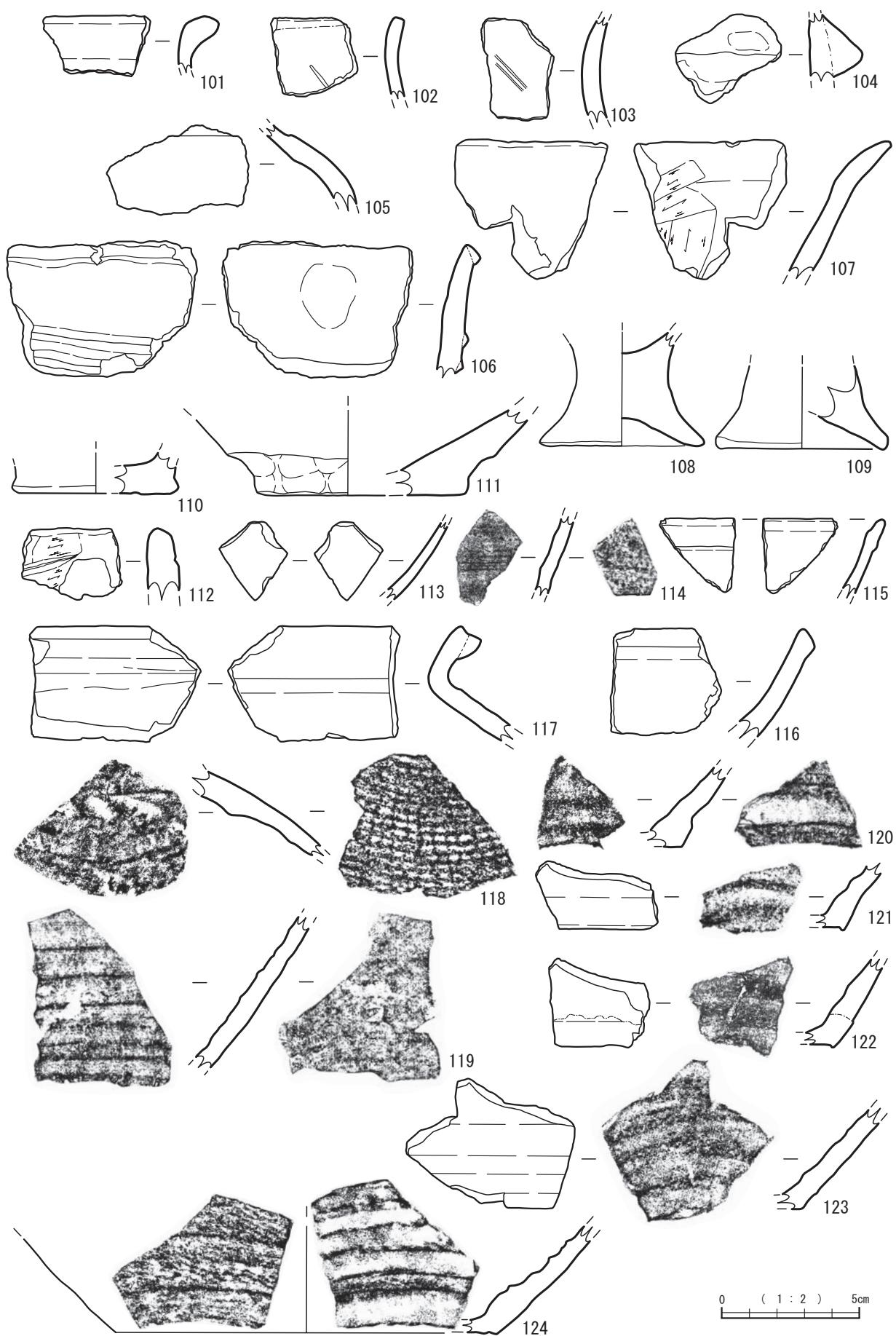
112は滑石混入土器の口縁部資料である。口唇部は平坦面を形成するが丸みを帯びる。直口口縁となると考えられ、外面には削り調整痕が施されている。

朝鮮系無釉陶器（第36図114）

114は朝鮮系無釉陶器の胴部資料である。器面内外面とも丁寧な回転ナデが施される。胎土は白い線条の帶が混ざり込み、堆積状となる。



第35図 D区包含層遺物出土状況



第36図 II層出土遺物(1)

カムイヤキ

A群（第36図115～124）

115・116は太宰府分類白磁碗IV類を模倣した口縁部に玉縁をもつ碗形器種である。115は口縁部に玉縁をもつが、玉縁は小さく、その中央部が凹むもので、碗形I3類に比定される。116は大きな玉縁をもつもので、明瞭な稜線によって口縁が縁取られている。碗形I2類に比定される。

118は壺形の肩部で、外面は平行線文の叩き痕が確認でき、内面には扇状當て具痕が確認できる。119は胴部資料で、外面は平行線文の叩き痕が回転ナデによってナデ消されており、内面は回転ナデが施される。

120～124は底部資料である。121～123は内外面に回転ナデが施され、121・123は焼成が悪く、122は良好である。120は立ち上がり部がくびれるもので、内外面とも回転ナデが施されるが外面には粘土接合痕が残る。焼成は悪い。124は内外面とも回転ナデによって仕上げあられるが、外面には平行線文の叩き痕が残り、内面には格子目當て具痕が残る。

B群（第36図117）

117は甕形の資料で、口縁部が外側に強く屈曲するものである。口縁部側縁が外方へ拡張し断面形が三角形状を呈し、口唇部は中央が凹む。甕形I5類に比定される。

中国陶磁器

青磁（第37図125～127）

125は太宰府分類越州窯系青磁碗I類の口縁部資料と考えられる。口縁部が直線的に開くと考えられる。

126は太宰府分類の越州窯系青磁碗I類の口縁部資料と考えられる。口縁部上部を指ナデによって仕上げ、その下部が僅かに膨らむ。釉色は黄緑色を呈し、発色は悪い。

127は太宰府分類の初期高麗系青磁碗III類の底部資料と考えられ、削りだしによって高台を成形している。高台外面には範削り痕が顕著に残り、高台疊付は釉を削り取る。見込み部には重ね焼きの際の目跡が残る。釉色は黄緑色を呈し、発色は悪い。

白磁（第37図128～136）

128～130は太宰府分類白磁碗IV類の口縁部資料である。口縁部には肉厚の玉縁が成形され、体部は回転ヘラ削りによって整形が行われている。

135・136は太宰府分類白磁碗IV類の底部資料である。135は高台内部の割りが浅く肉厚の底部となり、見込み部に圈線が廻る。136は底部及び体部下位に鉋削り痕が明瞭に残る。高台内部の割りは浅く、肉厚の底部となる。焼成不良のためか、釉色が褐色を呈しており、発色が悪い。

131～133は太宰府分類白磁碗V類の口縁部資料である。131・133は口縁部が僅かに外反するもので、口縁部上部のみ回転ナデで仕上げ、それ以下は回転ヘラ削り痕が顕著に残る。釉色は白色となる。132は口縁部がほぼ直口し、外面はヘラ削りが施される。134は太宰府分類白磁碗V類の体部資料と考えられるが判然としない。体部下位が丸みをもち、外方へ開く。見込み部には圈線が廻り、外面に範描きによる文様が施される。

不明磁器（137・138）

137・138は不明磁器である。137は体部片と考えられ、焼成不良のためか釉の発色が悪く、青紫色を呈する。138は釉がほとんど禿げおちているもので、焼成は悪く脆い。削りによって高台を整形している。

滑石製石鍋（第37図139）

139は滑石製石鍋の口縁部資料で、口径は28.4cmとなり大型である。外面には成形痕である縦位の削り痕が残り、内面は平滑であるが、擦痕が残る。

滑石製石鍋二次加工品（第37図140）

140は滑石製石鍋の縦耳部に二次加工を施したもので、細かい削り痕が正面・裏面・側面に残り、また溝状に削った跡も認められる。製品の製作途中のものなのか、または滑石粒を得るために削りを行っているのか判然としない。

石斧

IV類（第38図141）

141は石斧の未製品資料と考えられる。小型石斧の未製品で、整形剥離のみを行い研磨直前で放棄している。

V類（第38図142）

142は石斧の基部資料と考えられる。周縁を中心に研磨を行い、側面形態は比較的厚みがある。

石鎌（第38図143）

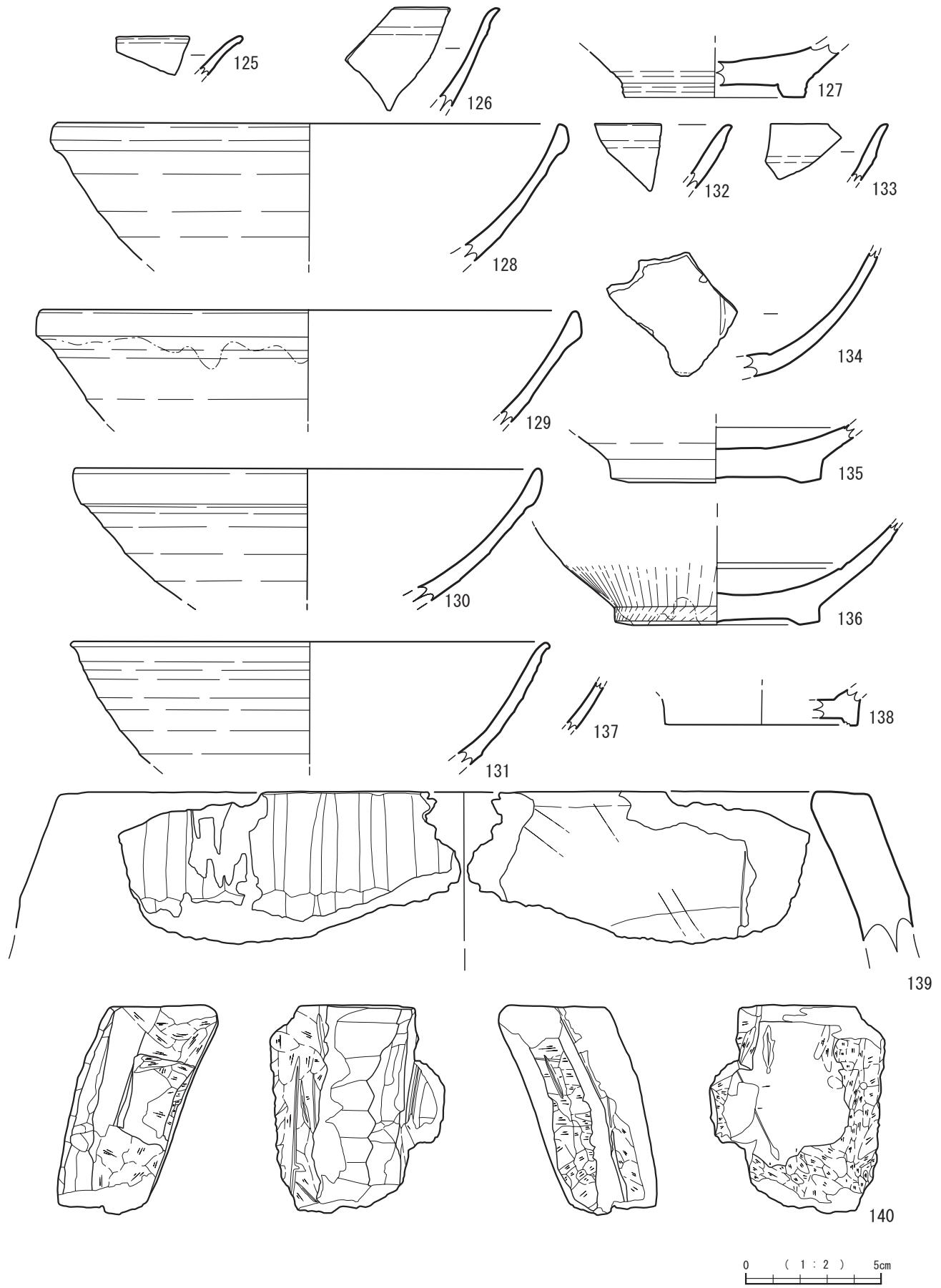
143は先端部と右脚部を欠失する黒曜石製の石鎌である。抉りは三角形状に作出され、側縁はやや外湾する。佐賀県伊万里市腰岳産の黒曜石に類似する。

スクレイパー（第38図144・145）

144は平面形が略五角形状となるスクレイパーで、周縁に細かな二次加工を行っている。145も先端部にわずかに二次加工が施されている。144・145とも不純物がほとんど混入しない黒曜石が用いられており、佐賀県伊万里市腰岳産のものに類似する。

使用痕のある剥片（第38図146）

146は使用された剥片と考えられるもので、剥離した際に形成された鋭利な面に微細剥離痕が残る。



第37図 II層出土遺物（2）

(2) III層出土遺物所見

III層からは、第I文化期に属すると考えられる遺物が主体的に出土している。

土器

II類（第39図147）

147は口縁部が略三角形状に肥厚する壺形土器で、肥厚部の稜は明瞭となる。

VI類（第39図148）

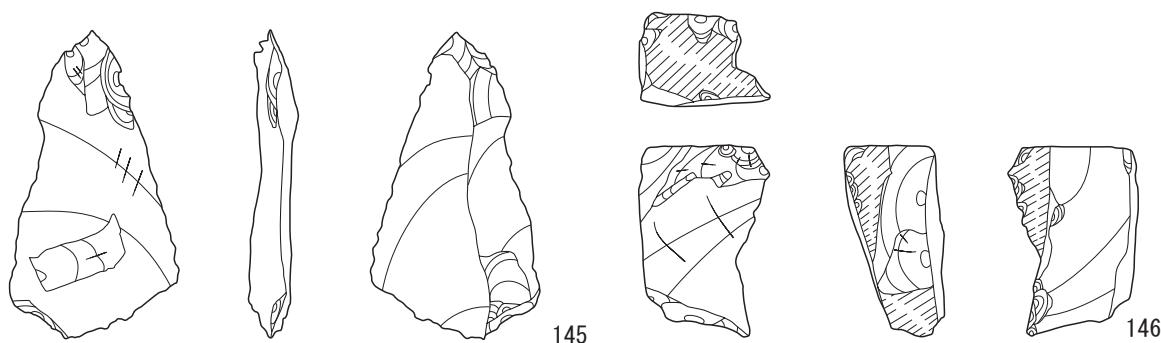
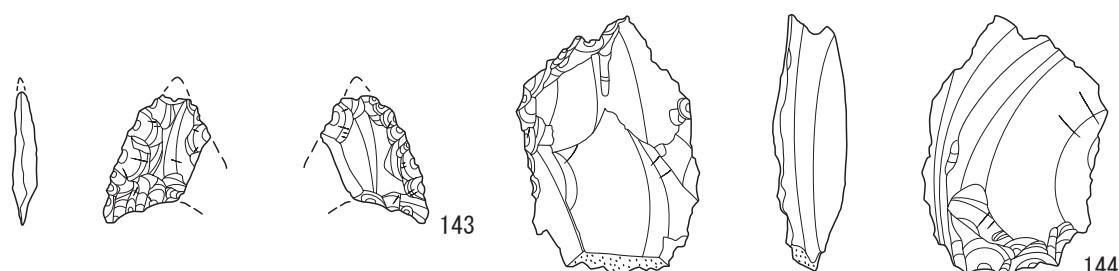
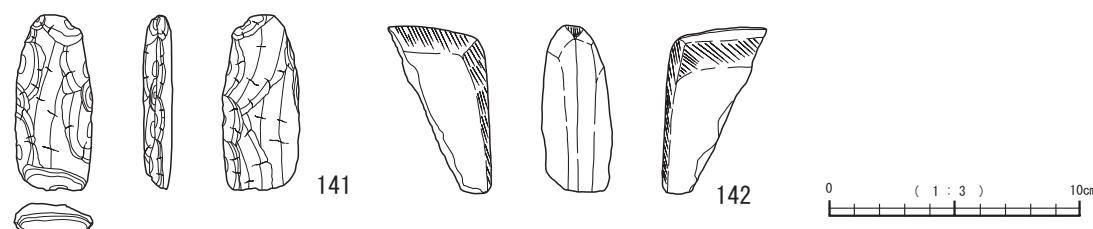
148は口縁部に断面が三角形状の突帯が貼付されるものである。口縁部は直口し、突帯の稜も明瞭である。

VII類（第39図149）

149は外耳が貼付される資料である。外耳の高さは7mm前後で、形がくずれ、歪む。

IX類（第39図150）

150はU字状の粘土紐を貼り付け、それに突帯を組み合わせたものである。U字状の粘土紐は下位に移行するに従い、高さ、幅ともに大きくなる。



第38図 II層出土遺物（3）

X類（第39図151）

151は、外来系土器と考えられるもので、胴部に刻目突帯文を囲繞する。

底I類（第39図152）

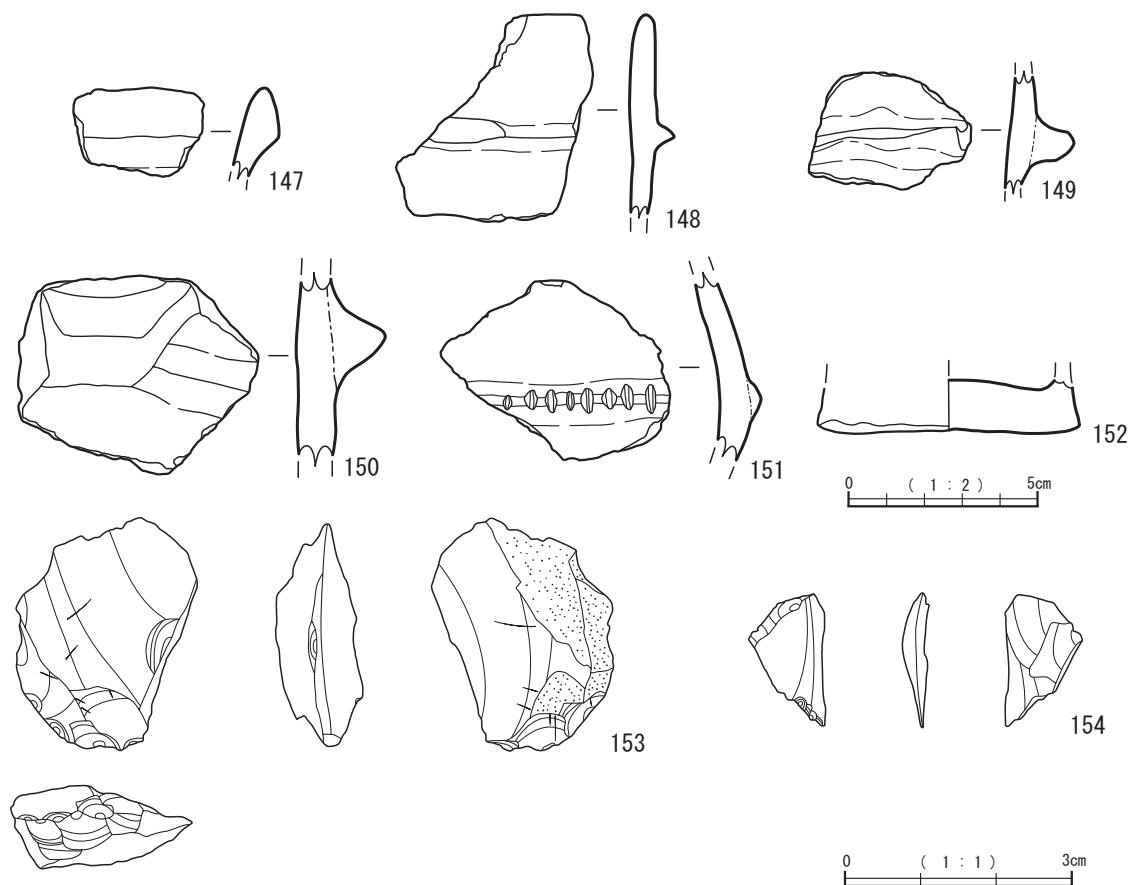
152は平底の底部資料である。立ち上がり部が僅かに内傾しており、底内面は中央部が盛り上がる。

スクレイパー（第39図153）

153はスクレイパーと考えられる。刃部に細かな二次加工が行われている。

二次加工剥片（第39図154）

154は黒曜石を素材とする二次加工剥片で、一部の縁辺に細かな二次加工が施されている。



第39図 III層出土遺物

第7表 包含層出土遺物観察表

挿図番号	遺物番号	出土地区	層位	遺構名	種別	器種	分類1	分類2	部位	外面	内面	焼成	材質(胎土)	色調	備考
第36図	101	D-2区	II層	包含層	土器	壺	II類	-	口縁部	-	-	脆弱	a	褐色	
	102	D-3区	II層	包含層	土器	壺	III類	-	口縁部	-	-	脆弱	a	暗褐色	
	103	D-2区	II層	包含層	土器	壺	III類	-	胴部	-	-	脆弱	a	褐色	
	104	D-3区	II層	包含層	土器	甕	VII類	-	胴部	-	-	脆弱	a	褐色	
	105	D-2区	II層	包含層	土器	壺	X類	突帯文系土器	胴部	-	指頭痕	良好	b	黒褐色	
	106	D-1区	II層	包含層	土器	甕	X類	-	口縁部	-	指頭痕	良好	d	明褐色	
	107	D-4区	II層	包含層	土器	鉢	XI類	-	口縁部	-	削り	良好	a	黄褐色	
	108	D区	IIb層	包含層	土器	-	底III類	-	脚台	-	-	良好	e	明褐色	
	109	D-1区	IIb層	包含層	土器	-	底III類	-	脚台	-	-	良好	e	明褐色	
	110	D-3区	II層	包含層	土器	-	底IV類	-	底部	-	-	脆弱	a	暗赤褐色	
	111	D-2区	II層	包含層	土器	-	底V類	-	底部	指頭痕	-	良好	g	明褐色	
	112	D-2区	II層	包含層	滑石混入土器	-	-	-	口縁部	削り	ナデ	良好	滑石混入	赤褐色	
	113	D-1区	II層	包含層	黒色土器	椀	-	-	胴部	-	-	良好	角閃石・石英混入	乳白色・黒色	
	114	D-2区	II層	包含層	朝鮮系無釉陶器	-	A群	-	胴部	回転ナデ	回転ナデ	良好	堆積状	暗灰・灰色	
	115	D-5区	II層	包含層	カムイヤキ	碗	A群	I 3	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	脆弱	砂粒	灰色	
	116	D-2区	II層	包含層	カムイヤキ	碗	A群	I 1	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	脆弱	砂粒	赤褐色	
	117	D-1区	II層	包含層	カムイヤキ	甕	B群	I 5	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	良好	砂粒	暗灰色	
	118	D-1区	II層	包含層	カムイヤキ	-	A群	-	肩部	平行線叩き痕	扇状當て具痕	良好	砂粒	暗灰色	
	119	D-1区	II層	包含層	カムイヤキ	-	A群	-	胴部	平行線叩き痕	回転ナデ	良好	石灰岩	青灰色	
	120	D-3区	II層	包含層	カムイヤキ	-	A群	-	底部	回転ナデ	回転ナデ	脆弱	砂粒	黄灰色	
	121	D-2区	II層	包含層	カムイヤキ	-	A群	-	底部	回転ナデ	回転ナデ	脆弱	砂粒	黄灰色	
	122	D-1区	II層	包含層	カムイヤキ	-	A群	-	底部	回転ナデ	回転ナデ	良好	砂粒	褐色・灰色	
	123	D-3区	II層	包含層	カムイヤキ	-	A群	-	底部	回転ナデ	回転ナデ	脆弱	砂粒	暗灰色	
	124	D-1区	II層	包含層	カムイヤキ	壺・鉢	A群	-	底部	回転ナデ	格子當て具痕	良好	砂粒	暗灰色	
第37図	125	D-2区	II層	包含層	越州窯系青磁	碗	I類	-	口縁部	ヘラ削り	回転ナデ	堅	緻密	黄緑色	
	126	D-1区	II層	包含層	越州窯系青磁	碗	II類	-	口縁部	ヘラ削り	回転ナデ	良好	緻密	黄褐色	
	127	D-1区	II層	初期高麗系青磁	碗	III類	-	底部	ヘラ削り	回転ナデ	堅	やや粗	黄緑色		
	128	D-4区	II層	包含層	白磁	碗	IV類	-	口縁部	ヘラ削り	回転ナデ	堅	緻密	黄白色	P131と接合
	129	D-4区	II層	包含層	白磁	碗	IV類	-	口縁部	ヘラ削り	回転ナデ	堅	緻密	白色	P131と接合
	130	D-1区	II層	包含層	白磁	碗	IV類	-	胴部	ヘラ削り	回転ナデ	堅	緻密	灰白色	D-4区・P133と接合
	131	D-4区	II層	包含層	白磁	碗	V類	-	口縁部	ヘラ削り	回転ナデ	堅	緻密	白色	
	132	D-5区	II層	包含層	白磁	碗	V類	-	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	堅	緻密	白色	
	133	D-3区	II層	包含層	白磁	碗	V類	-	口縁部	ヘラ削り	回転ナデ	堅	緻密	白色	
	134	D-3区	II層	包含層	白磁	碗	V類?	-	腰部	回転ナデ	回転ナデ	堅	やや粗	白色	
	135	D-4区	II層	包含層	白磁	碗	IV	-	底部	ヘラ削り	回転ナデ	堅	緻密	白色	
	136	D-4区	II層	包含層	白磁	碗	IV	-	底部	ヘラ削り	回転ナデ	堅	緻密	褐色	
	137	D-2区	II層	包含層	不明磁器	-	-	-	胴部	回転ナデ	回転ナデ	良好	緻密	青灰色	
	138	D-2区	II層	包含層	不明磁器	-	-	-	底部	削り	削り	脆弱	粗い	黄褐色	
	139	D-1区	II層	包含層	滑石製石鍋	鍋	-	-	口縁部	継位削り	擦痕	-	滑石	灰色	
	140	D-3区	II層	包含層	滑石製品	2次加工品	-	-	-	削り	削り	-	滑石	灰色	
第38図	141	D-1区	II層	包含層	石器	石斧	IV類	-	-	-	-	-	頁岩	黄灰色	
	142	D-5区	II層	包含層	石器	石斧	V類	-	基部	-	-	-	砂岩	灰色	
	143	D-2区	II層	包含層	石器	石鎌	-	-	先端・右脚欠失	-	-	-	黒曜石	黒色	
	144	D-4区	II層	包含層	石器	スクレイバー	-	-	-	-	-	-	黒曜石	黒色	
	145	D-1区	II層	包含層	石器	スクレイバー	-	-	-	-	-	-	黒曜石	黒色	
	146	D-2区	II層	包含層	石器	使用痕のある剥片	-	-	-	-	-	-	チャート	青紫色	
第39図	147	D-5区	III層	包含層	土器	壺	II類	-	口縁部	-	-	脆弱	a	黄褐色	
	148	D-5区	III層	包含層	土器	甕	VI類	-	口縁部	指ナデ	指頭痕	良好	b	褐色	
	149	D-5区	III層	包含層	土器	甕	VII類	-	胴部	-	-	良好	a	褐色	
	150	D-3区	III層	包含層	土器	甕	IX類	-	胴部	-	指頭痕	良好	a	褐色	
	151	D-5区	III層	包含層	土器	甕	X類	突帯文系土器	口縁部付近	-	-	良好	d	暗褐色	
	152	D-3区	III層	包含層	土器	-	底II類	-	底部	-	-	良好	a	赤褐色	
	153	D-5区	III層	包含層	石器	スクレイバー	-	-	-	-	-	-	チャート	黒色	
	154	D-1区	III層	包含層	石器	二次加工剥片	-	-	-	-	-	-	黒曜石	黒色	

第7節 表採遺物

中里遺跡からは多くの遺物が表採されている。ここでは、特徴的なものの一部を掲載する布目圧痕土器（第40図155）

155は土器内面に布目が圧痕されているもので製塙土器と考えられる。桶巻き作りによって製作されたと考えられ、土器内面には桶の圧痕も認められる。

石斧

II類（第40図156）

156は全磨製両刃石斧であるが基部が欠失している。平面形態は撥形になると考えられ、側面形態は扁平で薄い。

III類（第40図157）

157は全磨製方刃石斧の完形資料で、基部側の側面以外は丁寧に研磨され、研磨面は平面を呈する。平面形態は直方形となり、側面形態も扁平で薄い。

石錐（第40図158）

158は石錐で、先端部は使用によって欠失したと考えられる。平面形態は基部が幅が広く先端部付近が僅かにくびれると考えられる。断面形態は蒲鉾状となり、裏面は平坦となるが、先端部には細かな剥離調整が施される。腰岳産に類似する黒曜石を素材とする。

抉入石器（第40図159）

159は平面形態が三角形状となるが、下端部に半円形の抉りが施され、細かな剥離が観察される。抉り部は急斜度をなし、抉入石器と判断される。腰岳産に類似する黒曜石を素材とする。

スクレイパー（第40図160）

160はスクレイパーと考えられるもので、刃部に細かな微細剥離痕が残る。

微細剥離痕剥片（第40図161）

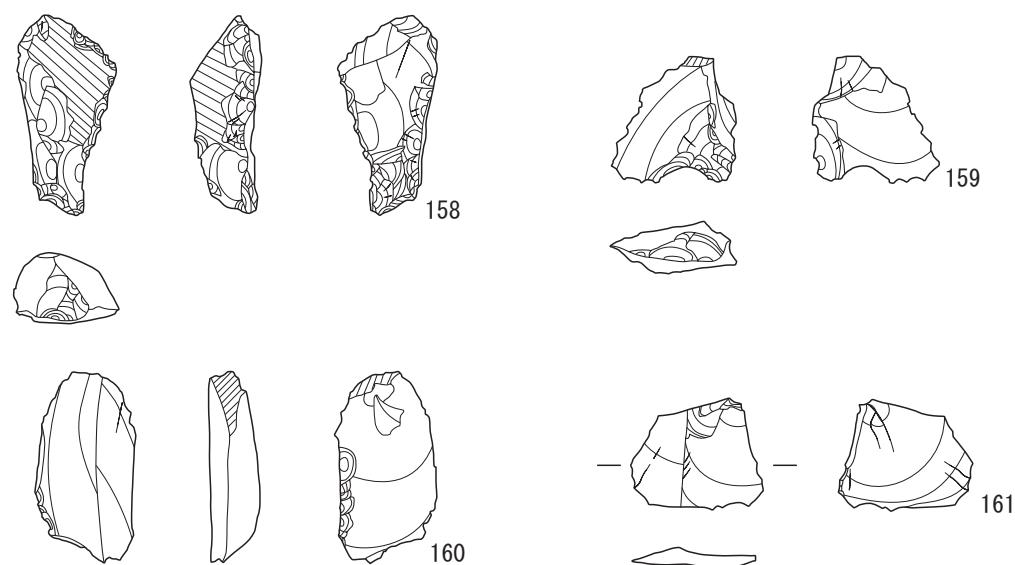
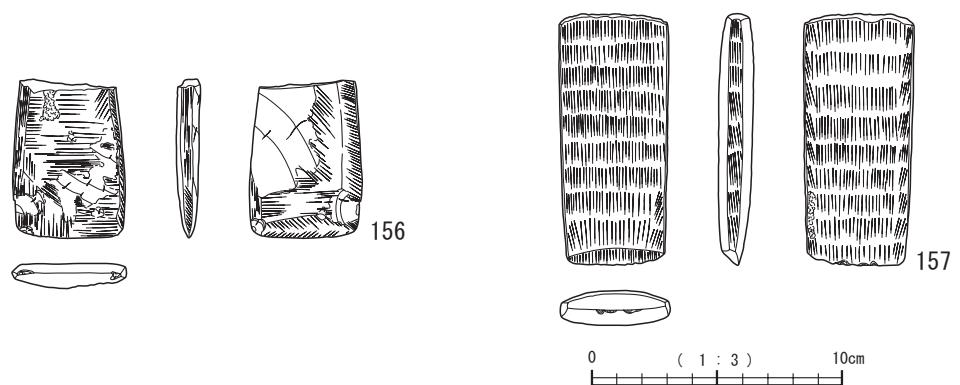
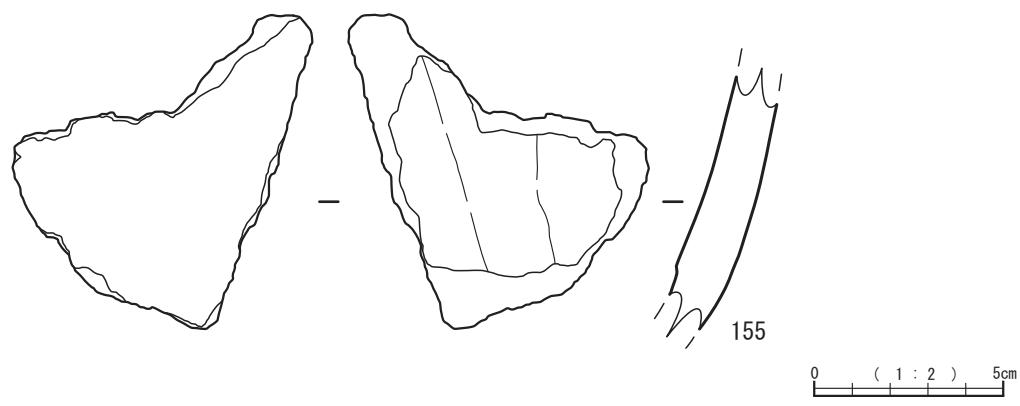
161は薄手の不定形剥片を素材とする。白色のチャートを素材とし、縁辺の一部に微細な剥離痕が観察される。

石皿（第41図162）

162は石皿で、使用面の凹みは浅く、敲打面と磨面を形成している。裏面は湾曲しており舟底状を呈する。

三角墜形石製品（第41図163）

163は三角柱形となる石製品である。平面形は周縁部が直線状とはならず、外湾する。側面形態は底面が平坦で直線的になるのに対し、上方は緩やかに湾曲し角が丸みを帯びる。



第40図 表採遺物(1)



第41図 表採遺物(2)

第8表 表土出土・表採集遺物観察表

挿図番号	遺物番号	採集地区	層位	遺構名	種別	器種	分類1	分類2	部位	外面	内面	焼成	材質(胎土)	色調	備考
第40図	155	E区	表採	-	布目压痕土器	-	-	-	胴部	ナデ	布目	良好	石灰岩	赤褐色	
	156	-	表採	-	石器	石斧	II類	-	基部破損	-	-	-	ホルンフェルス	緑色	
	157	-	表採	-	石器	石斧	III類	-	完形	-	-	-	黒色岩	黒色	
	158	-	表採	-	石器	石錐	-	-	-	-	-	-	黒曜石	黒色	
	159	-	表採	-	石器	抉入石器	-	-	-	-	-	-	黒曜石	黒色	
	160	E区	表採	-	石器	スクレイバー	-	-	-	-	-	-	チャート	黄白色	
	161	D区	表採	-	石器	使用痕のある剥片	-	-	-	-	-	-	チャート	黄白色	
第41図	162	-	表採	-	石器	石皿	-	-	側面破損	-	-	-	花崗岩	赤白色	
	163	-	表採	-	石製品	三角トウ形石製品	-	-	完形	-	-	-	砂岩	明褐色	

第IV章 自然科学分析

第1節 鹿児島県天城町中里遺跡より出土した植物遺体

札幌大学 高宮広土

(1) 遺跡の概要

- a: 遺跡の所在 鹿児島県天城町前里 521-1
- b: 遺跡の名称 中里遺跡
- c: 調査の機関 天城町教育委員会
- d: 調査担当者 牛ノ濱 修 具志堅 亮
- e: 発掘日時 平成21年2月24日～平成21年9月18日
- f: 文化 縄文時代晩期相当期；中世
- g: 遺跡の年代 縄文時代晩期相当期～中世

(2) バックグラウンド

中里遺跡は町営住宅建設事業に伴い、天城町教育委員会によって平成21年2月より約400m²の発掘調査が実施された。この遺跡は、標高40～50mの隆起珊瑚礁の台地上の南側縁辺部に立地し、調査の結果縄文時代晩期相当期と中世の二時期に生活が営まれた事が判明した。縄文時代晩期相当期の遺構からは仲原式土器に加え、石斧、石皿、磨石、敲石等が出土している。また、近隣に所在する塔原遺跡からは約200点の黒曜石が回収されているが、中里遺跡からも九州産と考えられる黒曜石製の石鏃等が検出された。また、住居跡3基および土坑1基が確認されたが、前者のうち2基は重機による掘削により、かなり破壊されていた。担当者が『2号住居跡』と仮称した住居跡は保存状況が良好であったという。また、中世の層からは、掘立柱建物跡、鍛冶炉跡（2基）および木棺墓が検出されている。さらに同層からは、中国産の玉縁口縁白磁、長崎県産の滑石製石鍋、カムイヤキ、布目压痕土器、朝鮮系無釉陶器、黒色土器、滑石混入土器など、喜界島所在の城久遺跡群と類似した遺物が出土地してある。

今回、縄文時代晩期および中世期における植物食利用を理解するために住居跡(Sh02 Sh03 およびそれぞれの周溝)、土坑、ピット、および木棺墓からサンプリングされた土壤がフローテーション処理され、回収された浮遊物が分析の対象となった。また、フローテーションではないが、いくつかピックアップされたサンプルが送付された。計476リットルの土壤がフローテーション処理され、446（粒／片）の植物遺体が回収された。また、天城町教育委員会によりピックアップ法による植物遺体のうち、今年度分類可能であったのは、計43片であった。

(3) 検出された植物遺体（第9表～第11表）

ブナ科子葉／堅果皮 (Fagaceae) (第42図164～166)

フローテーションにより回収されたブナ科子葉は計111（片）、ピックアップ法による回収方法では計30（片）であった。フローテーションによって検出されたブナ科子葉が小型の破片が主であったのに対し、ピックアップ法によって回収されたブナ科子葉は保存状態の良いものが数点存

在した。徳之島にはウラジロガシ (*Quarcus salicina* Bl.)、オキナワウラジロガシ (*Quarcus Miyagii* Koidz.)、アマミアラカシ (*Quarcus glauca* Thunb. Var. *amamiana* (Hats.) Hats.)、イタジイ (*Castanopsis sieboldii*(Mak.) Hatushima) の 4 種のブナ科が分布するが（初島・天野 1967；初島 1985）、今回回収されたブナ科子葉が、成熟したものと仮定するとオキナワウラジロガシより小型のブナ科と思われる。また、オキナワウラジロガシより小型ではあるが、サイズからいって 2 種のブナ科子葉が利用されていたかもしれない。一方は $16 \times 9.8 \times 6$ mm 前後のサイズ(164)で、もう一方は $8.5 \times 4.2 \times 2.7$ mm 前後のものである (165)。また、ブナ科の堅果皮が計 186 片フローテーションサンプルより回収されている (166)。166 の残存部のサイズは 1.4×1.8 (長さ×幅) mm である。

シマサルナシ (*Actinidia rufa* Plach.) (第 42 図 167)

シマサルナシの種子が 3 粒 LF 1 - 4 から検出された。写真 3 のサイズは $2.0 \times 0.9 \times 0.8$ mm (167) である。

オオムギ (*Hordeum vulgare* L.) (第 42 図 168)

オオムギの穎果が 1 粒 pit 11 より確認された。サイズは $3.6 \times 2.2 \times 1.6$ mm である (168)。

オオムギ？

オオムギと思われるが、保存状態が良好でないため、オオムギ？とした。上記オオムギと同サンプルから回収された。

同定不可能

計 129 の植物遺体を同定不可能とした。

(4) 考察

奄美・沖縄諸島において、近年まで縄文時代晩期相当期から植物利用を理解するサンプリングの機会に恵まれなかつたが、その前後の時期に野生植物を利用していた事が判明しつつあった（例 新城下原第二遺跡（高宮 2005a）、前原遺跡（高宮 1999）、高知口原貝塚（高宮 1998）等）。それゆえ縄文時代晩期相当期も狩猟採集の時期と推測されていた。2004 年に沖永良部島知名町に所在する縄文時代晩期相当期の遺跡である住吉遺跡より土壤のサンプリングを実施し、回収された植物遺体を分析した結果、イタジイやタブノキ等の野生植物が確認された（高宮 2005b）。今回、縄文時代晩期相当期に属する土壤サンプルからはブナ科植物遺体とシマサルナシを得る事が出来た。徳之島には 4 種のブナ科が分布するが、今回回収されたブナ科子葉は大型のオキナワウラジロガシではない可能性が高いと思われる。また、熟成したブナ科子葉が利用されたと仮定すると、2 種のブナ科が利用されたかもしれない。また、シマサルナシは秋に熟するので、堅果類の検出とともに中里遺跡は少なくとも秋の期間に利用されたことを示唆する。今回の分析結果は、縄文時代晩期相当期の生業が狩猟採集であった事を支持するものである。中世の土壤サンプルからは、オオムギが回収された。徳之島伊仙町に所在する川嶺辻遺跡からも中世層からイネが検出されており（高宮 印刷中），この時期になるとこの島では穀類が一般的に利用されていたという情報が蓄積しつつある。

奄美・沖縄諸島では、炭化植物遺体の回収率は低いという印象があるが、今回も全体では、1リットル中0.94(粒／片)の炭化植物板の回収率であった。また、遺構間においても1リットル中0から3.2(粒／片)で、堅果皮が多く回収されたサンプルには分布密度は高かったが、やはり回収率は少ない。また、遺構間の差も堅果皮をのぞくとあまりないように思われる(第10表)。奄美・沖縄諸島における炭化植物遺体回収率は、高くはないものの、このような作業を地道に実施する事により、最終的には大きな成果が得られるであろう。今後もフローテーションを実施する事により、「沖縄では回収しにくい」と信じられている植物遺体を回収し、琉球列島における先史・原史時代の植物利用をより一層明らかにすることができるであろう。

謝辞

このような機会を与えて下さった天城町教育委員会具志堅亮氏に心より感謝申し上げます。本研究の一部は文科省科研費(課題番号21101005)の助成を受けて行われた。

《参考文献》

高宮広土

- 1998 「植物遺体からみた柳田國男『海上の道』」『民族学研究』63(3):283-301
1999 「栽培植物の探索」『前原遺跡』宜野座村教育委員会(編) PP259-PP275 宜野座村教育委員会:宜野座村
2005a 「新城下原第二遺跡より出土した植物遺体」『新城下原第二遺跡発掘調査報告所』
沖縄県立埋蔵文化財センター(編) PP287-PP294 沖縄県立埋蔵文化財センター:西原町
2005b 「住吉遺跡より出土した植物遺体」『住吉遺跡』知名町教育委員会(編) PP100-PP107 知名町教育委員会:
知名町
印刷中「川嶺辻遺跡出土の植物遺体」『川嶺辻遺跡発掘調査報告』伊仙町教育委員会(編) 伊仙町教育委員会:
伊仙町
初島住彦
1985 『琉球植物誌』沖縄生物教育研究会:浦添市
初島住彦・天野鉄男
1967 『琉球植物目録』デイゴ社:那覇市

表9表：中里遺跡より出土した植物遺体

L.F No.	サンプル地点	層位	土壤量(l)	浮遊物量(g)	シマサルナシ (粒)	オオムギ(粒)	オオムギ(片)	堅果類子葉(片)	堅果皮(片)	堅果皮？(片)	同定不可能(片)	計(粒/片)
14	Sh02-1	i	12	11.8	3			30		25		33
5-8	Sh02-1	i	19	6.72					18		3	21
9-12	Sh02-1	i	22	65.78				4		41		3
13-16	Sh02-2	i	18	2.04				4		17		4
17-20	Sh02-2	i	23	10.38				4		22		5
21-24	Sh02-2	i	19	3.33				1			1	2
25-24	Sh02-3	i	20	6.85				41		20		25
29-32	Sh02-3	i	22	4.04				5		13		12
33-36	Sh02-3	i	24	1.73				1			1	30
37-40	Sh02-3	i	24	6.62				3		7		6
41-42	Sh02-3	床着土器下層土	2	0.16							0	2
43-44	Sh02-4	i	10	5.74								2
45-46	Sh02-4	i	6	0.26								2
47-50	Sh02-4	i	18	4.6								3
51-54	Sh02-4	i	20	3.44								4
55-58	Sh02-4	i	20	1.55								10
59-62	Sh03	i	24	5.13								14
63-66	Sh03	i	22	10.43								40
67-70	Sh02-2(周溝)	埋土	14	0.79								18
71-72	Sh03-3(周溝)	埋土	8	0.97								40
73-74	Sh03-3(周溝)	埋土	16	5.17								3
75-76	P153	埋土	8	0.26								12
78	P131	埋土	6	1.74								0
79-82	P133	埋土	19	1.4								0
83-84	P109	埋土	12	8.5								0
85-90	P11	埋土	30	4.5								2
91-92	P152	埋土	4	0.13								0
93-96	土抗	埋土	24	0.66								0
97-98	土抗	埋土	10	0.98								0
			476	175.7	3	1	1	111	8	186	7	446

表10表：ピックアップ法により回収された植物遺体

サンプル No.	遺譜名	堅果類子葉(片)	堅果類子葉(片)	同定不可能(片)	計(片)
1	土抗	1	1		2
2	Sh01	4			4
3	Sh02			0	0
4	Sh02-3	1	5		6
5	Sh02-3	4		4	4
8	土抗	20	7	27	43
	計(片)	30	6	7	43

第11表：中里遺跡出土の植物遺体（遺構別）

LF No.	サンブル地点	層位	土壤量(0)	浮遊物量(g)	シマチャルナシ(乾)	オオムギ(乾)	オオムギ?	(片)	堅果類子葉?	(片)	堅果皮?	(片)	同定不可能?	(片)	小計(粒/片)	分布密度(粒・片/0)
14	Sh021	1	11.8	12	3				30		25			33	91	
58	Sh021	1	19	67.72						18				3	21	
9.12	Sh021	1	22	65.78				4		41				3	48	
	小計	33	84.3	3				34		84				39	160	3.02
13-16	サンブル地点	層位	土壤量(0)	浮遊物量(g)	シマチャルナシ(乾)	オオムギ(乾)	オオムギ?	(片)	堅果類子葉?	(片)	堅果皮?	(片)	同定不可能?	(片)	小計(粒/片)	分布密度(粒・片/0)
17-20	Sh022	1	23	20.4				4		22				4	25	
21-24	Sh022	1	19	3.33				1					1	2	31	
	小計	60	15.75					9		39				10	58	0.97
13-16	サンブル地点	層位	土壤量(0)	浮遊物量(g)	シマチャルナシ(乾)	オオムギ(乾)	オオムギ?	(片)	堅果類子葉?	(片)	堅果皮?	(片)	同定不可能?	(片)	小計(粒/片)	分布密度(粒・片/0)
25-24	Sh023	1	20	6.85				41		20				25	86	
23-32	Sh023	1	22	4.04				5		13				12	30	
33-36	Sh023	1	24	1.73				1						1		
37-40	Sh023	1	24	6.62				3		7				6	16	
41-42	Sh023	1	24	0.16												
	小計	92	19.4					50		40				43	133	1.45
13-16	サンブル地点	層位	土壤量(0)	浮遊物量(g)	シマチャルナシ(乾)	オオムギ(乾)	オオムギ?	(片)	堅果類子葉?	(片)	堅果皮?	(片)	同定不可能?	(片)	小計(粒/片)	分布密度(粒・片/0)
43-44	Sh024	1	10	5.74										2	2	
45-46	Sh024	1	6	0.26										3	3	
47-50	Sh024	1	18	4.6										1	4	
51-54	Sh024	1	20	3.44										4	10	
55-58	Sh024	1	20	1.55										6	14	
	小計	74	15.59						1		7			6	13	0.45
13-16	サンブル地点	層位	土壤量(0)	浮遊物量(g)	シマチャルナシ(乾)	オオムギ(乾)	オオムギ?	(片)	堅果類子葉?	(片)	堅果皮?	(片)	同定不可能?	(片)	小計(粒/片)	分布密度(粒・片/0)
59-62	Sh03	1	24	5.13				14		6				18	40	
63-66	Sh03	1	22	10.43						3				3	3	
	小計	46	15.56					14		2				9	43	
13-16	サンブル地点	層位	土壤量(0)	浮遊物量(g)	シマチャルナシ(乾)	オオムギ(乾)	オオムギ?	(片)	堅果類子葉?	(片)	堅果皮?	(片)	同定不可能?	(片)	小計(粒/片)	分布密度(粒・片/0)
67-70	Sh022(周溝)	堆土:	14	0.79					1						1	
71-72	Sh023(周溝)	堆土:	8	0.97											3	
73-74	Sh023(周溝)	堆土:	16	5.17										1	1	
	小計	38	6.93						1		1			2	5	0.13
13-16	サンブル地点	層位	土壤量(0)	浮遊物量(g)	シマチャルナシ(乾)	オオムギ(乾)	オオムギ?	(片)	堅果類子葉?	(片)	堅果皮?	(片)	同定不可能?	(片)	小計(粒/片)	分布密度(粒・片/0)
75-76	P153	堆土:	8	0.26						3				4	12	
78	P131	堆土:	6	1.74												
79-82	P133	堆土:	19	1.4												
83-84	P109	堆土:	12	8.5												
85-90	P11	堆土:	30	4.5				1							2	
91-92	P152	堆土:	4	0.13				1								
	小計	79	16.53		2			3		5				0	4	0.18
13-16	サンブル地点	層位	土壤量(0)	浮遊物量(g)	シマチャルナシ(乾)	オオムギ(乾)	オオムギ?	(片)	堅果類子葉?	(片)	堅果皮?	(片)	同定不可能?	(片)	小計(粒/片)	分布密度(粒・片/0)
93-96	土括01	堆土:	24	0.66												
97-98	土括01	堆土:	10	0.98												
	小計	34	1.64												0	0.00
13-16	サンブル地点	層位	土壤量(0)	浮遊物量(g)	シマチャルナシ(乾)	オオムギ(乾)	オオムギ?	(片)	堅果類子葉?	(片)	堅果皮?	(片)	同定不可能?	(片)	小計(粒/片)	分布密度(粒・片/0)
99-102	木枯裏01	堆土:	20	3.03												
	小計	20	3.03		175.7				1		111			8	186	0.94
	計	476												7	229	



164

ブナ科子葉

165

ブナ科子葉



166

堅果皮



167

シマサルナシ



168

オオムギ 背面 側面 腹面

第42図 中里遺跡より出土した炭化植物遺体

第2節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤茂・尾崎大真・丹生越子・廣田正史・小林紘一

Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani

(1) はじめに

中里遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

第12表 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-15347	遺構：竪穴住居跡2 (SH02) 調査区：C区 試料No. ① 層位：埋土1層	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-15348	調査区：C区 試料No. ② 層位：土坑01層	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-15349	調査区：D区 試料No. ③ 層位：P9炭化物層	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)

(3) 結果

第13表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行つて暦年較正に用いた年代値、慣用に従つて年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の

宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

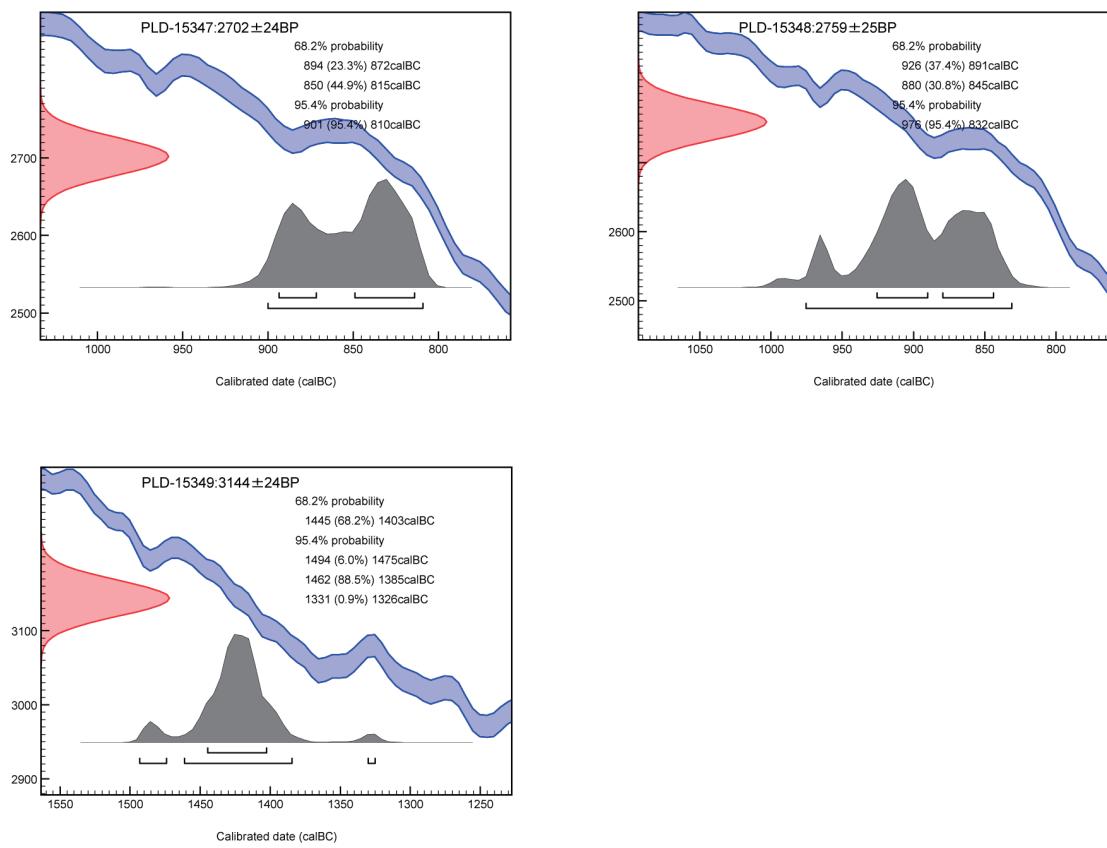
¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ:IntCal09）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第13表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1 σ)	¹⁴ C年代 (yrBP±1 σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-15347 試料No.①	-25.13±0.12	2702±24	2700±25	894BC(23.3%) 872BC 850BC(44.9%) 815BC	901BC(95.4%) 810BC
PLD-15348 試料No.②	-31.67±0.17	2759±25	2760±25	926BC(37.4%) 891BC 880BC(30.8%) 845BC	976BC(95.4%) 832BC
PLD-15349 試料No.③	-25.33±0.14	3144±24	3145±25	1445BC(68.2%) 1403BC	1494BC(6.0%) 1475BC 1462BC(88.5%) 1385BC 1331BC(0.9%) 1326BC

《参考文献》

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代, 3-20.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.



第43図 曆年較正結果

第V章 総括

中里遺跡は公営住宅建設事業（前里新団地）に伴い平成21年2月～9月に発掘調査が行われた。出土遺物から大きく二つの時期に主体をもつ複合遺跡であることが確認され、それぞれの時期に伴う遺構群も検出した。

本遺跡の調査成果については、前章までに詳細を述べたが、本章では遺構・遺物などに若干の考察を加え、まとめとしたい。

第I文化期（縄文時代晩期相当期後半～弥生時代前期相当期）

第I文化期に属する遺物は、住居跡、土坑、包含層、から出土している。

12類に分類された土器のI～XII類土器・底I～II類土器は当該期に属するものと考えられる。

I類土器はミミズ腫状の突帯の両脇に刺突文を施しており、喜念I式と考えられる。II類は口縁部が略三角形状または、略方形に肥厚するもので、宇宿上層式系統の土器と考えられる。III類は仲原式の壺形土器であると考えられるもので、IV類は押引き文状の痕跡が確認できるが、押引き文とは断定し難い。V類は出土土器の中で主体となるもので、仲原式土器の範疇に含まれると考えられるものである（上原・当真1984）。口縁帶全てを肥厚させるもの・口縁部下部のみ肥厚するものがあり、後者のほうが圧倒的に多い。VI類は口縁部下部に突帯を囲繞するもので、塔原遺跡で、仲原式土器などに伴って出土しており、型式的に仲原式土器に後続する土器と考えられている（天城町教育委員会1999）。VII類は外耳土器と考えられるものであるが、小片のみの出土のため、器形は不明である。VIII類は口縁部が直口するものである。IX類は突帯とU字状の粘土帯が貼り付けられるもので、塔原遺跡で出土例がみられる。X類は外来系土器と考えられるもので、壺形土器の口縁部と肩部・三条の突帯を貼付するもの・刻目突帯を有するものの4点が確認されている。XI類は鉢形土器となるものである。XII類には不明土器を一括して扱った。

底部をみてみると尖底（底I類土器）と平底（底II類土器）が確認され、平底には、丸底の底部に粘土帯を貼り付けて平底状に製作したと考えられるものもある。

縄文時代後期相当期に見られる有文土器は遺跡全体でほとんど見られず、縄文時代晩期相当期の喜念I式が出土しているが、出土点数が1点と極端に少ない。仲原式土器やそれに後続する突帯を囲繞する土器が主体となることから、第I文化期は縄文時代晩期後半～弥生時代前期に相当する時期と考えられる。第I文化期に属する2号住居跡と土坑の埋土から採集した炭化物による放射性炭素年代測定の結果からも、近い年代が示されている。

石器は10種類と多くの器種が出土している。なかでも、石鏸や石錐、スクレイパー、抉入石器などは徳之島で産出しない黒曜石を石材として用いており、その黒曜石は不純物がほとんど混入しておらず、佐賀県伊万里市腰岳産の黒曜石と類似する。

食料残滓は、2号住居跡と土坑から出土したブナ科子葉、シマサルナシなどの植物遺体のみで、脊椎動物遺体や貝類遺体は出土しておらず、従来から指摘されている当該期の遺跡の特徴に当てはまる（高宮1982）。

第I文化期に属する遺構は住居跡3基と土坑1基が確認された。検出した遺構は前章で述べたとおり、重機による掘削によって削平されており、2号住居跡と土坑のみがその全体的な規格が把握できた。

2号住居跡は、堅穴式住居跡でその床面より仲原式土器（V類土器）が出土している。

住居の特徴として周壁沿いの床面に溝が断続的に廻ることがあげられる。このような床面に溝が廻る住居跡が同じ天城町内の塔原遺跡や喜界町のハンタ遺跡などで確認されている。この周壁溝の性格については、塔原遺跡の調査によって溝の延長線に石列が確認されたことから石材の抜き取り痕であることが確認されている（天城町教育委員会 1999）。

土坑は焼土を伴っており、地炉として使用されたとも考えられるが、斜位にのびる柱痕状のものが確認され、これが土坑に付随するものなのか、二次的なものなのか判然とせず、用途は不明である。土坑内埋土からはV類土器（仲原式）やVI類土器などが出土している。

第Ⅱ文化期（中世 11～14世紀）

第Ⅱ文化期に属する遺物が、ピット群、木棺墓、ピット列1、ピット列2、包含層などから出土している。

出土遺物のなかで出土量が多く主体的となるのは、白磁碗IV類とカムイヤキである。出土したカムイヤキは、そのほとんどがA群に分類される資料群で（伊仙町教育委員会 2005）、年代的には11世紀後半～13世紀前半頃に位置づけられ、白磁碗IV類は、太宰府C期（11世紀後半～12世紀前半）に位置づけられる（太宰府市教育委員会 2000）。

初期高麗系青磁碗III類、白磁碗V類も太宰府C期（11世紀～12世紀前半頃）に位置付けられるもので、滑石製石鍋は縦長の方形把手が付するものが本遺跡より出土しており、木戸編年II類（11世紀前後）に、山本・山村の編年中世I期（11世紀後半～12世紀前半）に該当する（木戸 1993、山本・山村 1997）。それを模倣した滑石混入土器も近い年代が考えられる。

上記の遺物の年代観より、第Ⅱ文化期の主体となる年代は11世紀後半～12世紀頃となると推定される。しかし、上記の年代の範疇に収まらない遺物も僅かだが、確認されている。

主体となる年代よりも古い遺物として、兼久式土器（底IV類土器）や越州窯系青磁I類が挙げられる。越州窯系青磁I類は初期貿易陶磁器とされ、太宰府A期（8世紀末頃～10世紀中頃）に位置づけられている（太宰府市教育委員会 2000）。これらの遺物の年代観をそのまま第Ⅱ文化期の展開期の年代として援用できるのか、どうかは今後の資料増加を待ちたい。

白磁皿森田B群は、森田勉による研究によって14世紀頃の年代が考えられているものである。1点のみの出土であるが、第Ⅱ文化期が14世紀代まで存続する可能性を示唆していると考えられる。

第Ⅱ文化期に属する遺構は、ピット群、木棺墓1基、堀立柱建物跡1基とピット列2基、鍛冶炉2基が確認された。

ピット群であるが、D区検出ピット群に関しては第Ⅰ文化期の遺物を主体的に包含するⅢ層を掘りこんで構築しているため、第Ⅱ文化期に属する可能性が高いと判断できるが、B区、C区、E区検出のピット群に関しては、検出面が重機の掘削によって削平され、また、住居跡床面より検出したピットと第Ⅱ文化期に属するピット埋土の色調が非常に類似していることからピットの帰属時期を判断するのが非常に難しかった。そのため、第Ⅱ文化期に帰属するピットが調査区内の広範囲に分布していたことから、住居跡内より検出しておらず、第Ⅰ文化期に属する遺物が出土しないピットは第Ⅱ文化期に属する遺構として便宜的に扱っているので注意を要する。

ピット群からは底IV類土器（兼久式）、滑石混入土器、カムイヤキ、越州窯系青磁I類、白磁碗IV類、白磁皿森田B群、滑石製石鍋、滑石製品、石斧、磨敲石が出土している。石斧や磨敲石は第Ⅰ文化期

に属する遺物とも考えられるが、南西諸島の当該期の遺跡から、石斧や磨敲石などが出土する事例もあり、判然としない。

ピット群のP9埋土より出土した炭化物を放射性年代測定を行った結果、第Ⅱ文化期の年代観とかけ離れた数値がでており、P9が第Ⅰ文化期に帰属する遺構なのか、二次的に前代の炭化物がピット内に混入したのか判然としない。

木棺墓は副葬品としてカムイヤキを埋納しており、その年代より11世紀後半～12世紀頃の年代が考えられる。重機の掘削によって大部分が破壊されており、その規格を確認することはできていないが、残存部の状況より、カムイヤキを木棺の南端に副葬している状況が窺える。同時代の遺跡と考えられる喜界町城久遺跡群山田中西遺跡においても、カムイヤキを墓内の南側に副葬した、土坑墓が3基検出しており（喜界町教育委員会2008）、本遺跡との共通性が窺える。

堀立柱建物跡は比較的大きな柱穴が梁行（2.7m）×桁行（2.9m）と配置されることから、4本柱の高倉状の建物であったことが想定される。

ピット列1は小さなピットが直線上に並ぶことなどから柵列跡と考えられ、遺構内より出土したカムイヤキから11世紀後半～13世紀頃の遺構と考えられる。沖縄県伊佐前原遺跡では本遺跡のピット列1（柵列跡）と類似した柵列跡が居住地と耕作地との間に配置されており、境界として機能したことが窺える。本遺跡では発掘面積の制約もあり、ピット列1（柵列跡）と他の遺構群との位置関係を窺い知ることはできていないが、ピット列1（柵列跡）を境に北西側では径の大きなピットが配置し、南東側では径の比較的小さなピットが配置している状況が看取される。

ピット列2は大型のピットが直線上に並ぶもので、その付近からも大型のピットが多く検出していることから、建物跡の一部であると考えられるが、こちらも発掘面積の制約により、建物の規格は確認できていない。ピット列2からは白磁碗IV類、滑石製石鍋、滑石製品、などと共に黒曜石製石鏃が1点出土しているが、これは第Ⅰ文化期に属する遺物と考えられ、二次的にピット内に混入したと考えられる。

鍛冶炉跡はⅡb層上面より検出し、付近の包含層からは鍛冶関連の遺物も出土した。開地において鍛冶が行われたことが窺われ、鍛冶炉に伴う建物跡の検討はできていない。

まとめ

上記したとおり、中里遺跡は多少前後する遺物を含むが縄文時代晚期相当期～弥生時代前期相当期と中世（11世紀後半～14世紀頃）の二つの時期の生活址が残る複合遺跡である。縄文時代晚期相当期～弥生時代前期相当期の遺構として住居跡が確認され、当該期の住居跡変遷を考えるうえで、貴重な資料追加となったと考える。

また、中世の主体となる年代である11世紀後半～12世紀頃は、カムイヤキ古窯跡群の操業時期と重なり、今後、この時期の徳之島の生産遺跡と消費遺跡との関係を考えていくうえで非常に重要な資料となると考えられる。

《参考文献》

- 上原靜・当真嗣一「仲原式土器の提唱について」『紀要』第一号 沖縄県教育委員会
天城町教育委員会 1999年『塔原遺跡』天城町埋蔵文化財調査報告書2

高宮廣衛 1982 年「南東文化概論」『縄文文化の研究 6』雄山閣
太宰府市教育委員会 2000 年『太宰府条坊跡 X V - 陶磁器分類編』太宰府市の文化財第 49 集
木戸雅博 1993 年「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究 IX』
伊仙町教育委員会 2005 『カムイヤキ古窯跡 IV』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書 12
山本信夫・山村信榮 1997 年「中世食器の地域性 - 九州・南西諸島」
『国立歴史民俗博物館研究報告』71
喜界町教育委員会 2008 年『城久遺跡群 山田中西遺跡 II』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書 9

謝辞

発掘調査から本報告書を作成するにあたって多くの方々に多大なご迷惑をおかけしたことと同時に、多くのご支援を賜りました。本報告書が計画通りに終了できたのは、多くの方々の協力があったからであります。

まず、発掘調査から報告書作成まで、多忙の中、何度も御指導・御支援して頂いた新里亮人氏に厚く御礼申し上げます。

また、伊仙町教育委員会及び伊仙町立歴史民俗資料館からは器具や機材の借用などを快く許可して頂くと共に多くの助言や御指導頂いたことに厚くお礼申し上げます。

さらに、牛ノ濱修氏には発掘調査を担当して頂くと共に、多くの御指導を賜りました。厚く御礼申し上げます。

たいへん多忙の中、植物遺体同定を快諾して頂いた高宮広土氏に厚く御礼申し上げます。

馬籠亮道氏には何度も天城町に足を運んで頂き、夜遅くまで報告書作成の指導を頂き、感謝申し上げます。

発掘調査の際に無理なお願いを快諾していただいた天城町シルバー人材センターの方々、また、発掘調査に従事して頂いた天城町民の皆様方、本当にご苦労様でした。厚く御礼申し上げます。特に、梅山スエさん、金子恵美子さん、小林秀樹さん、西松一美さんには現場引渡しの期限が迫る切羽詰まった現場状況のなかで、多くの無理なお願いをしたことを、お許し願うと同時に感謝申し上げます。

整理作業員として参加していただいた小林秀樹さん、近田いづみさん、盛美由紀さんには、多くの馴れない作業を快く引き受けたことに感謝申し上げます。

上記以外の方々から多くの御支援を頂きました。厚く御礼申し上げ、謝辞といたします。

発掘調査から報告書作成に当たって多数の先生方に御指導、御助言頂きました。下記に御芳名を記して御礼申し上げます。(敬省略 50 音順)

安座間充、伊藤勝徳、上原靜、内村光伸、翁長武司、川口雅之、木口裕史、岸本義彦、新里貴之、新東晃一、澄田直敏、瀬戸哲也、玉栄飛道、玉城靖、堂込秀人、中島恒次郎、中村和美、中山清美、西銘章、野崎拓司、前迫亮一、松村省三、宮城弘樹、向井一雄、吉岡武美、吉岡康弘

図 版



調査地伐採作業



調査地点近景



重機攢乱土除去作業



遺構検出作業



重機掘削跡



住居跡掘り下げ作業



遺跡から南方向を望む



発掘調査と並行して住宅建設工事着工



D 調査区北壁土層断面



1号住居跡検出状況



2・3号住居跡礫・遺物出土状況



2号住居跡土器出土状況



2・3号住居跡完堀状況



土坑半裁状況



土坑炭化樹子出土状況



木棺墓検出状況



木棺墓半裁状況①



木棺墓半裁状況②



掘立柱建物跡



鍛冶炉跡



鍛冶炉跡断面



C区完掘状況



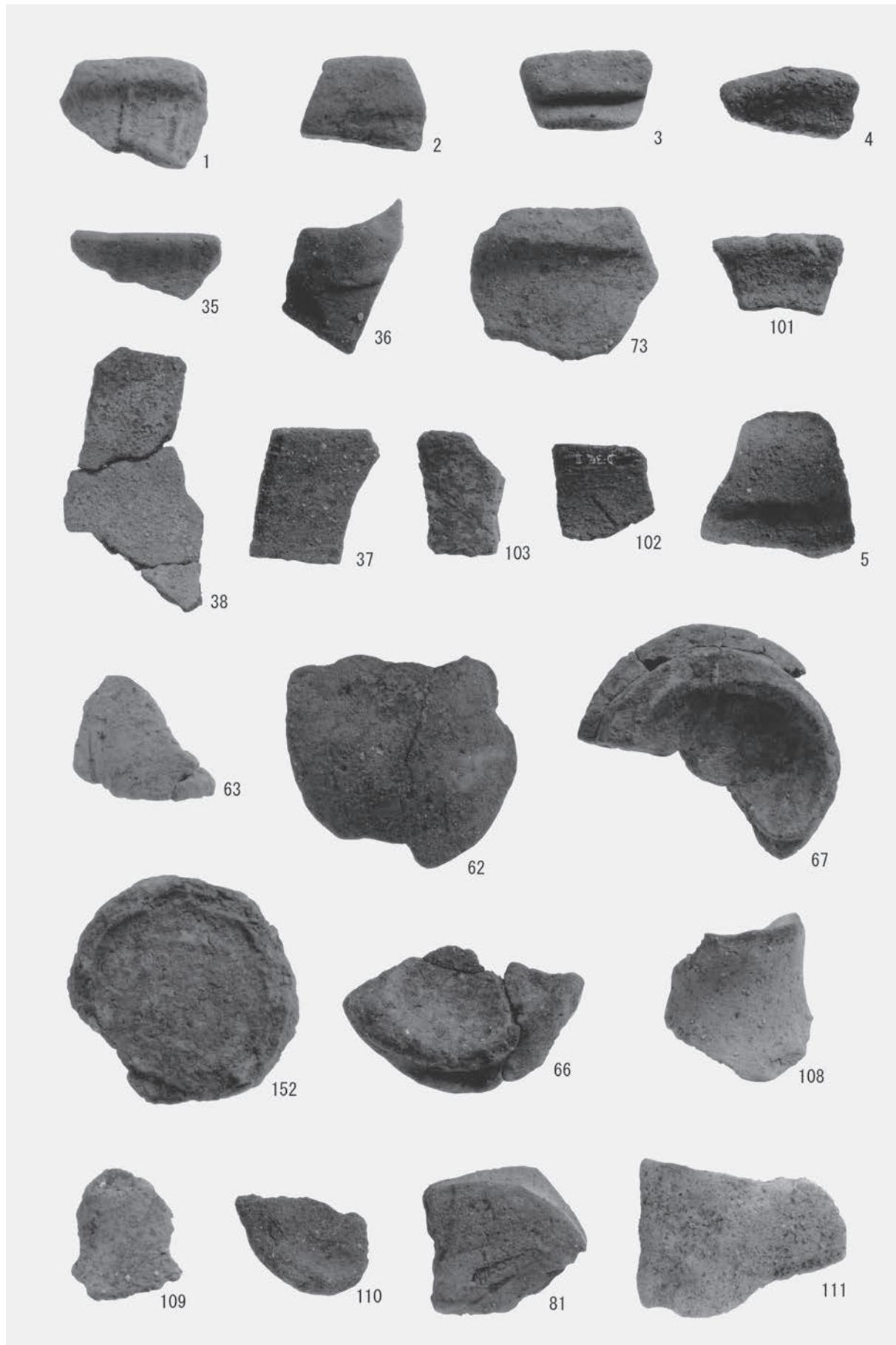
E区完掘状況



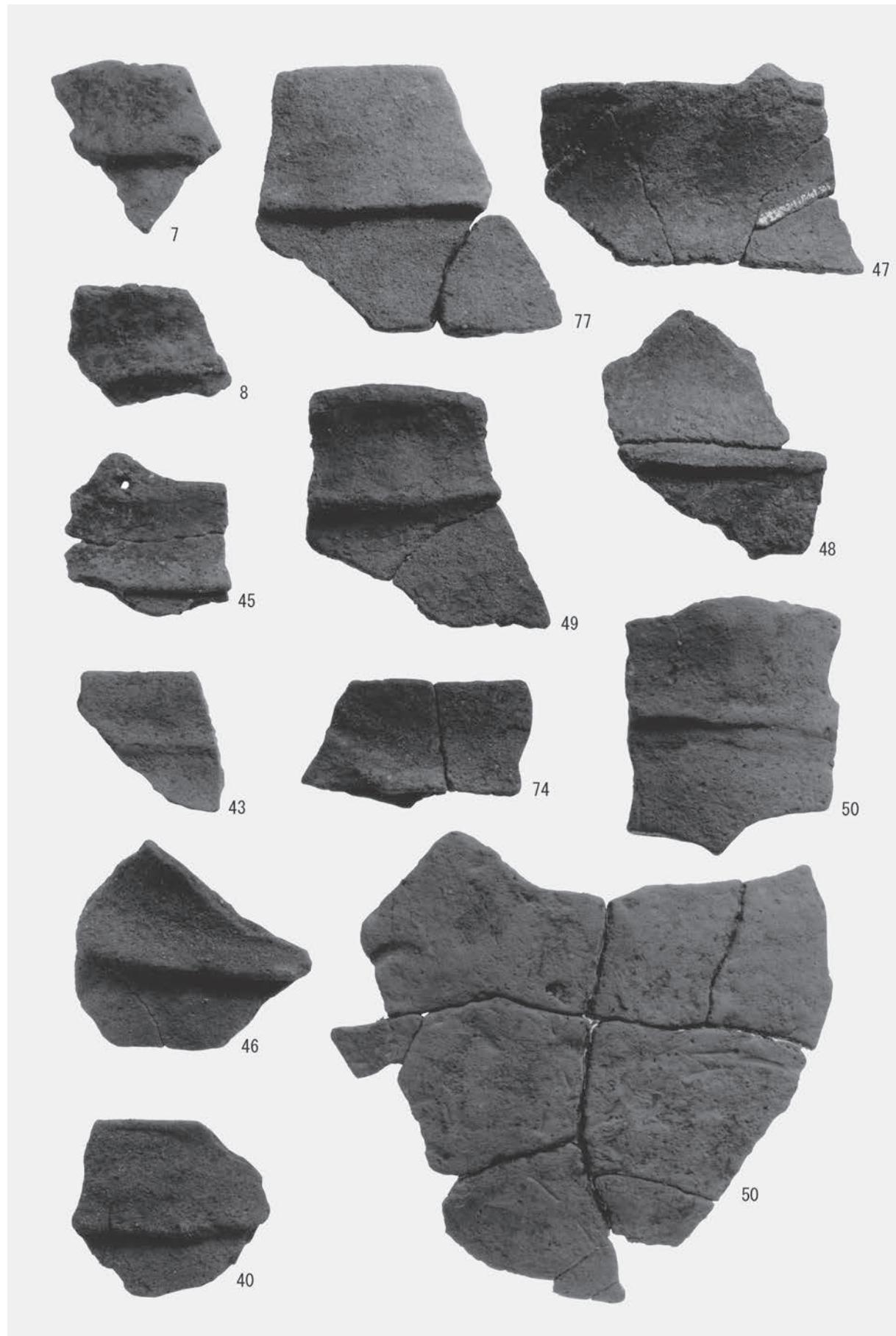
D区遺構検出状況



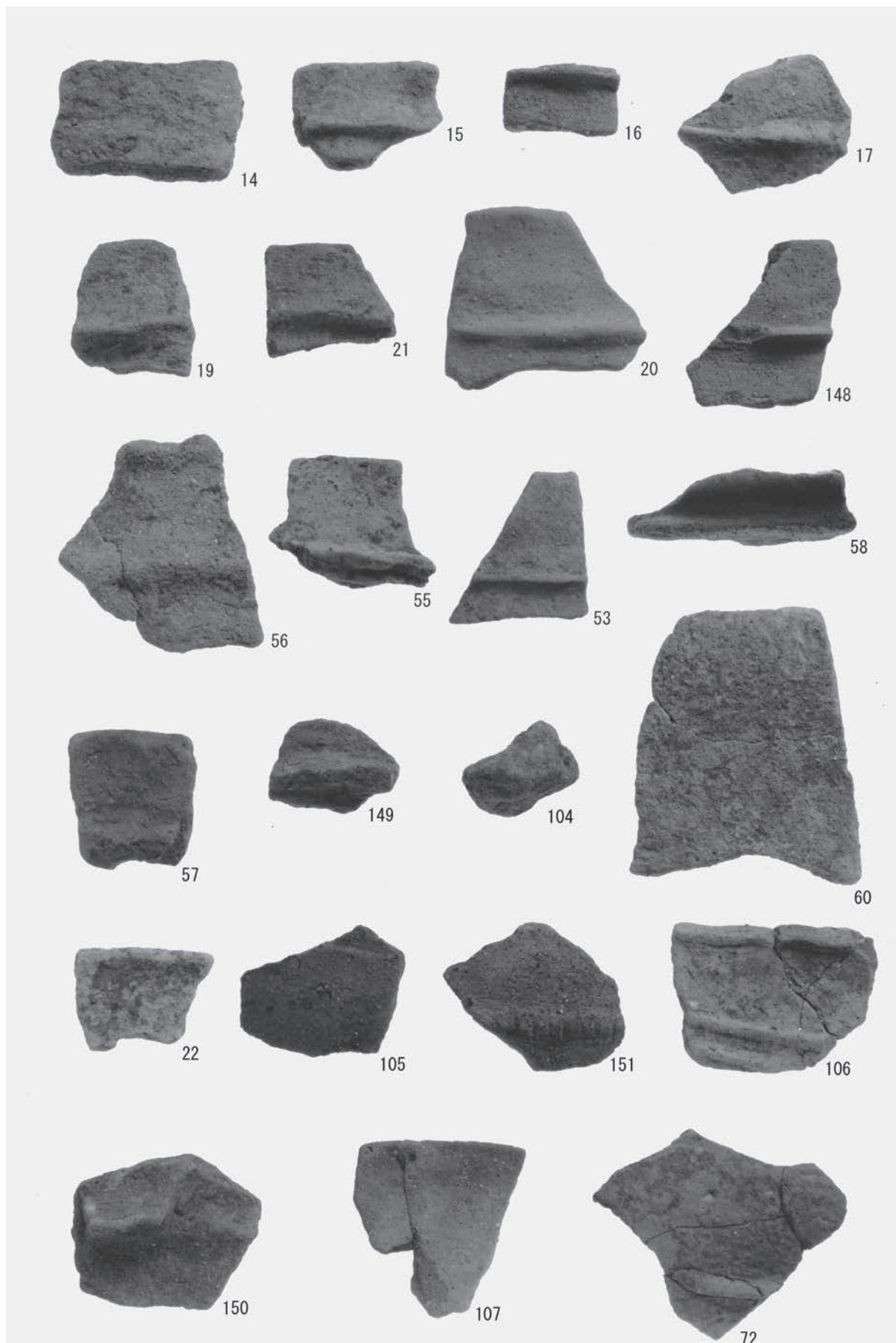
D区完掘状況



土器 I ~ IV類・底 I ~ 底 V類



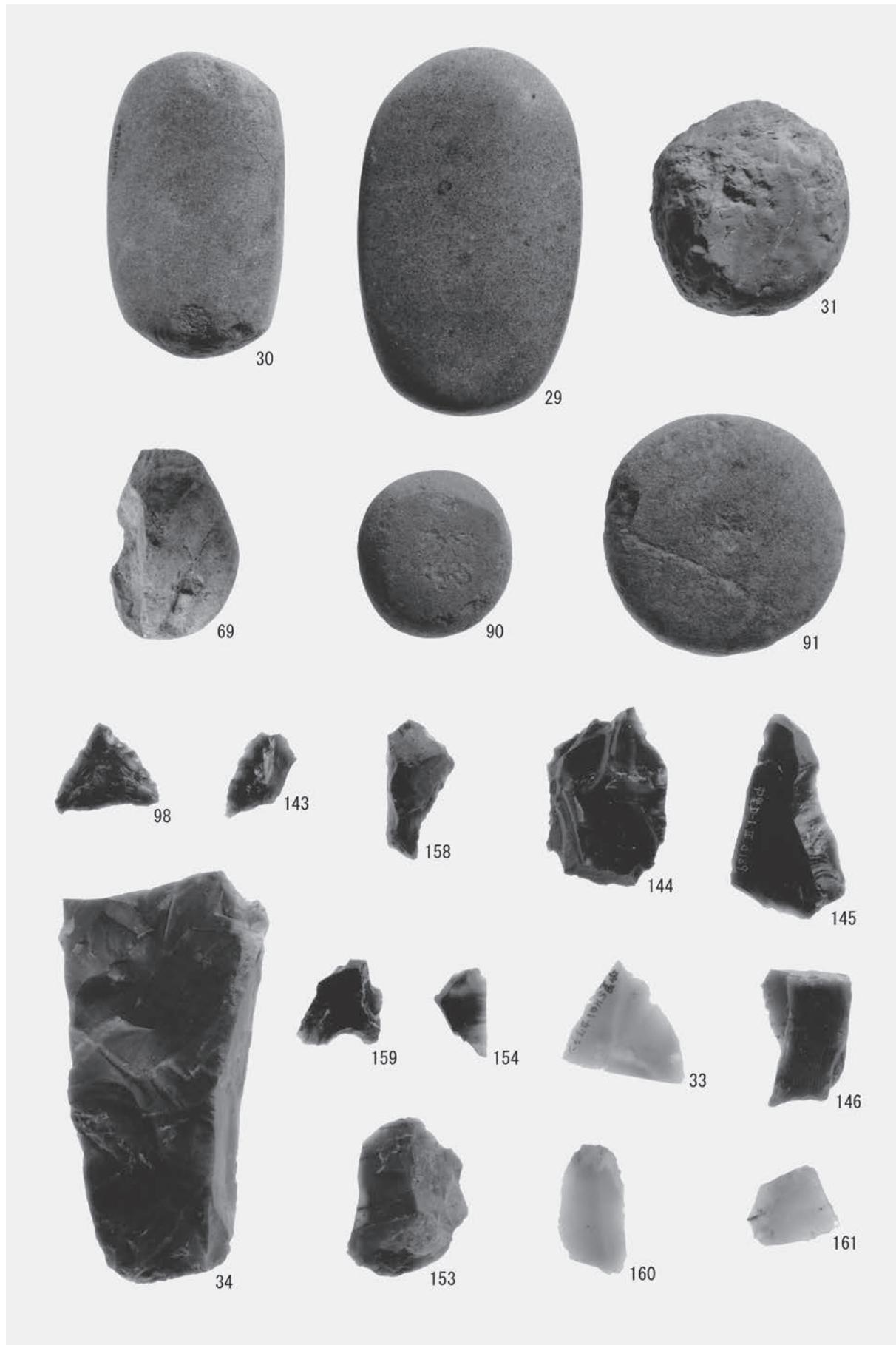
土器V類



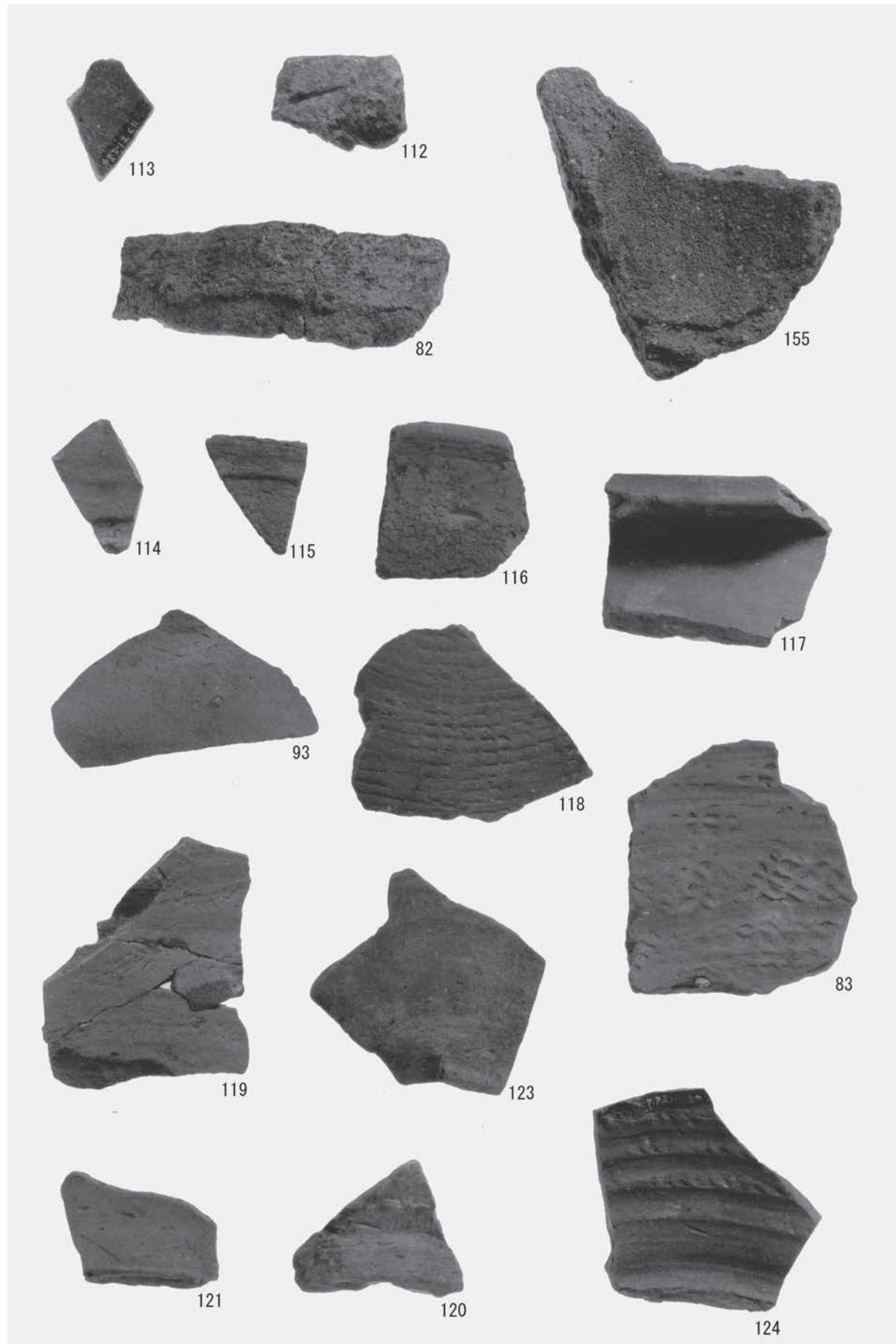
土器VII類～XII類



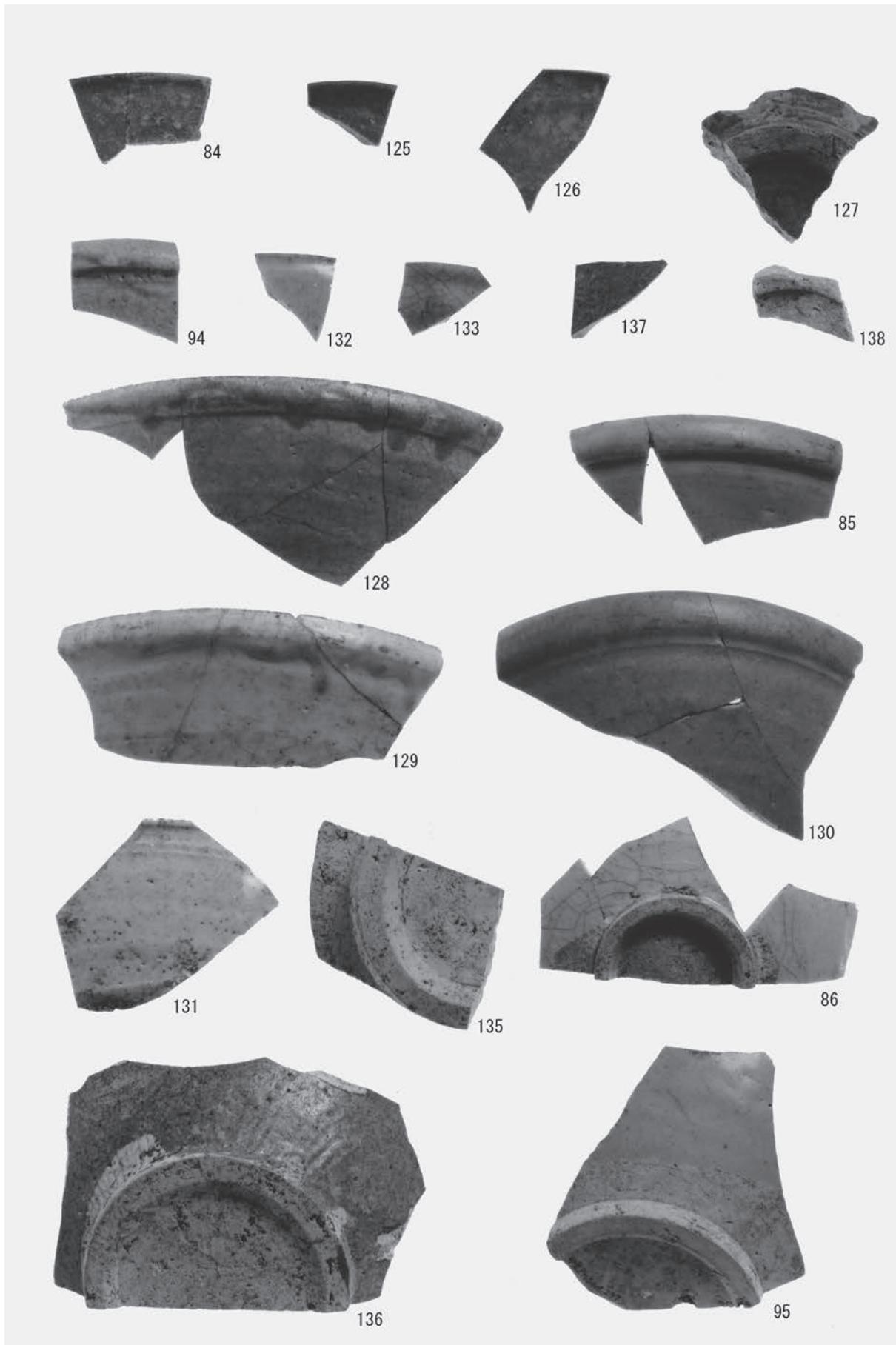
石斧



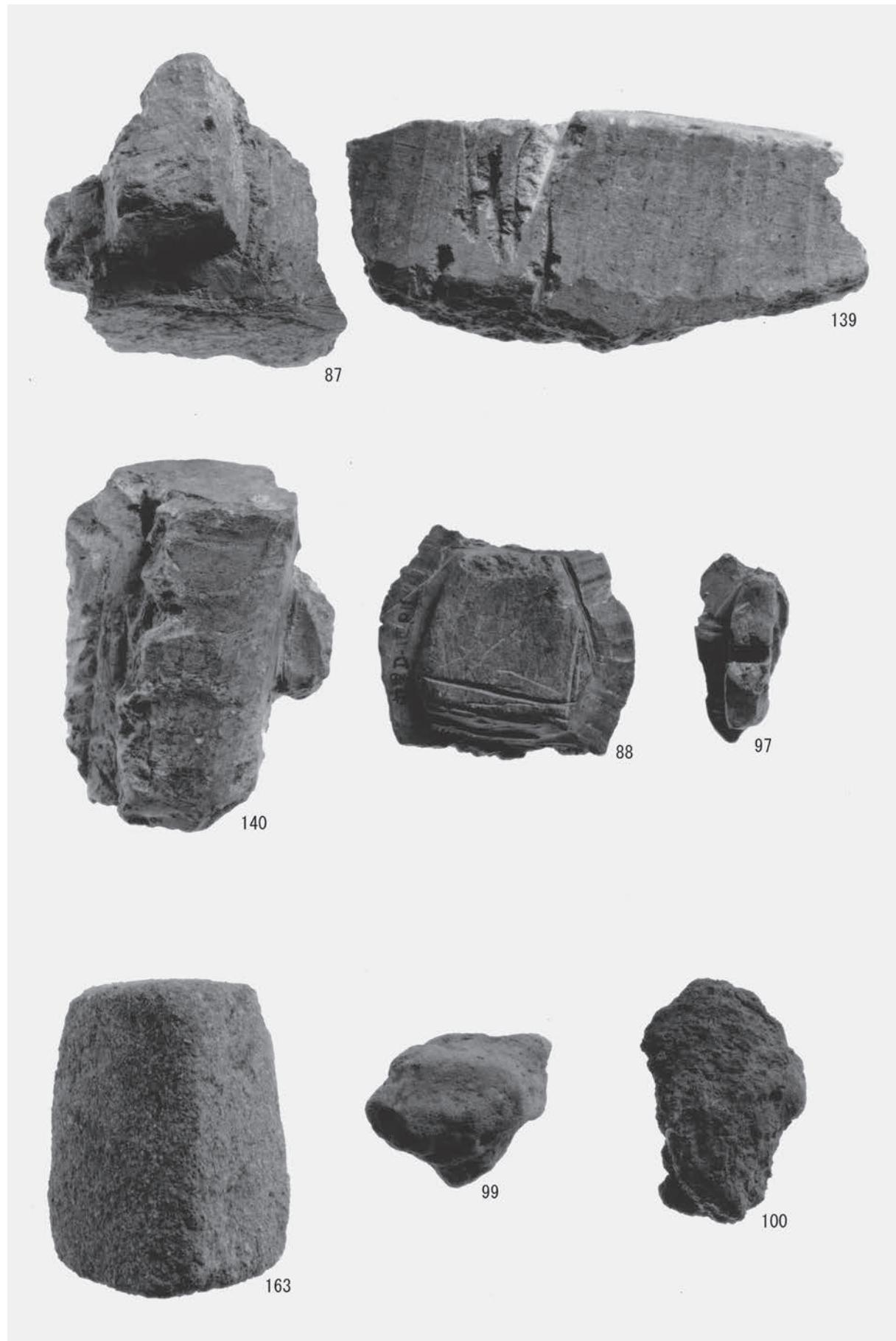
磨敲石・石鎌・石錐・スクレイパー・抉入石器・楔型石器
二次加工剥片・使用痕のある剥片・微細剥離痕剥片



黒色土器・滑石混入土器・布目压痕土器・カムイヤキ



中国陶磁器



滑石製石鍋・滑石製品：三角壩形石製品・轍の羽口・鉄滓



92



163

カムィヤキ・三角壇形石製品（立面）

天城町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
公営住宅建設事業（前里新団地）に伴う発掘調査報告書

中 里 遺 跡

発 行 日 2010年3月31日

編集・発行 天城町教育委員会

〒891-7692 鹿児島県天城町平土野 2691-1

印 刷 スタジオ・ミスト

〒891-7101 鹿児島県大島郡徳之島町亀津 7502-1

TEL : 0997-82-1505

